

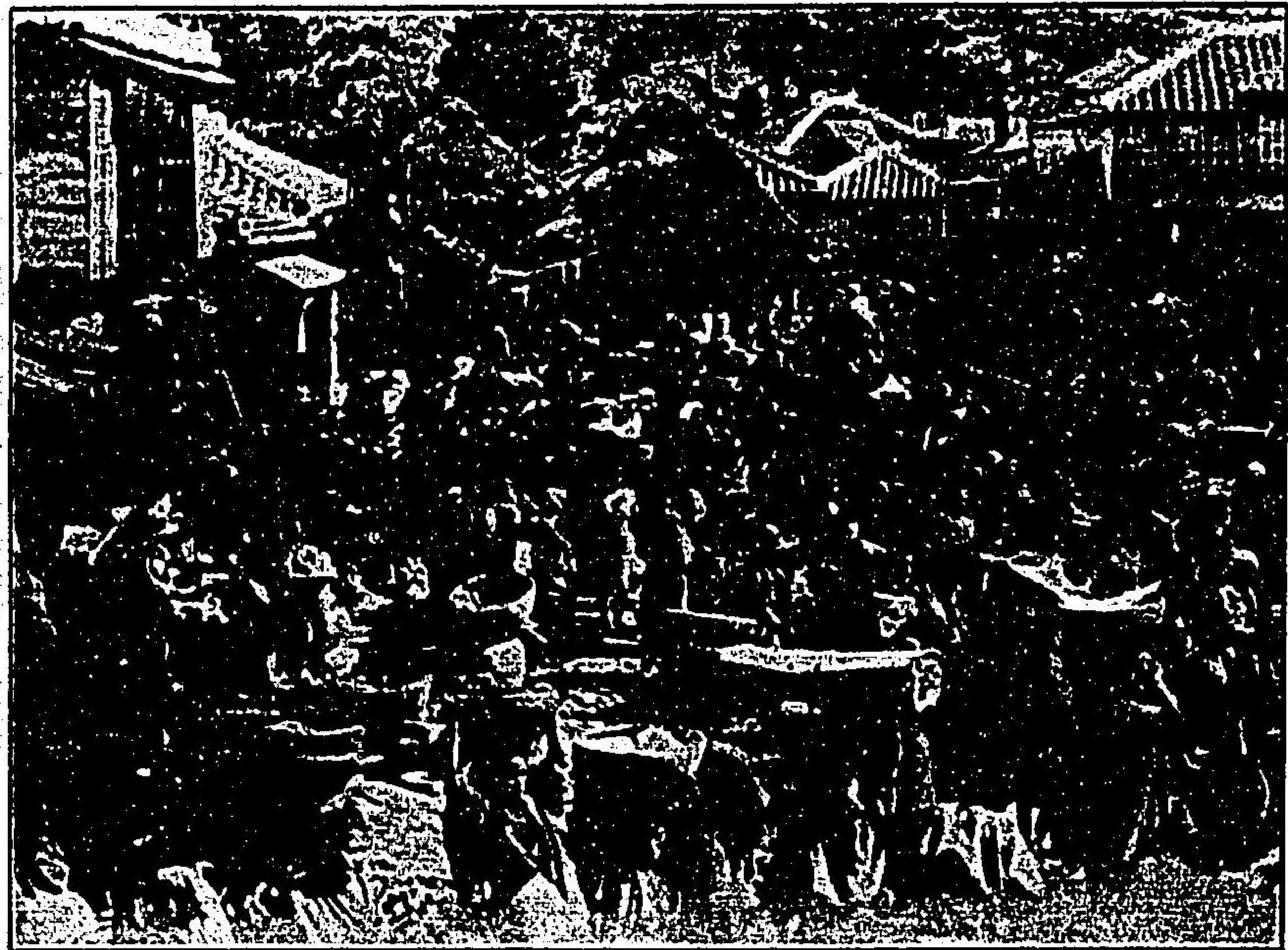
國頭郡

を抱く、灣口に伊計・安城・平安座濱の諸島並列し灣口を扼せるも中城灣と齊しく風波を防ぐに足らず、灣頭に石川灣あり帆船の泊地たり。

中頭の西岸は土地や、開け北谷讀谷山は製糖業盛なり。北谷村嘉手納は茂呂木川の岸にあり交通の要衝に當り縣立第二中學校沖臺製糖株式會社第一工場等あり、茂呂木川河口の渡具知は海底電信の上陸地點に當り、上流の漏池は那覇水道の引入口たらんと期せらる、嘉手納に近く南方の野國は野國總管の墓を以て名あり、總管は野國の人、久米村の總管たり、慶長年間甘藷種を支那福建の地より輸入し、從て又日本全國に傳へし人にして蕃藷大王として尊崇せらる。

國頭郡、國頭郡は一に山原と云ひ、山又山にして耕地に乏しく東岸殊に然りとす、西岸本部半島一帶及東岸金武村は製糖業を主とし其他は林産地たり、近來植林を始むるに至り稍見る可きものあり。中頭との境に高尾山あり、地文上及人文上の境界をなし、嚴に國頭郡と南部とを分てり。

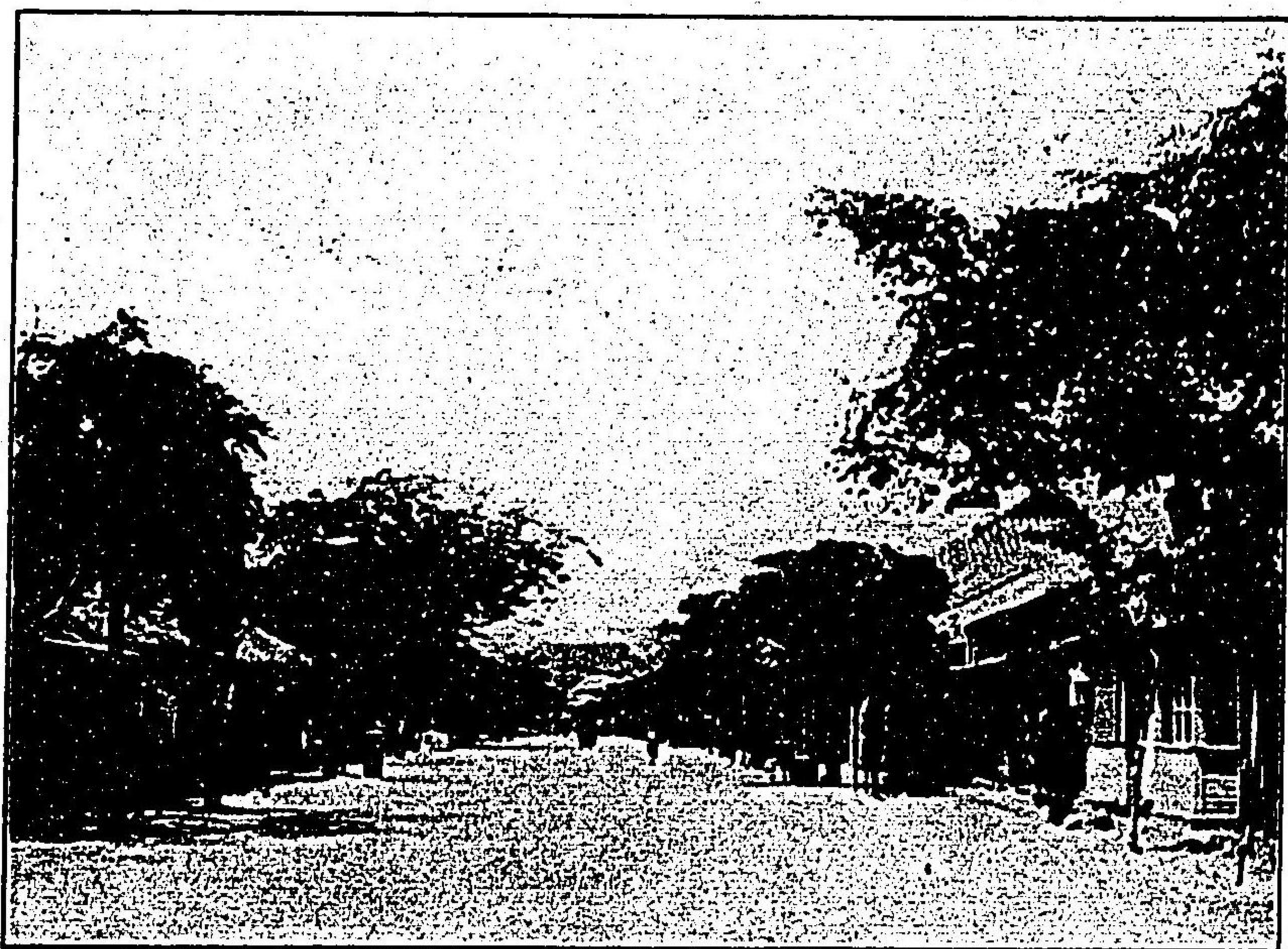
新街道より國頭に入れば恩納岳の麓に恩納村あり、是れより北二里、名嘉



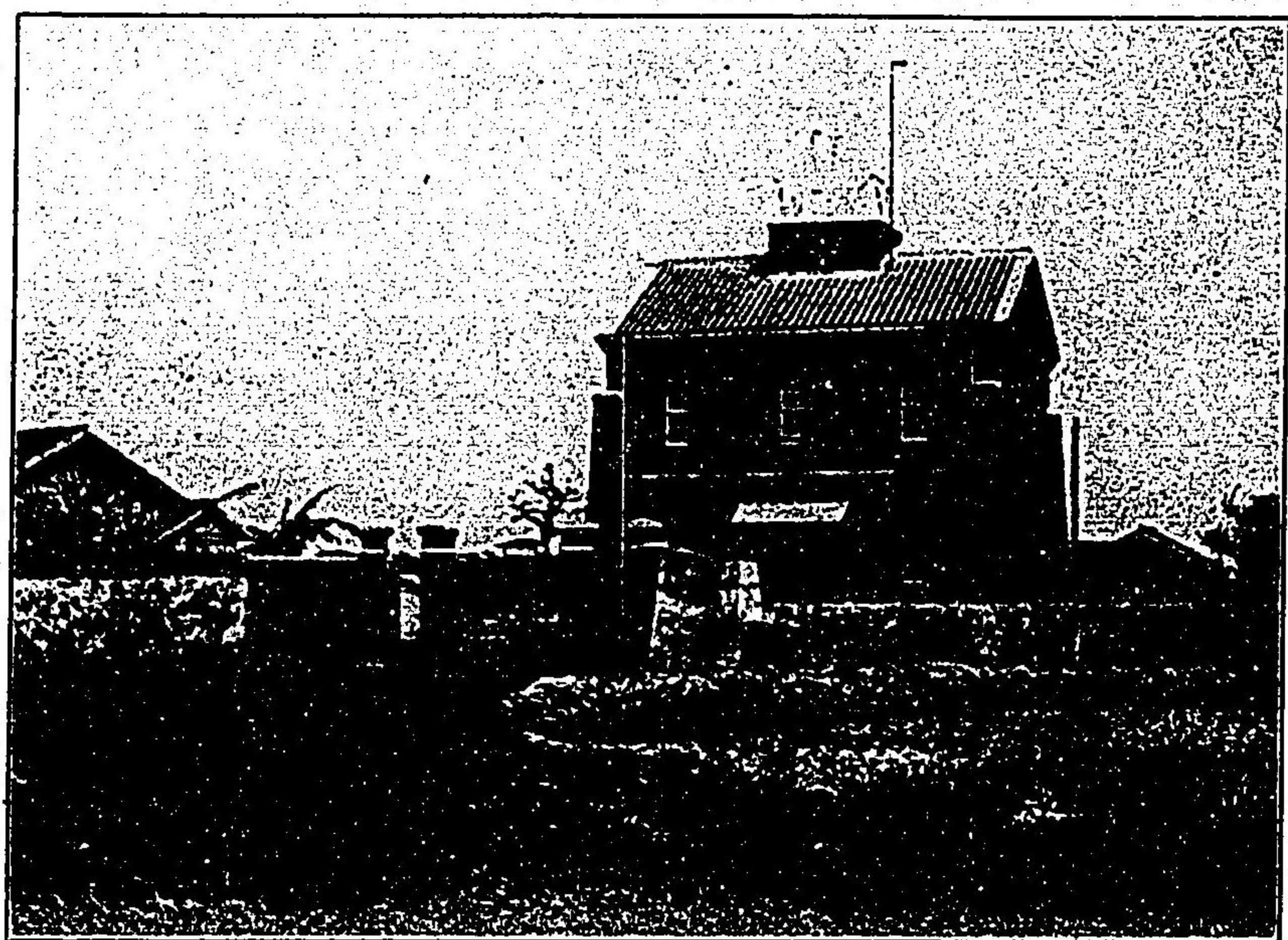
場市町滿糸島繩沖 (甲)



址城城中島繩沖 (乙)



護名島繩沖(甲)



所候測島垣石(乙)

(第十八圖)

名護

慶良間島

眞に至るまで新道已に通じ、那覇より乗合馬車の便あり。

名護は本部半島の岐出する所に位し、同名の灣に臨み、水陸の要衝に當り、那覇との間に小汽船の往來絶えず、國頭地方物資の供給集散地たり、郡役所及縣立農學校あり。砂糖材木等を輸出し日用雜貨を輸入す。(第十八圖甲)

本部半島は中央に嘉津宇岳屹立し、周圍は土地豊穰にして農産に富み、本部村渡具知は漁船の輻輳する所たり、又半島の東北隅運天港は自然の良港をなし、永萬の昔爲朝の上陸地と稱せられ、慶長の役薩軍の上陸せし所なるも、後背山岳に圍まれ大なる港市をなすに至らず、海軍給水炭庫あり、前に古宇利島屋我地島盆石の如く横はり風光佳なり、運天より東岸に沿ひて南すれば羽地平野あり、羽地大川之を貫流し羽地米の産地たり。半島の對岸の伊江島は砂糖の産地をなす。國頭の東北端邊戸岬は數十仞の斷崖をなし海風恒に強烈怒濤泡を嚼み壯觀を呈す。

慶良間島、那覇港より小蒸汽に乗りて慶良間島に至れば座間味島あり其港を阿護の浦と云ひ水深く風波をふせぐに便にして那覇築港前は港内に入る能

はざる大船は大風の時は茲に避難するを常とせり、座間味島は鹿の産地として名高く島民は漁業に熟し鯉漁盛にして茲に鑛詰製造會社あり、渡名喜島は豚を産し粟國島は土地瘠せ土民は多く出稼を業とし那覇首里地方に婢女を供給す。

久米島は久米島紬の産地にして工業徒弟學校あり儀間港は小蒸氣船の泊地たり。

伊平屋諸島

伊平屋諸島 國頭郡本部半島の北二十二湮の近傍に散在する諸島の總稱にして島尻郡の管轄に屬す、蓋し船便の都合によると云ふ、列島中最大なるを伊平屋島周圍八里餘とし伊是名島周圍四里野市島(周圍一里)之に次ぐ全島人口七千、伊是名島諸見は現侯爵尙氏の祖先尙圓王の出生地なりと稱せらる。本諸島と沖繩本島との間を伊平屋渡と云ひ古來内地航路の難所として七島灘と並稱せらる。

島

島 島、本縣の最北に位し徳ノ島の正西にある火山島あり島尻郡久米島具志川村に屬す、周圍二里古來硫黃の産出を以て名あり、然れども飲料水に乏し

く、又噴火の虞ありしを以て明治三十七年全島住民を擧げて久米島に移住せしめたり。

東大島

大東島 南北沖の三島あり、島尻郡に屬す、就中南大東島は沖繩島の東方二百十二湮にあり最大にして周圍七里、全島珊瑚礁より成り中央に窪地あり、飲料水に乏しからず、今玉置某の開墾地にして人口約二千、多くは八丈島よりの移民にして、琉球人の移民は四百六十名に過ぎすと云ふ、毎二ヶ月一回便船あり、島形圓形にして岸壁をなせるを以て上陸困難なり、たゞ風下を選びて上陸し得るのみ。

北大東島は南大東島の北北東四里にあり周圍四里全島珊瑚礁より成る。今玉置某島の開墾する所にして其製糖地たり。

沖大東島は一名ラサ島と云ふ南大東島の南方約九湮にあり明治二十九年始めて本邦の領土となれるものにして島形すべて前者と同じ燐鐵を産しラサ島燐鐵株式會社之を經營し鐵質良好其量豊富と稱せらる。

宮古諸島

宮古諸島 宮古島は諸島の首島にして那覇を距る西南百八十七湮の海上に

あり、全島殆ど珊瑚礁より成り土地平坦にして最高地點も僅に百米を過ぐるのみ、周圍二十六里七町、伊良初周七里池間周一里八町大神(周三十町)來間一里(下地)一里二十町多良間(四里)水納(一里)の七島を合せて宮古郡とし、平良下地城邊伊良部多良間の五ヶ村に分ち島廳を平良村西里に置く、人口四萬七千餘、主として農業に従事し漁業機織を副業とす、砂糖牛馬、鯨節上布阿且葉を産す、漲水港は平良村の西岸にあり、緩き弧状をなして西北に口を開く、船は岸を距ること一海里の沖に泊するも北西風には近傍に避難港なく往、覆没の危険を來すことあるを以て、夏季那覇若くは八重山を發する船舶は、天候の安全を保障するにあらざれば同港に向はざるなり、西里は港頭にあり一名五箇と云ふ、荷川取東仲宗根西仲宗根西里下里の五邑集りて一市街をなし、人口一萬餘、郡内第一の繁華の地にして、島廳以下官公衙茲にあり、島内道路は此處を中心として、北東南の三方に派出し、北するものは海岸に沿ひて北端狩股に達し、東するものは島の中央を貫きて砂糖の産地たる城邊村の首邑福里に達し、南するものは海岸に沿ひて與那覇灣頭にある洲鎌與那覇等に通ず、

八重山諸島

石垣島

近年道路開設の急務を悟り、當局者着々改善を加へつゝあり。

漲水港を隔て、前面に伊良部島あり、人口六千餘。

多良間島は宮古島と石垣島の中間にあり人口二千六百島民は漁業に従事す

八重山諸島、八重山諸島は石垣(周二十二里)西表(周二十里)竹富(周二里)黒島(周二里)上(周一里)十町(下)離(周二十七町)小濱(周二里)鳩間(周三十町)波照間(周三里)二

十町(與那國)周七里の十島及四五の無人島よりなり八重山郡を成し、石垣大濱

武宮與那國の四ヶ村に分つ總面積四十一方里人口二萬二千あり。

本郡は山岳重疊し森林深く、加ふるに風氣と稱するマラリヤ熱ありて、山

間の地は却つて人口漸減の傾向あり、住民は農業漁業家内工業に従事し、主

要産物は鯨節砂糖米阿且葉帽原料等にして、沿海他方には近來他地方より移

住するものに多く十年の後は面目一新すべし。石垣島は續日本紀に信覺と

してあらはれ、諸島の首島にして中央の高峯於茂登岳より發する宮良川、轟川

名藏川荒川の四流の沿岸には稍平地に富み、水田開け、山麓丘陵地は多く牛

馬の放牧場とせらる。首邑は一に石垣四箇と云ひ、登野城大川石垣新川の四

字合して一市街をなし、人口一萬餘市況稍盛なり、島廳をはじめ中央氣象臺直屬石垣島測候所此地にあり。(第十八圖、乙)

此地は夏期屢低氣壓の中心に當り、颱風の來襲あるが故に各戸高き石垣を以て圍らし、加ふるに福樹皇良部樹の如き防風樹を家の四周に植ゑ、茅葺の屋根には繩網を張る等他と其趣を異にせり、石垣島の名稱は又之に出づるにあらざるか。

石垣港

四箇と竹富島との間を石垣港と云ふ、實は一の沖合のみ、那覇臺灣航路船舶の錨地たり、四箇の西方の大灣を名藏灣と云ひ、之を擁する半島を屋良部半島と云ふ、半島は其全部を擧げて牛馬の牧場とす、半島咽喉部崎枝は内地臺灣間海底電信線の上陸地點たり。

道路は東方大濱村まですでに郡道完成し車を通すべし、而して島内の道路はたゞ海岸に沿ひて通するのみ。

西表島

西表島は丘陵重疊人煙稀少、島の内部は殆ど人跡未到の所あり、マラリヤ熱の巢窟にして、古代に發達せし村落は今は大方零落し、僅に西方船浮港に

面する部分及東岸小濱黒島上離(上新城)下離(下新城)等に對する部分のみや、開けり、船浮港は西岸船浮灣内にあり、灣頭内離外離の二小島あり、港内は水深く區域廣くして絶好の錨地たり、夏期颱風の節は石垣島にある船舶は茲に避難するを常とす、港の岸頭及内離島には石炭を産し其の石炭は臺灣航路先島航路の船舶及首里那覇薪炭用に用ひられ沖繩産業界の一富源たるを失はず、茲に海軍給水炭庫を設く。

竹富島は四箇の對岸にあり、四箇の濱より之を望めば白砂綠林の間に人家隱見す、茲に八重山村役場を置く、小濱黒島上下離島等皆その附近にあり。鳩間島は西表の北にあり三十町に足らざる小島なれども、海流の衝に當り鯉漁及鳥賊引の好地位を有し、夏期は各地方及九州邊より漁業に來るもの多し、沖神島は西表島の西南八哩にある岩嶼たり、海鳥の群棲する所にして夏期は西表島の者渡りて之を捕へ又は卵をとると云ふ、波照島間は西表島の南方十二里の海上にあり臺灣の我領土に歸せざりし前までは實に本邦の最南端たりし所なり。諸島中最も健康に適し長壽者多きを以て名あり。

尖閣列島

與那國島は西表島の西方九十海里の所にあり、臺灣へ近く臺灣領有前は實に帝國の最西端たりしなり、マラリヤ熱なく人煙賑盛、與那國米を出し俗に女護島と稱せらる。

尖閣列島、西表島の北、九十里の地點にあり、釣魚島尖閣諸嶼及黃尾嶼の三より成り古賀某氏の開墾地たり、釣魚島は列島中西南に位する大島にして周二里不毛たり、尖閣諸嶼は釣魚島の東方六哩尖岩突起し南北二小嶼あり草を生ずるのみ黃尾嶼は釣魚島の北東十五哩に位し灌木を生ず、諸嶼は何れも海鳥の群棲する所にして鳥類剝製鳥卵鳥糞鳥毛等を産す近海は又漁業に適し鯉魚の産あり。

位置

臺灣島

第一編 地文
第一章 地形

臺灣はアジア大陸極東の縁海に羅列せる花綵島たる、我日本列島の最南部を占むるものにして、東北には沖繩列島彎形を畫きて相連り、共に北方に東支那海を擁し、南方はバシ海峡を隔て、フィリピン諸島を臨み、共に其の内面には南支那海を抱けり。東海南海の間海面緊まりて海峡をなすもの之を臺灣海峡となし、其の幅僅かに九十哩にして本島は之を隔て、西方支那福建省に對せり、是等東支那海より臺灣海峡を経て南支那海の西部に及べる縁海は、一帯にアジア大陸の東岸に横はれる大海棚を被へる淺海に過ぎずして、臺灣島は實に此海棚の邊緣に峙てるものに外ならず、島の東岸は直に太平洋の深

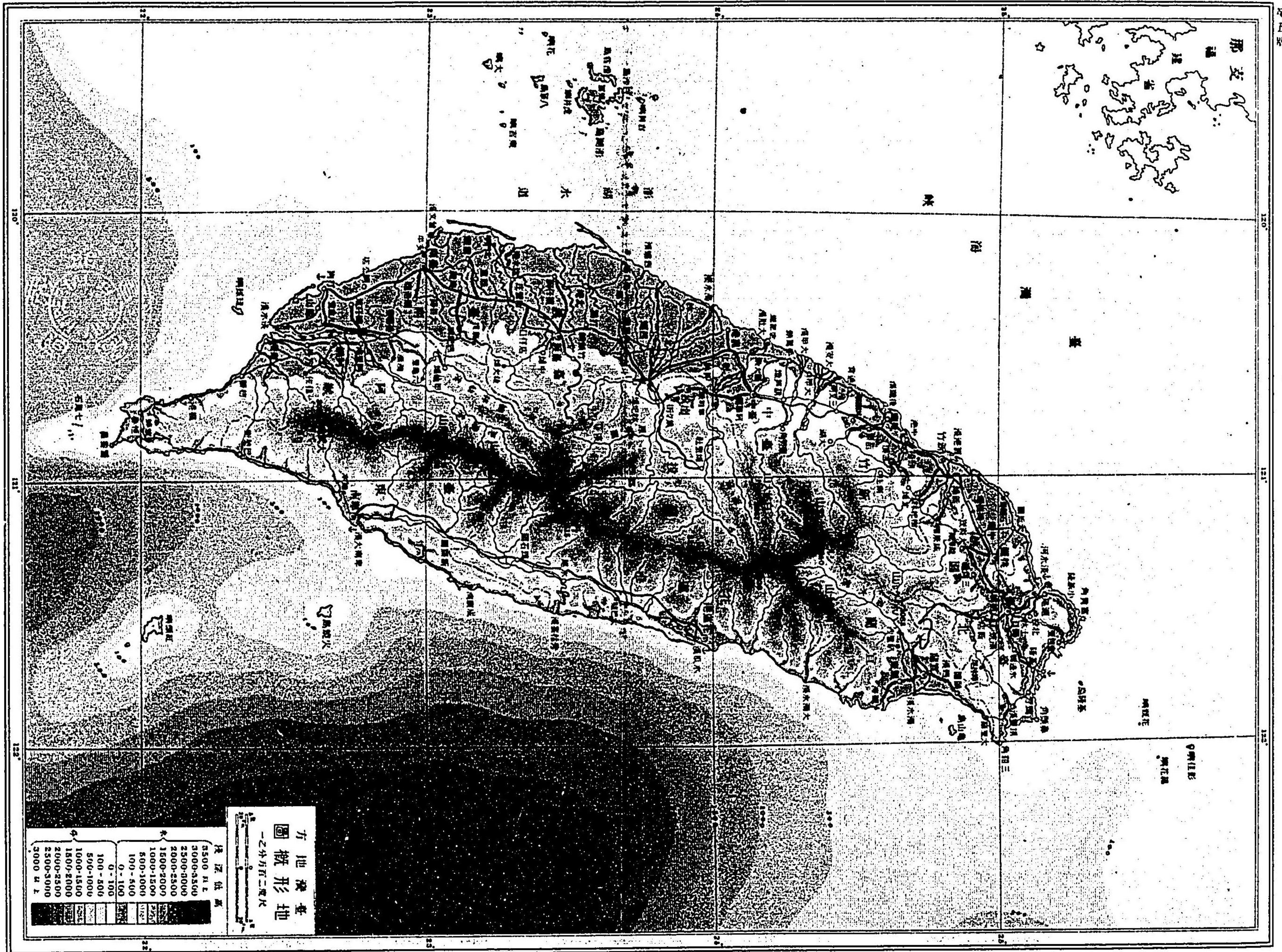
海床に臨み、琉球列島の外側に沿ふて横はれる琉球海溝は延びて本島の東部の海底に及べり。

臺灣は本島及び數個の島嶼よりなる。島嶼の主なるものは、臺灣海峡に横はれる澎湖群島、西南海上に琉球嶼及び太平洋方面に於ける、紅頭嶼、火燒島及び龜山嶼、北方にある基隆島、棉花島、彭佳島等の小島なり。

本島は北緯二十一度四十五分より二十五度三十八分に及び、又東經二十度二分より百二十二度六分の間に位し、屬島を加ふれば其の西端は澎湖群島水坡湧花嶼の西端東經百十九度十八分三秒より、棉花嶼の東端百二十二度六分十五秒に及び、南は北緯二十一度四十五分二十五秒七星岩南端より、北は彭佳嶼の北端二十五度三十七分五十三秒に及び、而して本島の中部は北回歸線の通過する所なり。(第十九圖、甲)

臨時臺灣土地調査局の調査する所によれば、本島并びに屬島の面積は略九州本島(二千三百二十方里)と相等しく二千三百二十四方里を占め南北の長さ九十七里半、東西三十六里、周回二百九十里を數ふ、而して本島の形状は本邦諸島

面積

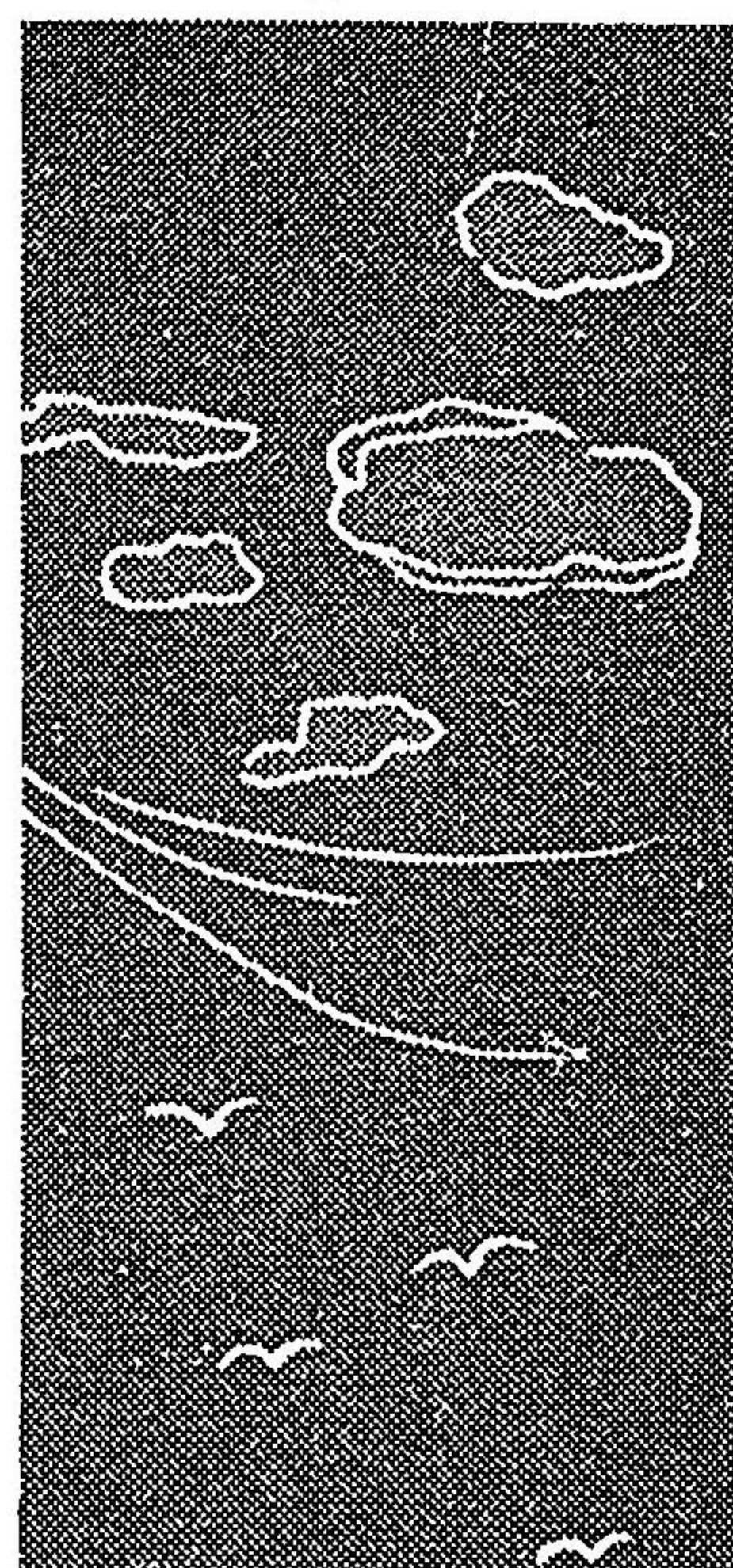


臺灣地形概圖
 比例尺 1:250,000
 1950年12月二版

高度係數

| |
|-----------|
| 3500 以上 |
| 3000-3500 |
| 2500-3000 |
| 2000-2500 |
| 1500-2000 |
| 1000-1500 |
| 500-1000 |
| 100-500 |
| 0-100 |
| 100-200 |
| 500-1000 |
| 1000-1500 |
| 1500-2000 |
| 2000-2500 |
| 2500-3000 |
| 3000 以上 |

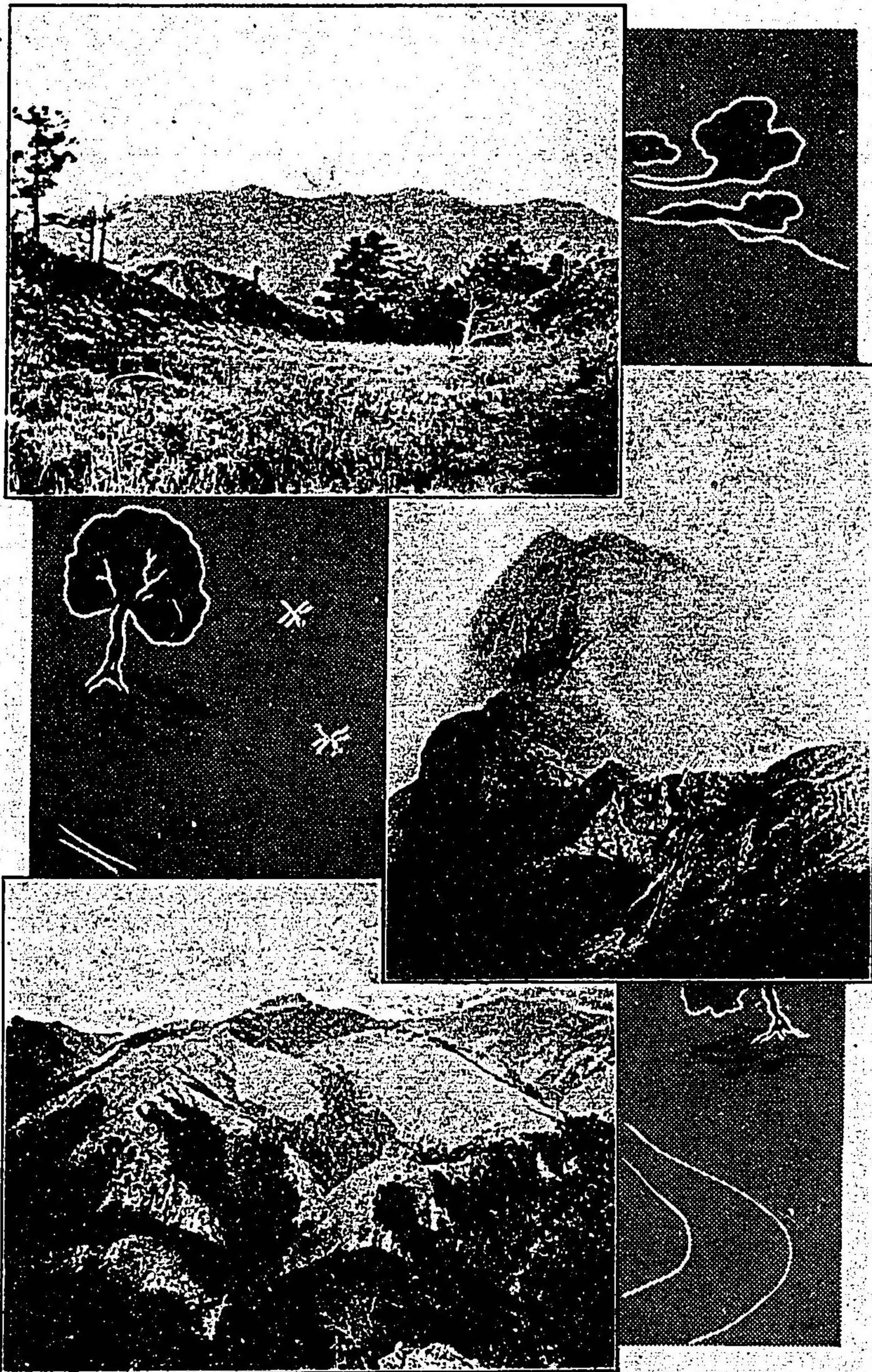
(甲) 臺灣嘉義水堀頭にありし回歸線標



(乙) 臺灣シルビア山遠望 (第十九圖)

(乙) 新高山頂

(第二十圖)



(甲) 東方より見たる新高山

(丙) 新高山の東面

地形

山系

中最も單調なるものにして、其の海岸には半島岬角港灣島嶼等の出入參差するもの甚だ少きを以て、海岸線發達は本邦他の諸島に數歩を讓るものあり、殊に本島と面積を等うせる九州島に比し、其の差最も著しく彼が海岸線發達の程度五なるに對し、本島は僅かに一八を數ふるに過ぎざるを見るなり。

本島の地形は畧紡錘狀をなし、北々東より南々西に延亘せり、之れ本島を構造するところの山脈の趨勢と密接なる關係を有するに依るものなり、而して島は垂直的肢節に富み、高山は巍峨として聳立し、丘陵平野相連なりて是等の排列は、極めて整然たるを見る。

今先づ本島の山系に就て之を概観するに、本島を構造せる山脈の系統は、其の斷面を本島の東北海岸に露はせるものと云ふを得べく、即ち基隆港の西北野柳鼻より宜蘭平野の南方ドーム角に至る一線は、正さに其の山系を横斷せるものにして、此の間に在りては、岬角海灣の出入之を本島他の沿岸に比すれば稍、その多きを見る。これ本島の主軸をなせる大山系は、尙東方に連續せるものなりしが、此部分に於て挫折して琉球海溝に陥落し、爲に出入參差

臺灣山脈

宛も巨木の折口を見る如き觀を呈せしに外ならず。今本島の山系を概観するに本島の中央より少しく東に偏し、本島の脊梁をなして走れる主山脈あり、主として品質剝岩古生代中生代の粘板岩よりなり、山勢高峻にして高山性の特色を具ふ。而して其の西方にあたりては、之に平行して低山性の山脈あり主として第三紀層よりなる、尙之に並行し、其の西方には、低き臺地の擴延せるありて、其の麓には幅廣き西部平野發展し、延びて海岸に及び淺き洲渚となり、徐に臺灣海峡の淺海底に連なる。一方に於て主山脈の東方には、之に並行せる構造谷を隔て、第三紀層并びに火山岩よりなれる臺東山脈の延亘せるありて、山脈の東部は直ちに太平洋に急斜す。要するに本島は地形比較的規則正しくして、高低數條の地帯は島の主軸に沿うて略南北の方に并走せるものと云ふを得べし、今之より是等山脈に就て詳細に觀察せん。

主山脈并に其以西の山系并に水系

本島の中軸を構造する主山脈は之を臺灣山脈と稱し。本島の北東角をなせる宜蘭平野の南北に於て其の端を起せるものと云ふを得べし。實に宜蘭平野

宜蘭灣地

棲蘭山脈

南湖山脈

は臺灣山系挫折部に於て深く彎入せる一陥落地をなせるものにして、吾人は之を宜蘭灣地と稱せんと欲す、此灣地の南北を擁せる山脈は要するにこの山系中の主山脈が二分して走れるものに外ならず、而して其の北方の山脈は、棲蘭山脈と云ひ、地形上本島の最東角をなせる三貂角に起り、山勢高峻にして、宜蘭平野と淡水溪の一支流北勢溪との分水嶺をなし、平野の北に於て、三角崙山(一〇二八米)を起し、西南に延びて阿王山(一四一九米)となり、淡水溪の支流たる南勢溪と、宜蘭平野を灌漑せる濁水溪との分水嶺を造りつゝ、棲蘭山(一九一七米)バホークル山(二〇八五米)を起し、更に西南に進みボンボン山を経て、淡水溪の本流たる大崙炭溪と濁水溪及び房裡溪との分水嶺をなし、大霸尖山(三三九四米)秀立す。脈は更に南に轉じ、濁水溪及び大甲溪の水界にあたり、本島北部の最高峯たるシルビヤ山一名雪山(三九三九米)の聳ゆせるを見る。之より山嶺少しく東に變じ、更に畢祿山(三五七六米)を起せり。(第十九圖乙)

宜蘭平野の南方を擁せる山脈は、即ち南湖山脈にして、蘇澳灣に起り、太白山(二九七米)双生山(一〇二一米)を経て次第に西南に轉じ、三星山に至りて

漸く高く、次で南湖大山(三六六七米)を起し、更に西南に走りて畢祿山に會す。濁水溪は兩山脈の間を流れ其の深く陥没せる處に至りて俄かに分岐し、三角洲發展し、こゝに山間の別天地宜蘭平野を開展す。南湖山脈は一面濁水溪の溪谷に傾くと共に他方に於て、直ちに太平洋に傾斜し、二三の支脈を放ち其の海岸に臨むところは絶壁をなし、本島海岸中最も峻嶒なる處と稱せらる。畢祿山に於て、支脈南湖山脈を合せたる主山脈臺灣山脈は、之より略正南を指し本島の中央に向ひ、極めて高峻なる連嶺を造り、其の構造の非對稱的たると共に地形亦非對稱的にして、西方に向つては山岳重疊、次第に其の高さを減じて長く相連なるも、東方に向つては急傾斜をなし、臺東の構造谷に臨む。従つて本島の分水線は著しく東偏するに至り、連嶺の峰頭は急峻を極め、殊に其石灰岩よりなれる地方に於ては絶壁をなし、峨々として雄大の觀を呈す。今是等の峰頭に於て著しきものを述ぶるに、畢祿山の南方に合歡山(三九三九米)蕃菜山(三三九四米)能高山(三三九四米)安東郡山、丹大山(三五一五米)等あり、丹大山より分れ嶺は少しく西に折れ、秀姑巒山(三六五二米)を起し、

再び轉じて南方に向ふ、而して本島第一の秀峰たる新高山は秀姑巒山の西方にあたりて簇立す。秀姑巒山より南方に走る分水嶺は關山(三六六六米)小關山(三二五五米)卑南主山(三六三六米)を起し、更に知本主山(二七二七米)霧頭山(三〇三〇米)大武山(三〇六〇米)南大武山(三〇〇〇米)等となり、更に南方に進むに従ひ、本島の南端に至り、地形遂かに緊縮せるところは、粘板岩の地層其の跡を没して第三紀層之に代り、山勢次第に衰へ、黒龍山(一〇四八米)蚊罩山(六七五米)老佛山(六七三米)大山母山(三二五米)等の丘陵を造り、終に島の南端鷺鑿鼻の岬角に終る。

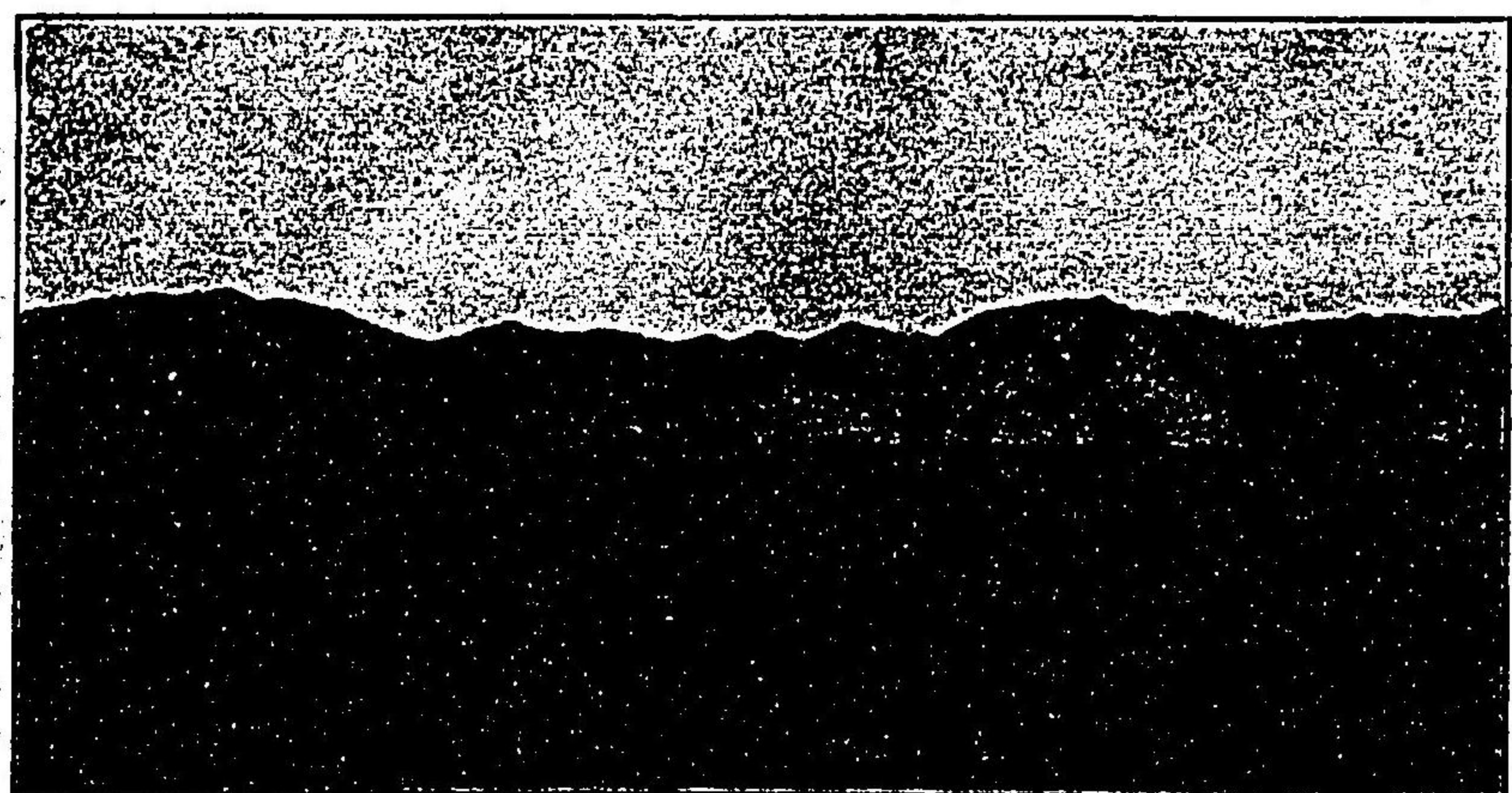
此の主山脈は本島の分水嶺をなせるものにして、其の東斜面は前述せし如く、急斜にして比較的單調なる側谷其斜面を穿ち相並行して東麓に直下するも、西面は之に反して、其斜面大なるがため、河流の如きも、概して横谷をなし西流するも、其の系統前者の如く單純ならずして時に流路を變じ、山脈に並行して縦走し、この山脈間に深刻なる縦谷を作り之によりて山脈も亦數列に分たること少なしとせず、殊に本島の中部地方に於て此種の地形を見る

ことを得べく、例之この地方を西流する濁水溪の流域の如き、其の上流は二分して、一は北方より南流せる本流をなし、一は、南方より北流する一大支流郡大溪をなし、兩者全く相對して流れ來り、以て主山脈に平行せる一大溪谷を造りこゝに郡大山脈の連嶺を分つが如きは殊に其の顯著なるものなり、又本島の南部に於ても、下淡水溪の上流をなせる筆濃溪、楠仙溪の如きは何れも、縦谷を造りこれによりて數列の山脈を造れるを見る。

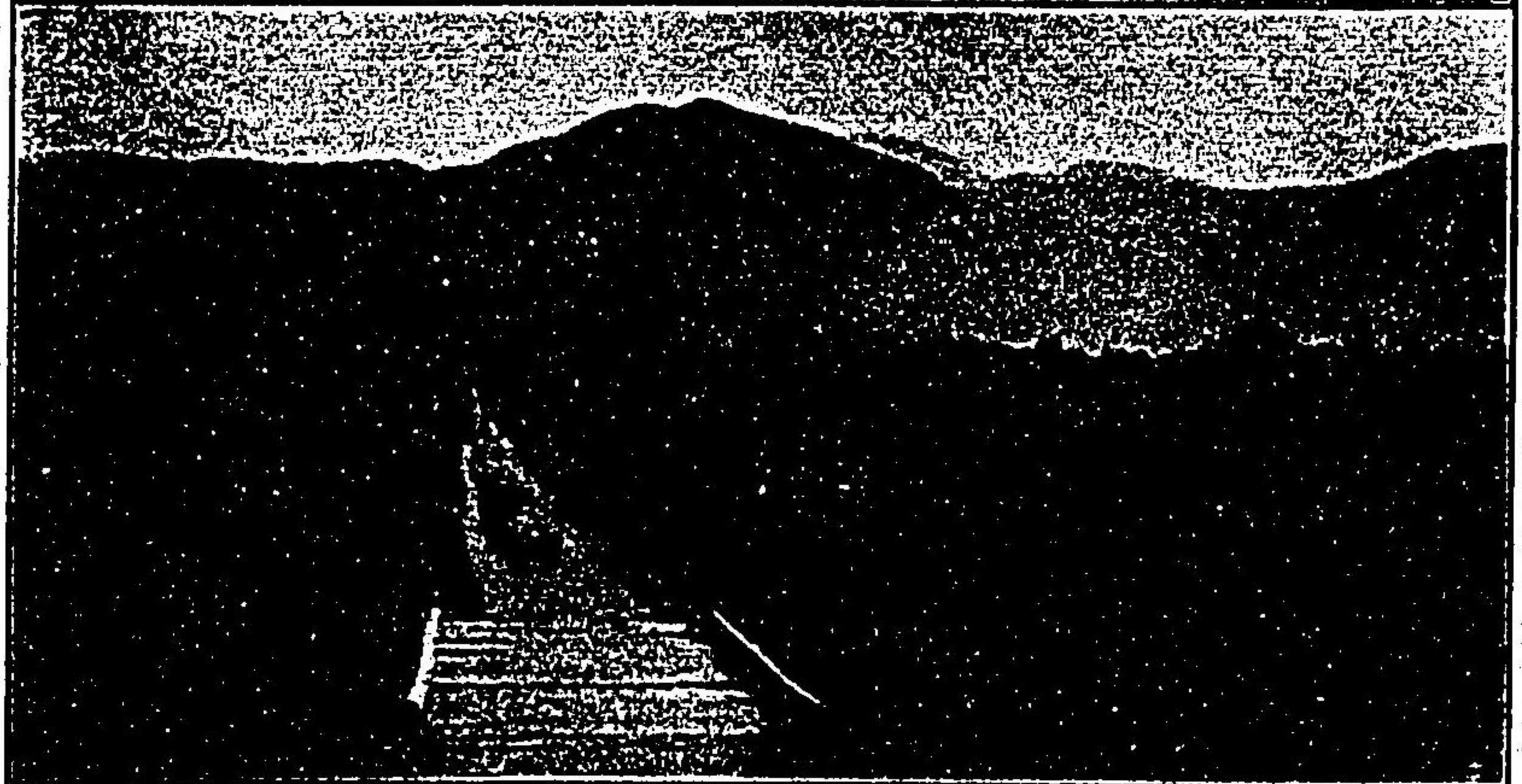
新高山系

新高山系は主山脈の西方に峙立せる群山にして、本邦の最高峰をなす、今臺灣總督府の調査するところによれば、この群山は中央分水嶺の秀峯たる秀姑巒山の西方に當り濁水溪の一支流たる原有蘭溪の源地と、下淡水溪の支流筆濃溪の源地との相背きて鞍部をなせる地を隔て、別に一群をなし簇立せる一山系にして、特に之を新高山系と云ふ。この山系の中央にある主峰は之を嘉義新高と稱し海拔三千九百六十二米を占め、實に本邦第一の高峰をなせるものにして、支那人は之を祿山と呼び、外國人は之をモリソンと稱せしものなりしが、明治三十年明治天皇の聖旨に基づき之を改めて新高山と稱

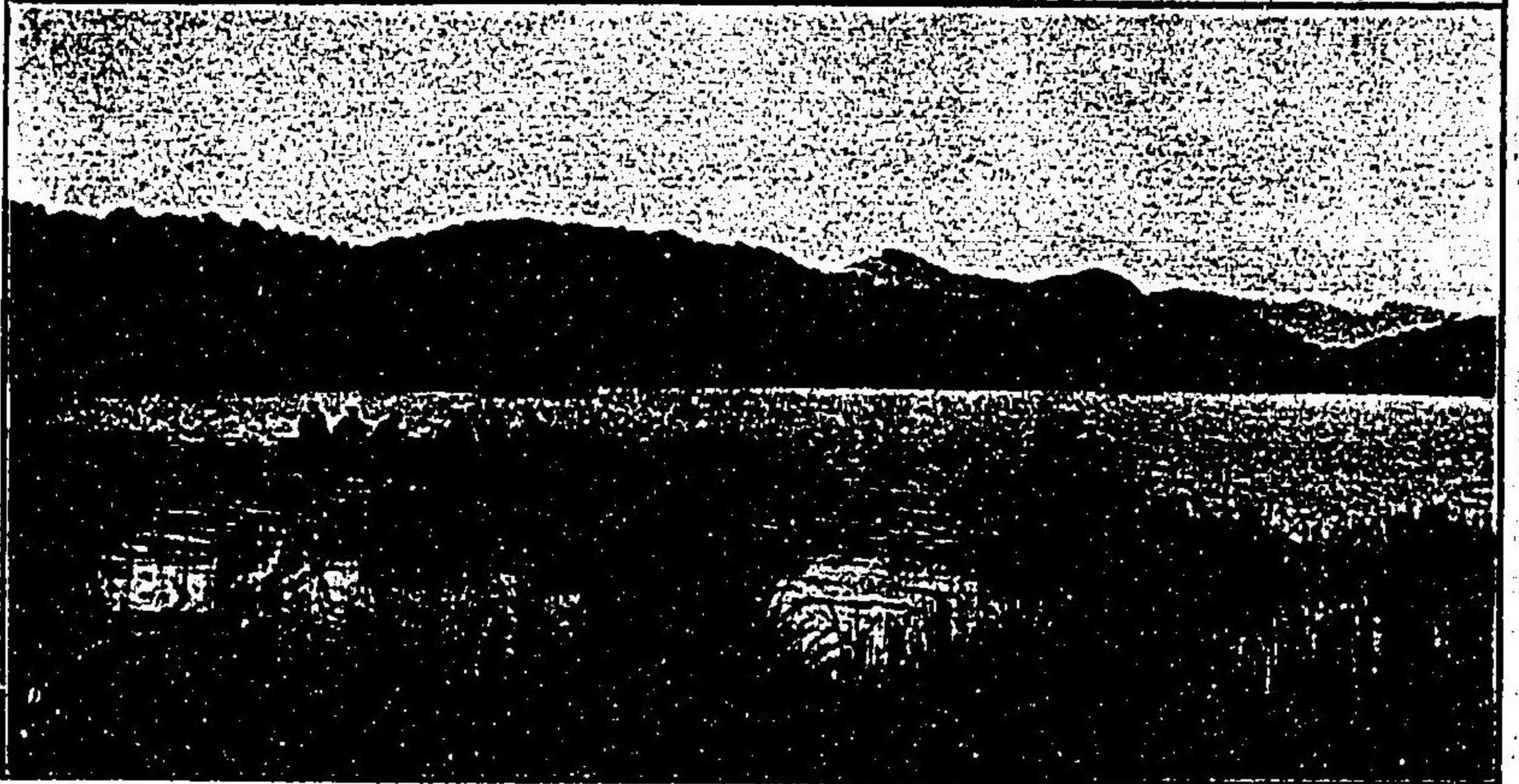
(甲) 南投廳下、火炎山



(乙) 埔里社盆地

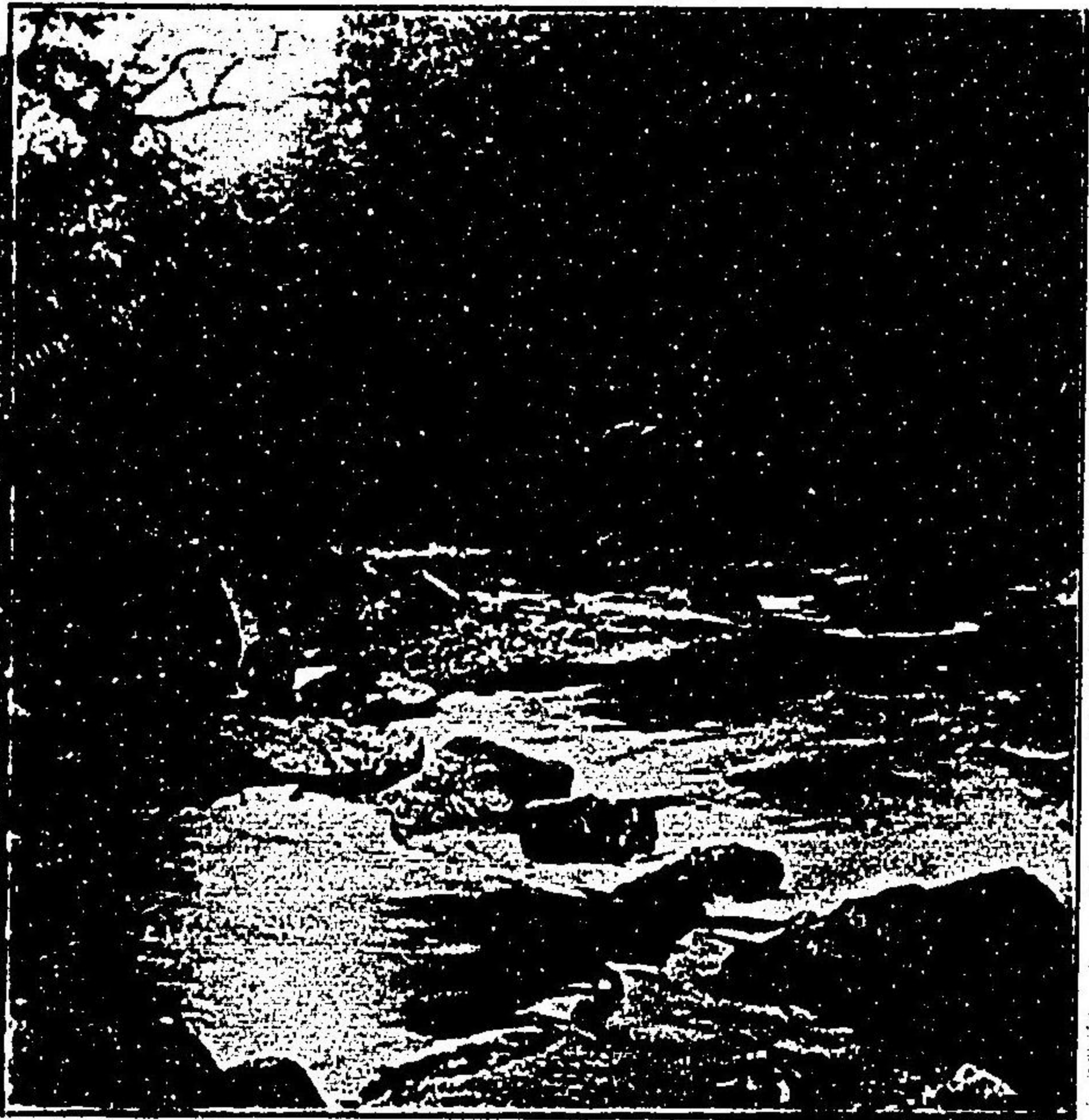


(丙) 水社日月潭



(第二十一圖)

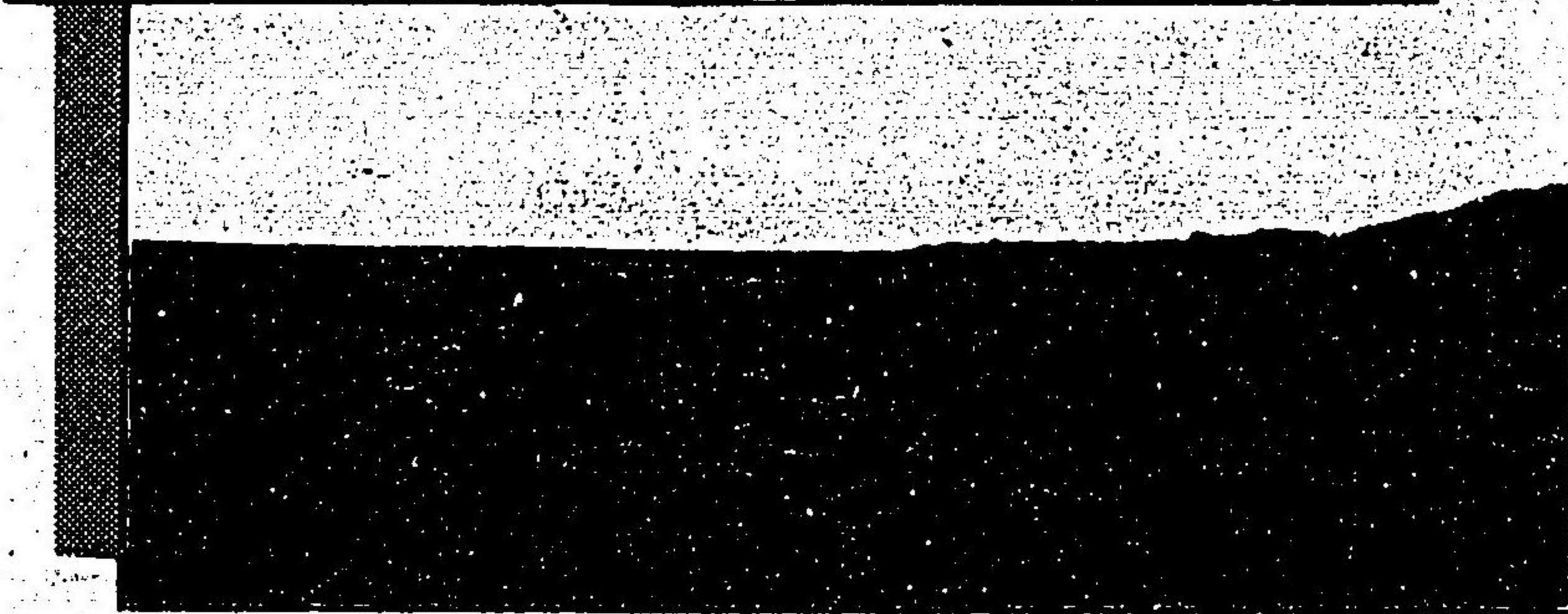
(甲) 埔里社附近峡谷



(乙) 山地を離るゝ濁水溪



(丙) 平野に出でし濁水溪



(第二十二圖)

せしなり。此の主峰の北にあるものは北山又は斗六新高と呼び、海拔三千八百六十七米に達し、南方に在るものは南山又は臺東新高と稱し、三千八百六十九米の標高を有す。尙東には東山三三八八二米西方には西山三五四四米等の聳立せるを見る。(第二十一圖、甲、乙丙)

本山麓と秀姑巒山との間に住せる八通關の鞍部は、濁水溪の支流原有蘭溪及び淡水溪の支流笨濃溪の水源地と相迫まれる狹隘地に位し、山脊の低處を占め、海拔二千八百四十米にして昔つて清國の領たりし時、光緒元年吳光亮が濁水溪岸の集集街より、臺東平野の璞石關に通ずる横斷道路を開鑿せしとき、その四通八達之地なるを以て斯く名けしものなりと云ふ。

新高山麓の北方には、前述せし如く郡大溪を隔て、主山脈に平行せる郡大山脈あり。其の峯頭には、郡大山三二六〇米(番大山三〇六〇米)治菲山(二九一五米)等を造り、北するに従ひ漸く高を減じ、濁水溪の横谷此處に峡谷をなして流る。尙北して日月潭の東部には、水社山(二一八二米)大尖山(二〇九四米)及び埔里社盆地の東方に峙立せる獅魯凹山(二四九〇米)守城大山(二四一九米)等

郡大山脈

を起し、之れより北進するとき、幾多の横谷相並びて流るゝを以て主山脈より分岐し來れる支脈の著しく發達せるため、平行山脈は剗然たる一の連嶺をなさいる如きも、前述せる峰頭を辿らば北方に當りて白姑大山(三三七〇米)の登ゆるを見るべし。之より遙かに東北に轉すれば、大嶽炭溪上流の縦谷を隔て、西北に季頭山(一九五八米)を戴ける山脈の連なるあり。

又一方に於て新高山の南方には其の山脈延びて錢豆雁山(二八三七米)南面山(二八四〇米)等の高峰を戴ける山嶺連亘するも、南方に至るに従て次第に低夷せるを見る。尙是等の外に濁水溪の上流地方に於ては、前述せし郡大山脈と分水山脈との間にあたり濁水溪の支流によりて扼せられ。南に東嶺大山(三六〇二米)東郡大山等の峰頭を起し、北に卓社大山(三二七三米)を戴ける一山脈の崛起するを見る。

凡て是等の山脈は、分水嶺たる主山脈と相並びて、本島の脊梁をなせる高山性山脈をなすものにして、土地極めて峻峻に、其の溪谷の斜面には尙ほ蕃族の跳梁に委するところ多くして地理未だ明かならざるところ尠からず。

後山及び前山

以上述べ來りたる山脈は本島の脊梁をなすものにして、主として古生層中生層の粘板岩よりなり山勢巍峨として高峻を極む。而して其の全部は殆んど蕃界にあるものにして西方平野の住民は之れを汎稱して後山と云ふ、此の大なる連嶺と平野との間に當り前者より低き山脈の起伏せるを見る、汎稱して前山と云ひ主として第三紀層より成り前者の西側に竝行し一の變形を畫けるものにして、西方に赴くに從ひ次第に陵夷し平野に終る。

今此の山脈を観察するに、元來此山脈は一系統をなせるものなれども、主山脈より流れ出づる數多の河流は諸處に深き横谷をなせるのみならず、是等河流の支流は網狀をなして山脈を切解せるため、中央分水嶺の如き規矩整然たる連嶺は必ずしも之を見ること能はず、然れども後山に對する前山の位置を占め長く其の西側に延亘せる状態はこれを指摘するに難からず。今是等山脈中の主要なる部分を觀察するに、此の山脈の先頭は本島の東北端鼻頭角に起り、本島東北部即ち淡水溪の支流たる新店溪並びに基隆溪流域地方の丘陵地をなせるものにして、本島に於ては最も鑛産に富める地域をなし彼の本島

鐵産の白眉をなせる金及び石炭は主として是等の地方より産するものなり。而してこの地方の丘陵は淡水溪の支流によりて切解せられ、二三の小山脈をなし、脈中の山巒は、高距大ならざるも、山勢尙急峻なるもの少からず。今其の支脈につきて之を見るに、淡水溪の支流基隆溪の南方には、五份山、姜仔藁山(七二九米)南港山(三七五米)等を戴ける一帯の山脈あり、此山脈は即ち本島の東北角なる鼻頭角なる草山(七二八米)三貂嶺(五六五米)等を経て延び來れるものなり。更に此の山脈に並行し、基隆溪の上流並びに景尾溪の縦谷を隔てて更に高距約五六百米に達せる一列の山脈横はり、其の南方には北勢溪の縦谷を隔て、臺灣山脈の一部をなせる棲蘭山脈の北部に對するあり、而して一方に於ては、基隆溪の南方に尙同様の丘陵起伏して遂に本島の北端に至り、此處に噴出せる大屯火山彙の諸火山によりて、被ふるところとなる。本地方に於ける重要な河流淡水溪の一支流たる新店溪は、宛も此の山脈を貫きて横谷をなせるものにして、其の下流に臺北盆地を開展す。新店溪の横谷より西南は、前述せる山脈の系統、尙ほ主山脈に平行して連亘し、其の主要なる

關刀山脈

峰頭は新店溪の西に仔獅頭山(八六八米)を起し、次第に西々南に轉じて大崙坑溪の上流横谷をなせるところは枕頭山(六三四米)を起し、之より次第に西南を指し鳳山溪の上流地方に至り油羅山鹿場山(二六八三米)を崛起し。更らに其の前山をなして帽盆山尖筆山又其峰頭宛も拳指を見るが如き五指山(一〇七七米)牛公棋山及び中港溪の上流地方にある大龍山(八八七米)屏風山假裡山(二二四七米)を經次第に南方に轉じ、大湖地方に至りて南勢山馬那邦山(一四一六米)等を起せり、而して此の山脈の西方には後隴溪の支流によりて隔離せられ、小山脈をなすものありと稱して關刀山脈と云ふ、脈中には八角嶺山(六五三米)觀音山(七二九米)關刀山(八八九米)等を戴けるを見る。

關刀山脈は房裡溪並びに大甲溪の横谷によりて一旦斷絶せらるゝも、大甲溪の南岸に至りて再び隆起し、南方に延亘して臺中平野の東方を擁する一山脈を構造して延びて濁水溪の横谷に及ぶ。頭科山(八五五米)大横井山(一一九七米)火炎山(七五四米)等はこの山脈の峰頭をなすものにして、其の支脈中には直ちに平野に臨みて埤頭山(四八八米)後壁山(四二四米)大尖山(三六五米)等あり火炎

山の東南には大肚溪流の横谷を隔て、樟湖山(八七六米あり、更らに南に連なり中心山(二二三米)等を経て集集大山(一四二七米)に至りて濁水溪の横谷に臨む、前述せる關刀山脈以東この一帯の山脈は、直ちに西部平野の背後を擁する低山脈を造るものにして、更らに其の背後には或は溪谷或は盆地を隔て、更らに一帯の高き山脈の連なるものあり。即ち巔きに中港溪の上流地方に於て見たる鹿場山(二六八四米)より連なり、其の西南に洗水山馬那邦山を起し、房裡溪の南には大尖山(二一五一米)大甲溪の中流に臨みては白毛山(一五三七米)を起せり。粘板岩よりなれる主山脈と第三紀丘陵性山脈との間には二三の標式的盆地を造るものあり、即ち埔里社盆地は山間の別天地をなして直徑約二里に及びその南方には魚池の小盆地並びに日月潭の幽邃なる湖水を湛えたる水社盆地の横はれるあり。(第二十一圖、甲乙丙)

濁水溪の横谷以南に連なれる前山々脈は、新高山より發する原有蘭溪並びに其の西方にあたりて之を並走せる清水溪との間に介在しに鳳王山(一六五五米)金甘樹山(二一三四米)對高山(二四五六米)飯包服山(二四四九米)等の峰頭を戴け

阿里山

阿里山以南
の山脈

る山脈を構成す、對高山附近の西に當り別に塔山(二五一五米)を起し、此の地方に於ける最高峰をなす、この他此山脈より西方に分岐せる支脈中には、樟宮倫山(一四九九米)鹿屈山(二二五二米)光崙山(一八七九米)厚鼻山(一二四〇米)刻尾山等あり。

此地方一帯の地方は、所謂阿里山の地方にして有名なる森林を有するを以て其名殊に著はる、山麓の平野の一都會嘉義よりは森林鐵道高く山脈を登り大甲山峰頭の近くに及ぶ。

阿里山以南に於ては、下淡水溪の上流楠梓仙溪並びに曾文溪の上流後大埔溪の二流東西に略相平行し主山脈の方向に沿ひ南々西に流るゝを以て、自らこの溪流に分たれ山脈も亦三條の連嶂をなす、即ち其最東に位するものは、楠梓仙溪の東方に横はるものにして、主山脈との間に箬濃溪を隔て北端に新望嶺(二四八一米)崛起し漸く南するに従ひテンポー山、大竹溪山(二六七一米)等を起し、山勢次第に低く内英山(一〇五六米)となり、次第に夷陵して遂に茶頂山(四五八米)となり淡水溪下流の平野に没す。

又其中帯をなせる山脈は、即ち楠梓仙溪と後大埔溪との間にあるものにして、阿里山の峰頭をなし、對高山(二五四六米)に起り霞山(二四一一米)タナイク山等を経山勢東方の楠梓仙溪に向つて急斜し、西方には長く支脈を分派し、阿里山麓のために其の地を與へ、漸く西南に走りて三脚南山(一一八三米)を起し、烏山嶺を経て塘仔思山(六三九米)に至り、山勢次第に緩慢となり丘陵起伏して淡水溪本流の西に連なり、鳳山附近の平野に至りて盡く。

更らに其西方に横はれる山脈は、阿里山腹十字峠より西南に走り、後大埔溪上流の西岸に沿ひ隙頂山(一五六七米)を起し、更らに南して馬頭山(一〇八七米)ニ光山(八六三米)等を起し、之より南して山勢急に低夷し、僅かに二三百米を出入せる丘陵不規則に起伏し、地形複雑にして遂に臺南平野に至りて没す。阿里山以南、凡て是等第三紀層よりなれる山地は、石油を包蔵し殊に其の南方楠梓仙溪以東山脈に於て著るしきを見る。

前述せる如く本島の脊梁を構造せる臺灣山脈は、魏峨として高山性の特相を具へ、次で之に并走せる第三紀層よりなれる前山山脈は、其高距に於て之

に劣り時として低山性の相貌を呈するものあるも、尙時に高距二千米に上り山勢峻峻にして然かも翁鬱たる森林之れを鎖し、容易に探検し難き所少ならず、この二帯の山脈に并走し更らに其西麓に沿ひ、一帯の臺地延互し、低平なる平野更らに其西麓に連なるを見る、この一帯の臺地は島の北方臺北盆地の西方より起り、南方に進み嘉義方面に及び、長く第三紀丘陵の邊緣に發展せり。

此臺地を構造するものは、主として第四紀の砂礫層にして、其高距時に海拔三四百米に及び、西に面し急に階段状をなして、平野に望めり、想ふに是等の地層は、第四紀の古層よりなれるものにして、爾來本島に於ける土地隆起の變動著しく、當時前山山脈の山麓を浸せし海水は著しく退却し、その海濱の地次第に隆起し以て此の階段状の臺地を構成し、後土地の隆起は尙止まずして、更らに其麓に臺灣西部の平野を開展しつゝあるものゝ如し、此の臺地は、殊に島の北部に於て最もよく發展し、臺北盆地の西方に於て一部第三紀の丘陵を被いて、淡水溪と鳳山溪との間に彌漫し、其表面紅土のよく發達

桃園臺地

せる桃園臺地を造り、其東部は殊に茶園多く連り本島重要な物産を供給す。桃園臺地の西南は、一旦鳳山溪並びに其支流によりて浸蝕せらるゝも、新竹の南に至りては再び發展し、斷續して苗栗の南方に連なり、大甲溪以南臺中方面に於ては殊に規則正しくその發達せるを見る、即ちこの臺地の邊縁は平地に急斜して、平野より之を望む時は恰も一帯の山脈状をなして連なるを見るべし。

大安溪大甲溪の三角洲の平野にある、大甲市街より牛罵頭彰化を経て、南走せる街道は、恰もこの臺地の西麓に沿うて走るものにして、彰化以南に於ては恰もこの臺地の麓平野の邊縁に沿ひ村邑相連なるを見る、この平地よりこの臺地に登らば、約三百米にして其頭に出づべく、こゝに再び極めて緩斜せる一帯の盆地開展せるを見るべく、彼の臺中市街の如き恰もこの盆地の中央に位するものにして、前山後山より流れ來れる河流は、その前山を辭するにあたりて數多の分流を造り、この臺地狀の盆地を注ぎて再び相集り、臺地の一部を切解して更に下段の平野に流るゝを見るなり、されば此の臺地の表

臺地上的盆地

隆起珊瑚礁



面は、是等河流の運搬せる土砂のために被はれ、田園よく發達す、前述せる前山山脈の内部にある埔里社盆地より流れ來れる南港溪の如きは、前山山脈を横斷し、漸く之を離れて臺地の上面に出づるや、遂かに岐れて數多の分流を造り、臺地上的諸水を集めて再び合し、彰化の北方に於てこの臺地の一部を切解し、大肚溪となり、始めて平野に注ぎ來るを見るべし、北方の大甲溪、南方の濁水溪亦之と稍趣を同うせるものに外ならず、濁水溪の峡谷以南に於ては、この第四紀層の臺地は、漸く跡を沒しこれより僅かに前山の邊縁に低き丘陵地を送るに過ぎずして、嘉義市街の南方に至りては全く其の跡を沒せり。

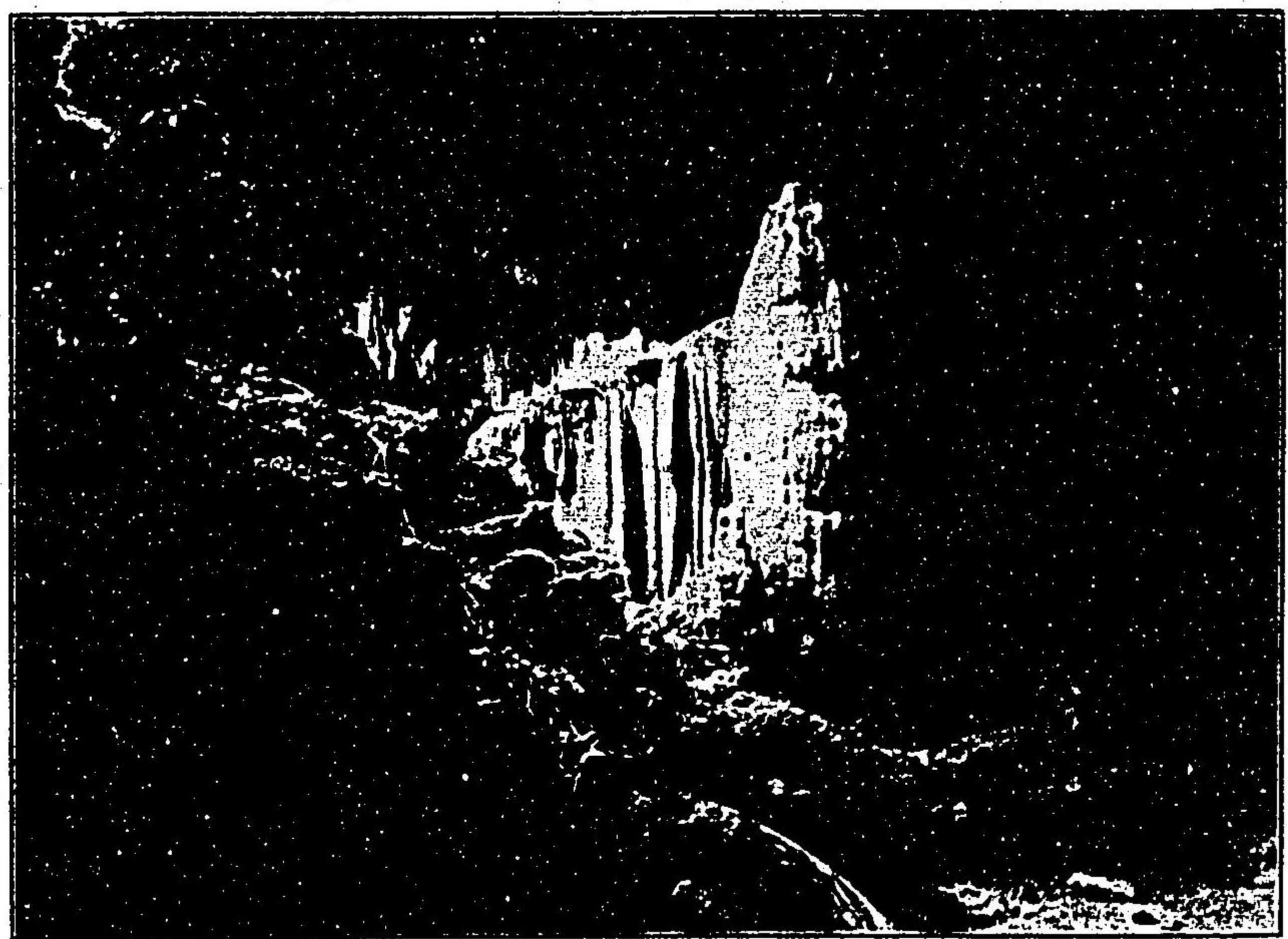
此他更に注目すべきは、本島の南部の平野に當り古き珊瑚礁よりなれる丘陵地の横れるものにして、近き過去に於て、海底の著しく隆起して是等珊瑚礁の平野中に殘留せられしを示せり。殊に臺南廳阿公店の東北に於ける大崗山(三一三米)小崗山(二五一

大屯火山麓

米の如きは、其の顯著なるものにして、現時は海岸を距ること約十四軒の内
 地にあり。又打狗港の北を擁する打狗山(三四米)同じく打狗港口の南を扼し
 て長き沙洲の先頭を造る旗後の丘陵の如き、更らに本島の南端、恒春市街の
 西方に當り、海岸に連れる一帯の丘陵、及び其の南端に突出せる猫鼻頭及び
 本島の最南端をなせる鷺巒鼻等の岬角附近並びに其の少しく内地に位せる龜
 仔角の如き、其他下淡水河口を距る南方約八哩の沖に位せる琉球嶼等、悉く
 隆起せる珊瑚礁よりなれるを見るなり。(第二十三圖甲、乙)

本島の北端の西西南より東東北の方向をとり大屯火山脈の走れるあり。其
 脈中にありて著しきものは、即ち大屯火山麓をなし、島の北部に於て著しく
 發達せる第三紀層の基盤を貫き第三紀以後第四紀に亘りて噴出せし火山より
 成り大屯山而天山菜公坑山七星山紗帽山小觀音山竹仔山礮嘴山大尖後山丁火
 巧山及び西方淡水河を距て、其西岸に立てる觀音山等の十一座の山火よりな
 り、北及東の二面は東支那海に望み、南は雙溪及び瑪鍊溪を以て五指山大崙
 尾山等を戴ける第三紀の丘陵に接し、西は直ちに臺北平野及び桃園の臺地に

(甲) 恒春臨大板埤龜仔石灰洞



(乙) 打狗港珊瑚石灰岩の岡

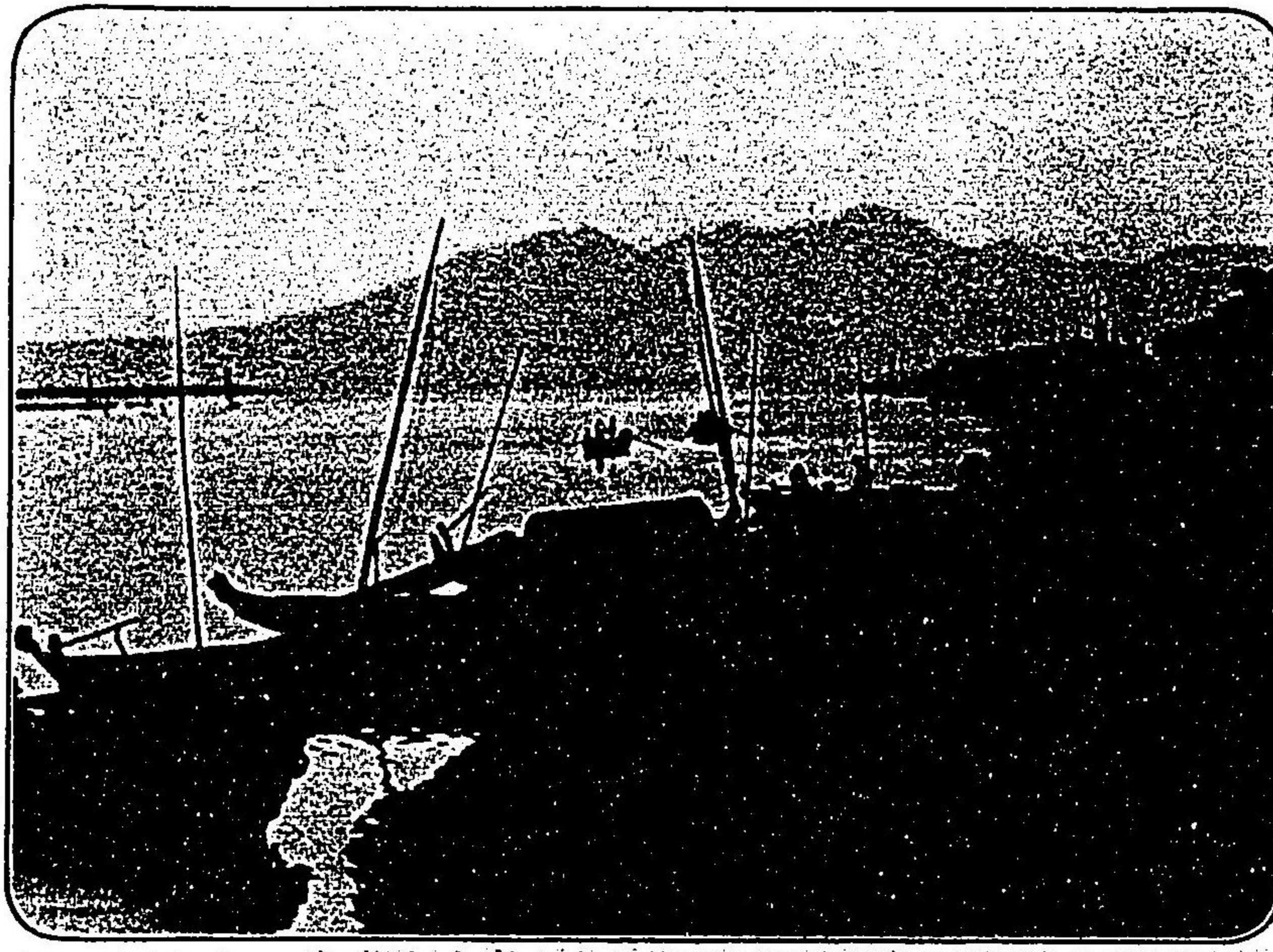


(第二十三圖)

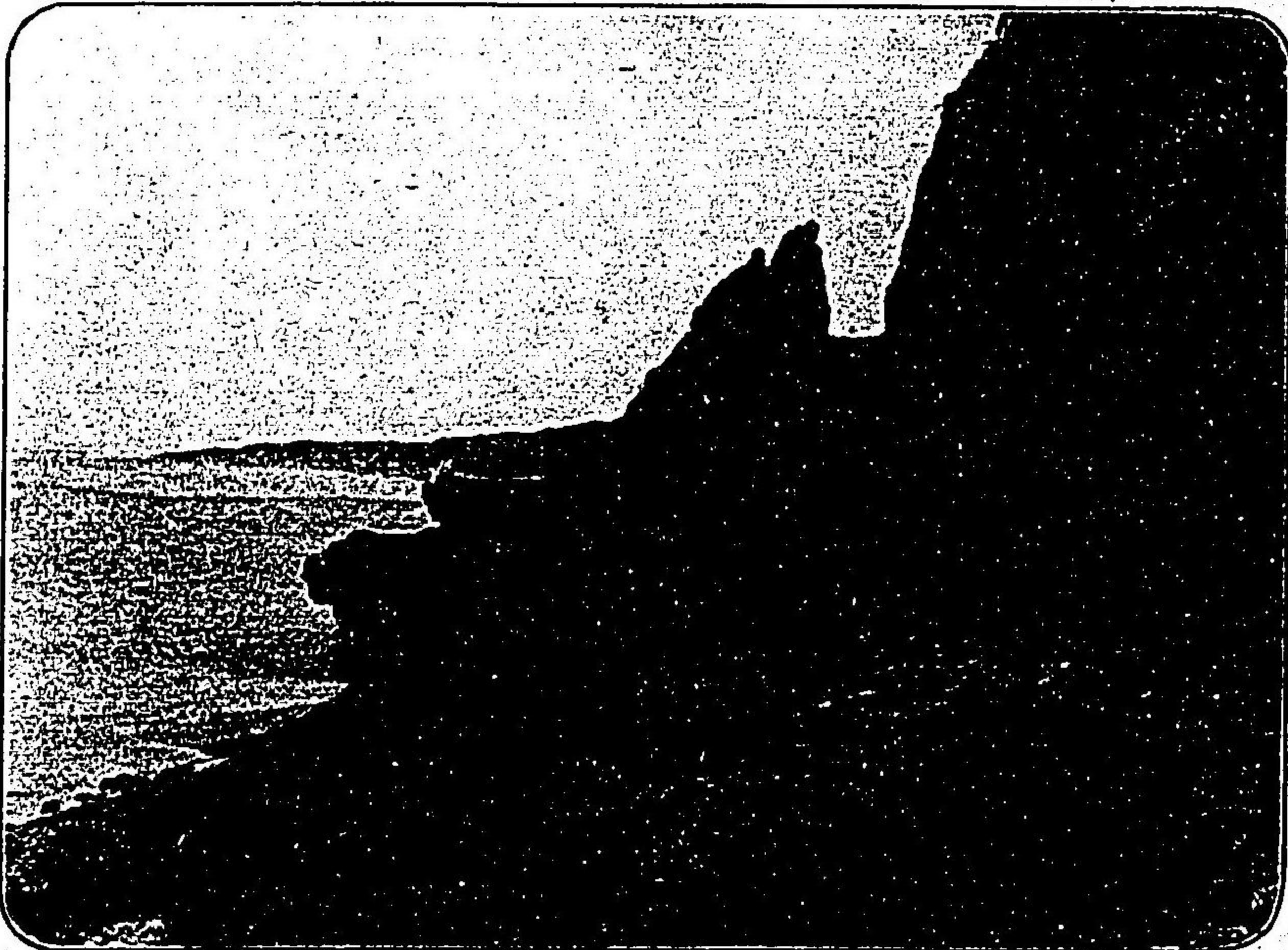


推移するを見る、今是等各火山に就て更に之を観察せん。(第二十四圖甲)

大屯山は一に大遼山と記し火山彙中山姿の雄偉なるを以て代表的名稱を得るに至りたるものにして海拔一千九十一米を占め頂上に噴火口ありて火口壁は今分かれて四峰となる噴火口は其直徑約三百六十三米深さ約六十米にして西方に向ひて缺壊し底部に少許の雨水を湛え向天池と稱す。大屯山は其切め集塊岩を放流し次て角閃富士岩、更に複輝石富士岩を噴出せり。大屯山の北方には熔岩臺地あり。其西北側に菜公坑山峙立す、大

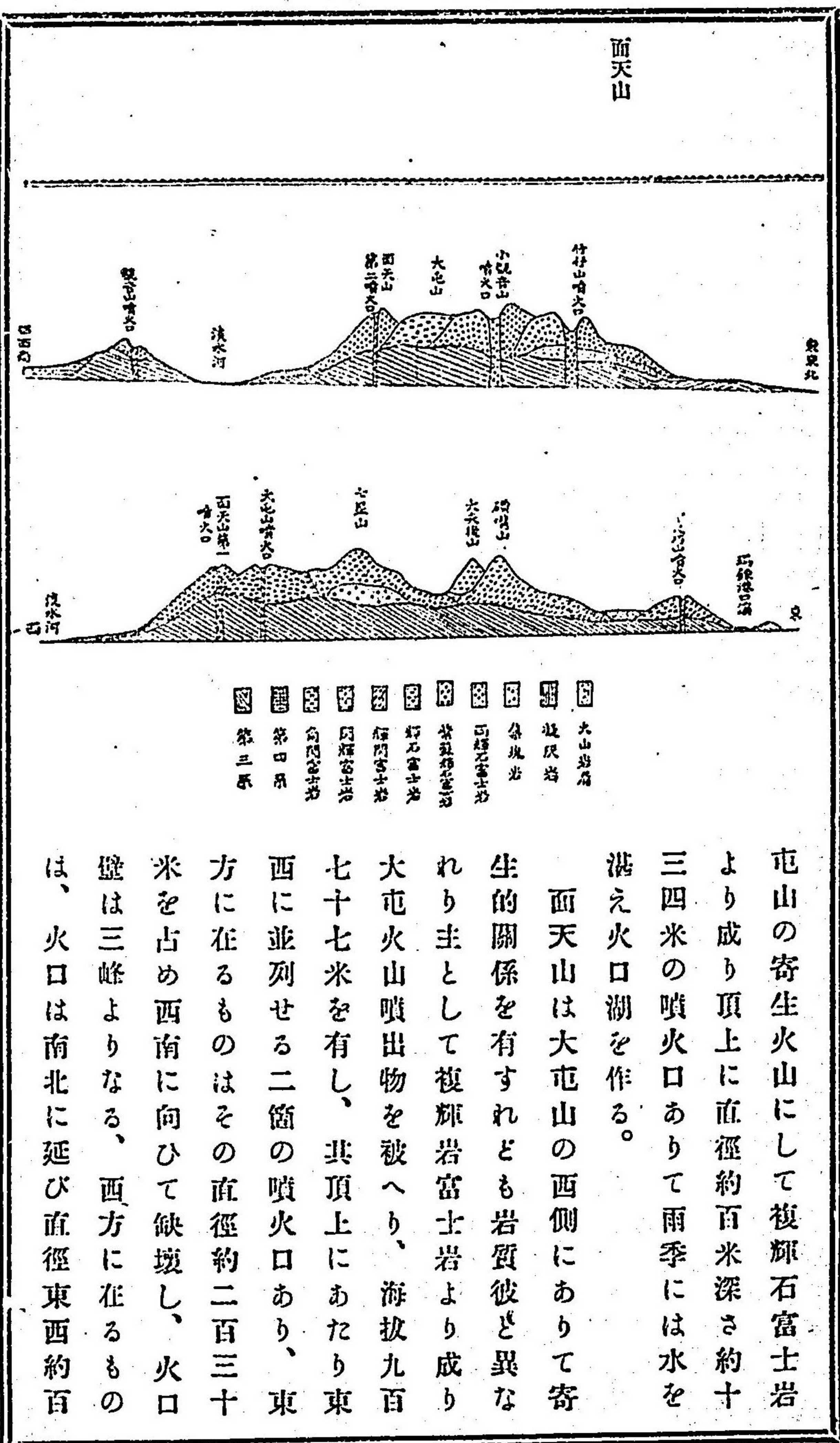


大屯北北臺より大屯山を望む (甲)



大屯東海岸觀音石 (乙)

(第二十四圖)



屯山の寄生火山にして複輝石富士岩より成り頂上に直徑約百米深さ約十三四米の噴火口ありて雨季には水を湛え火口湖を作る。

面天山は大屯山の西側にありて寄生的關係を有すれども岩質彼と異なり主として複輝石富士岩より成り大屯火山噴出物を被へり、海拔九百七十七米を有し、其頂上にあたり東西に並列せる二箇の噴火口あり、東方に在るものはその直徑約二百三十米を占め西南に向ひて缺壊し、火口壁は三峰よりなる、西方に在るものは、火口は南北に延び直徑東西約百

七星山
紗帽山
小観音山

米、南北約二百三十米深さ約五十米を有し、火口壁は二峰より成る。

七星山は一に七星塚山と云ひ、大屯火山彙中に於ける最高の火山にして竹仔湖より卓立すること約四百米、海拔一千八百八米に達すれども東西に偏平にして山體の偉觀は却つて大屯山及び竹仔山に若かざるものあり、頂上には噴火口あれども小にして且つ缺壊せしにより其所在の判斷に苦しむ、其活動の初期に於ては大屯山と同じく集塊岩を流し次で山の主部をなせる角閃富士岩を噴出せり。この火山に於て著しきことは硫氣の噴出及び温泉の湧出諸所に存することなり。(第二十五圖甲)

紗帽山は其形の似たるを以て此の名あり、大屯山彙中山姿最も秀麗なれども高距離かに六百四十三米を有するに過ぎず、七星山の集塊岩を破り噴出せる紫蘇輝石富士岩の鐘狀火山にして七星山の寄生的火山なりと見るを可とす、其頂上には多少窪地を残し崩壊せる噴火口の跡を示す。(第二十五圖甲)

小観音山は大屯山の東北に位し、複輝石富士岩より成り本火山彙中に於て最大の噴火口址を有しその東西直徑約一千一百米南北約一千三百米深さ三百

竹仔山

米にして、西北方に向ひて缺陷し多量の泥流を流せしことあり、今火口瀬は番仔田溪に其水を送る。

礮嘴山

竹仔山は小観音山の東北に接し、山容雄大なり本火山彙中に於て最初に活動せしものにして初め泥流を流し殊に遠く東北方及び北方に放瀉し次で多量の複輝石富士岩を流し又北方に向ひ此等は長く裾野を曳き、その先端は富貴角及隣山角の岬角をなすに至る頂上には噴火口址ありて直徑東西約九百米南北約一千四百五十米深三百米内外を有し、西南に向ひて缺陷し斷崖をなす。礮嘴山は七星山の東方約七紵の地に位し、七星山の噴出後活動せしものにして閃輝富士岩より成り、海拔九百十三米を占め山頂に噴火口あり、其直徑東西約百八十米南北約五百四十米深さ四十五米を有し北方に向ひて缺陷す。

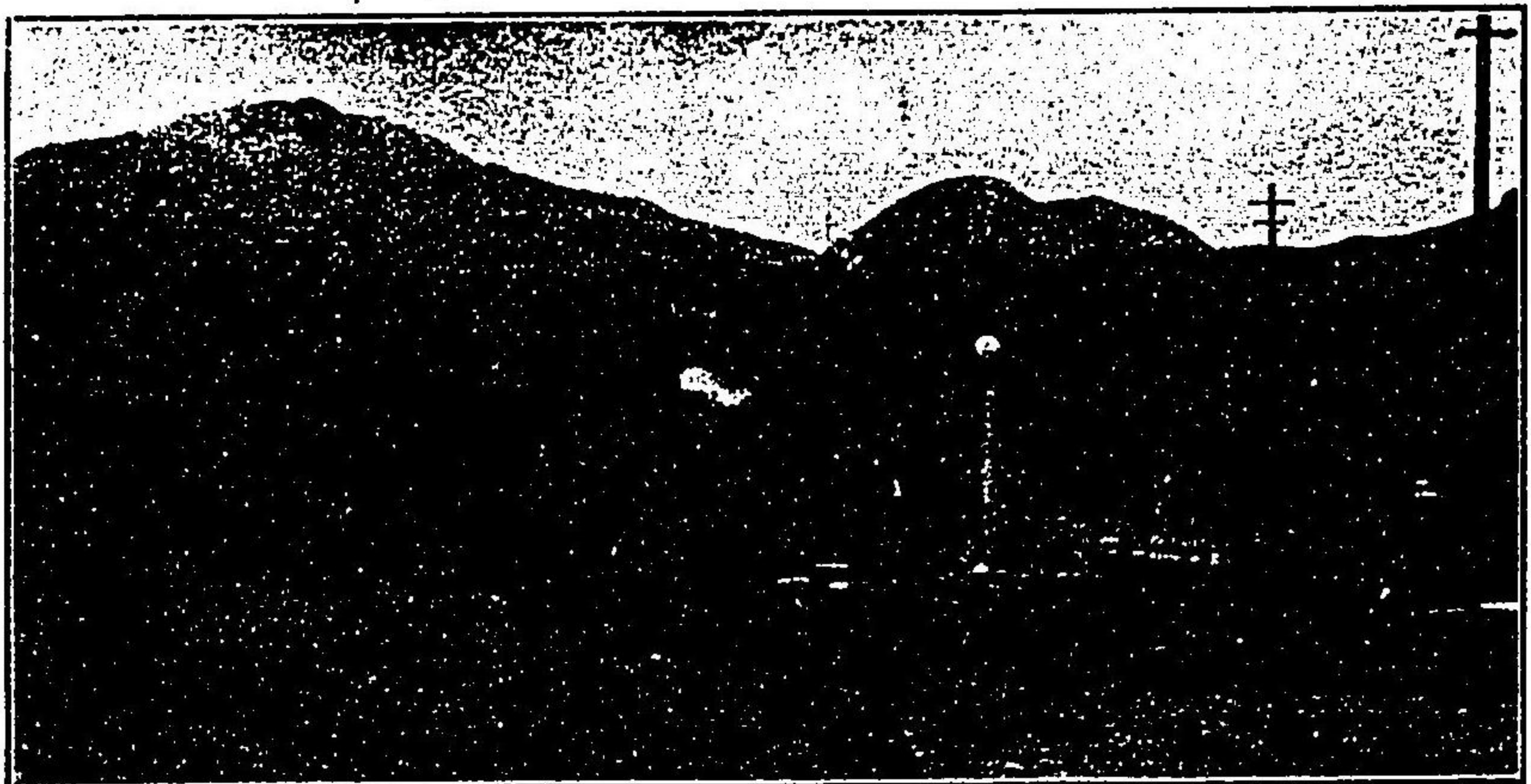
大尖後山

大尖後山は礮嘴山の西側に座する一小火山にして、礮嘴山に寄生的關係を有し輝石富士岩より成る、其頂上には今噴火口の影を止めず、其南側に在る大尖後湖と稱する窪地は火山閉塞湖なる舊湖水の跡なり。

丁火巧山

丁火巧山は瑪鍊溪の西方に聳立する火山にして集塊岩及び角閃富士岩より

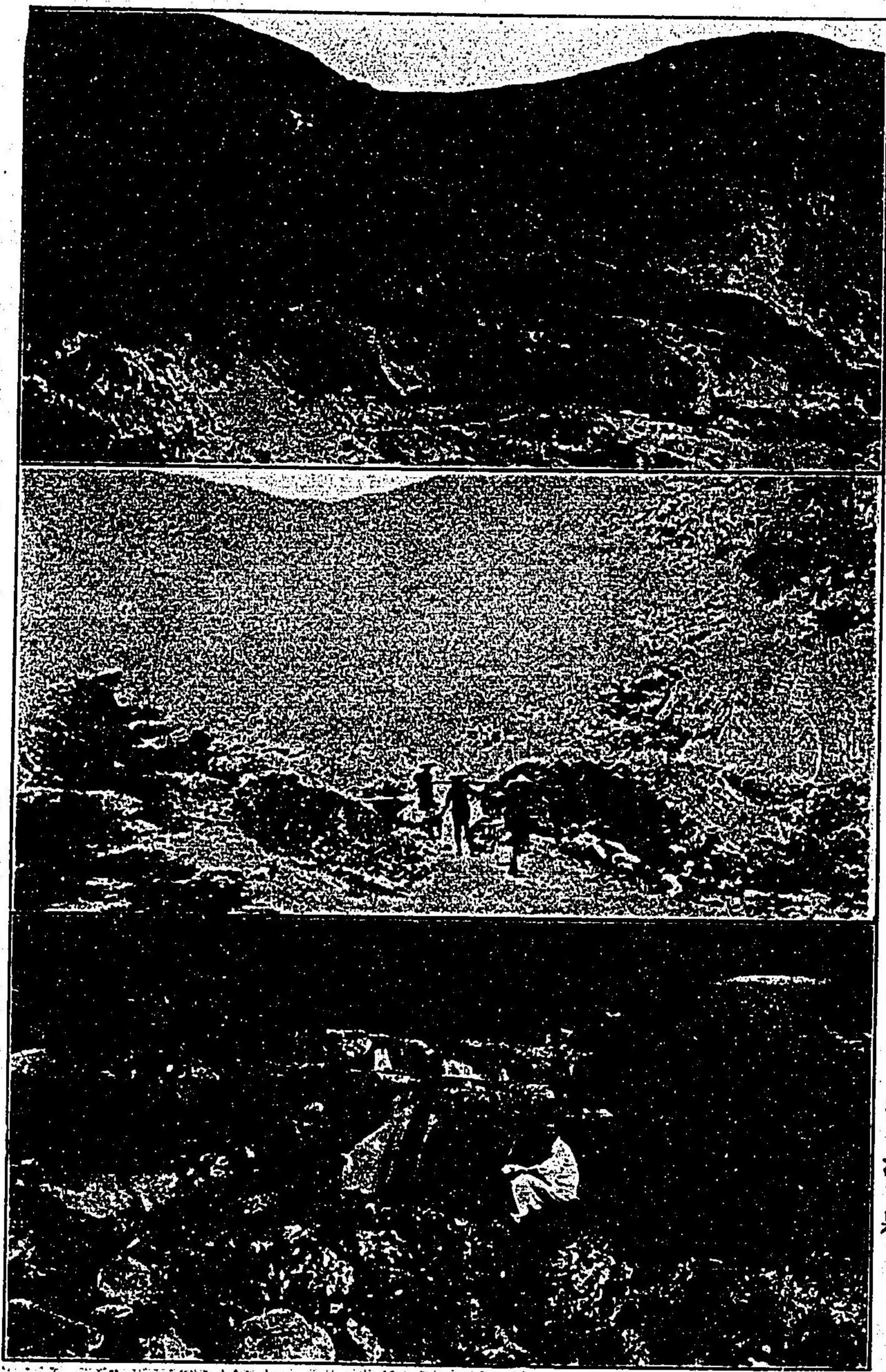
(甲)左、七星山 右、紗帽山



(乙)淡水河を隔て、観音山を望む (丙)七星山南方の硫汽孔



(第二十五圖)



(甲) 北投の硫汽孔及硫黄坑

(乙) 同上

(丙) 北投温泉

(第二十六圖)

なり海拔四百四十二米あり、噴火口は其直徑東西約三百六十三米南北約五百四十五米深さ百二十一米を有し西南に向ひて缺壊す。

丁火巧山の北方に於ける八斗仔山(三二二米)及び西北に於ける湍仔山(三六一米)は共に角閃富士岩より成れる岩脈の突起に過ぎずして、熔岩流動の跡を認めず。

觀音山は淡水河の左岸八里盆堡の第三紀丘陵上に峙ち海岸より屹立すること六百七十米あり、角閃富士岩及び紫蘇輝石富士岩より成り噴火口は完全に保存されざるも址は西北約六百三十米深さ約百四十米を有し東方に向ひて缺壊す。(第二十五圖、乙)

大屯火山稜構成せられたる後も變動絶へずして爆發作用の發作硫汽、温泉の噴出をなし、殊に七星山の四周に著るしく出口學士は爰に二個の大地裂線を想定せり、其一は竹仔湖の硫汽孔に起りて七星山の山頂西肩を横ぎり、其西側の硫汽孔を過ぎ大庄温泉を経て北投庄硫坑に來り爆發をなし、北投温泉湯源附近に終るものと、一は七星山の東側硫氣孔に始まり冷水坑の硫黄坑を

觀音山

爆裂火口

過ぎ深き峡谷をなし南方双溪に至るものなり、此他別に一線の三重橋の爆裂火口を列ね南に延び大油坑の方面に至るものなり、此等の線上に沿ひては硫汽及び温泉湧出し又この線上及び其附近には爆裂火口の散在せるを見る、今温泉に就てはその條に於て述べれば唯こゝには硫汽孔と爆裂火口とに就て一言せん。(第二十五圖及丙、第二十六圖)

北投庄硫坑

大屯火山彙に隸屬する爆裂火口は十箇所あり即ち芝蘭二堡北投庄瀧ノ湯源同堡硫坑二箇所芝蘭一堡七股庄七股山金包里堡頂中股庄四箇所下方萬里加投庄煉仔坪中萬里加投庄にあり、以下各硫汽坑に關し梗概を述べん。

北投瀧の湯源

北投庄硫坑は北投停車場より東北二軒の地に在り、直徑東西約百十米南方に向ひて爆裂し泥流を放瀉せるの痕あり現時この硫汽坑中よりは硫黄を採掘す。

七股山爆裂火口

北投浴場地より湖ること約五百米餘にして北投瀧の湯源泉をなせる爆裂火口あり。長八十米幅三十米ありて第三紀層中に於て小なる爆裂によりて生ぜしものなり。
七星山の東麓七股山は其東北側に於て山體の一半を爆裂せり東西直徑三百

中萬里加投庄爆裂火口

六十米に餘り現今は其中に於て硫汽の痕跡を止めず。
丁火巧山の噴火口の南側に中萬里加投庄爆裂火口にあり西南に向ひて爆裂し其東西直徑約九十米あり、又硫汽を見ず。

頂中股庄爆裂火口

頂中股庄爆裂火口には三重橋の北、道路の下側に於て一列に竝列し集塊岩中に四箇の爆裂火口あり、何れも火口内は硫臭を以て充さる。

頂中股庄煉仔坪爆裂火口

金包里より西南六軒にして硫溪の盡くる所頂中股庄煉仔坪爆裂火口あり、南北約百八十米に餘り東に向ひて爆裂し其内に硫汽孔ありて硫黄を産す。

硫汽坑

此他本火山彙中に存する硫汽坑を擧ぐれば、芝蘭二堡北投庄瀧の湯源泉同堡硫坑同堡大庄竹仔湖庄芝蘭一堡草山硫溪内七股庄同堡大油坑金包里堡頂中股庄下萬里加投庄庄硫仔坪煉仔坪等にして、就中顯著なるものは北投庄硫坑煉仔坪竹仔湖硫溪内其他雖然たる大音を發する大油坑等なり。

平野

以上述べ來りたる山岳並びに其地の麓に當りては、所謂臺灣西部平野のよく發展せるありて、地味豊饒産物に富み、住民甚だ多く、本島主要なる生産地をなす。此平野は主として海底の隆起と、河流の放瀉せる土砂の堆積とに

主山脈以西の
水系

より、次第に發達せるものにして、土地極めて低平に、殊に其の海岸に瀕する地方に於ては、今尙卑濕の地に乏しからずして、沼澤多く、また瀕海の海底甚淺くして、砂洲遠く發達し、堆砂次第に多きに及べば、漸く水面に現はれ、その間に海水を包圍し、洲渚を造ること少からず、殊に臺南地方に於て其の著しきを見る。此平野は、島の北部に於ては臺北を中心として臺北盆地を造り、又桃園臺地の海岸には其幅約十軒をなして相連なり、新竹附近に於ては鳳山溪河流の三角洲を造り、これより西南、中港後壠苗栗等の小平野を點綴し、大安溪大甲溪の造れる三角洲より南方に赴くに從ひ、平野次第に其の幅員を増し、島の中部西螺を走る緯線上に於ては、其幅最も大にして、約四十八軒に及ぶ、これより南して臺南附近に至れば、漸く其の幅を減じ、鳳山附近に至りて盡くるも、島の南部に於ては、別に淡水溪下流の灌域地に於て南北五十八軒東西二十二軒の約長方形をなせる一帯の平野の發展せるを見る、又島の南端には別に恒春の小平野あり。

主山脈以西の水系 主山脈以西の水系につきては前述せる地形の各節に於

淡水溪

鳳山溪、中港
後壠溪

て既に之を盡くせるも今之を概括して述べんに、本島の北部にありては主要なる水流は先づ淡水溪を推すべく、其上流は南勢北勢の二流より成り、二流は屈尺の南方双溪口に於て相會し新店溪となり臺北盆地に出で大崙崙溪並に基隆溪を併せ此盆地を漑で北流し淡水に至り海に朝す、本流支流共に舟楫の便あり大崙崙溪の如きは溯て大崙崙に至るを得べし。

桃園臺地を流るゝものは多くは細流にたる過ぎざるも南崙崙稍見るべく、新竹地方に於ては前山より流れ來れる鳳山溪、中港溪、後壠溪等ありて此等は既に久しく洪積臺地の間を切開して廣潤なる谷を展開し、數多の分流となり網狀をなして此谷床の中を迂餘曲折して流れ又廣き沙磧を伴ふものあり。然かも舟楫の便見るべきものなし。

中部南部の平野に出づれば河流の見るべきもの最多し、而して此等のもの特色とする所は前述せる如く高峻なる後山前山の嶮を出で、急に平野に出づるを以て何れも俄かに溢れて數多の分流を作り廣大なる扇狀地を開展し磧地の長く連れる見ることは是なり。又主要なる河流を北方より次第に列擧すれば

房裡溪

房裡溪 源を脊梁山脈の大霸尖山シルビア山の間で發し西々南に流れ蕃界を出で、谷漸く廣く第三紀丘陵を離るに及びて直に苑裡大甲二邑間に大なる扇狀地を展き十數條の分流をなし其北に偏して大なるものを房裡溪と云ひ、南に偏して著るしきものを大安溪と云ふ。

大甲溪

大甲溪 房裡溪の谷の南に隣りシルビア山の南より發し西南に流れ蕃界を出で、北に折れ東勢角の中廣き谷となり、洪積層の臺地に出で一旦分流を派するも亦著るしく開展するに至らず、その臺地を切開し大甲の南に於て低原に出づるに及び始めて三角洲を造るも其面積房裡溪のものに如かず。

大肚溪

大肚溪 其上流は脊梁山脈の高峯合歡山の西腹斜面にありて北港溪南港溪の二流をなし、後者は一旦埔里社盆地に出で、其水を集め更に西流して前者と合し臺中南方の洪積臺地に出づるに及び俄に汎濫して廣き積原を作り數多の分流をなし、臺地上の扁たき臺中盆地の水を集め、流れて臺地の西端に至り漸く窄まり臺地を切開し幾くもなくして海に朝す、河口に塗葛窟の港津あり。

濁水溪

濁水溪 西部臺灣第一の大河にして其流域の大なる、水系の複雑なる他に其比を見ず、其上流は脊梁山脈の西側に深き縦谷をなし、源を合歡山の南に發しトロック蕃、霧社蕃等の蕃社を南流し、一方秀姑巒山より發し之に向ひて北流し來れる郡大溪を併せ、之より方向を對し西に向ひ後山前山を横斷し深刻なる峽流となり粘板岩の地層を碎きて懸崖を造り、其岩石の細粉は河水に混じて之に黒濁を與へ、濁水溪の名之によりて起る、之より土地公鞍嶺の麓に於て原有溪を容るに至り谷幅稍大なるも未だ著るしく開展するに至らず、林圯埔附近に於て洪積臺地の上の水を集め町の西方に於て此等の諸水集りて細狀をなし遂に臺地を破て平野に入るに及び、始めて大に開展し扇狀地を造り其開展角は九十度の大なるに及び大小幾多の分流を放射せり、其北方最外部にある小流は員林を経て彰化の南を過ぎ海に入り、又南方最外部をなすものは北港溪をなし斗六の北より西南に向ひ北港を過ぎ海に朝し、其間に無數のりて大なるものは本流濁水溪西螺溪新虎尾溪等の大流をなし、其間に無數のり。

小流を派し其走路亦時々變化することあり、而して其齎らす所の土砂は沿岸に汎濫沈積し又遠く海に入り陸地は次第に西方に發展し、本島西岸の此方面に膨脹せるは職として此等の沈積作用に依れるものに外ならず。

凡て此等の諸水は自然の放流に任せ治水の工事未だ見るべきものなきを以て一朝豪雨の洪水を起すときは著るしく汎濫して村落を浸し交通を絶ち、又之が爲めに後日水路の變換すること稀なりとせず。水運の如きは特に著るしきものなく、下流に於て間々小區域の間小舟を通ずるに過ぎず。

臺南平野に於ては河流は何れも阿里山脈より源を發し從て其大さ前數者に及ばず。其稍著るしきものは嘉義の北を流る、牛稠溪、其南を流る、八焚溪、并に安平の西北に於て海に朝する曾文溪にして後者は上流山間を流る、間は後大埔溪の稱あり。

更に南すれば下淡水溪あり、新高山より發する楠梓仙溪に及び箬濃溪は山地を離れて相會し淡水平野に入り淡水溪の大河を造り其本流は第三紀丘陵に沿ひて南流し、一方春梁山脈より急に流れ來り平野に入りて忽ち分流せる數

牛稠溪、八焚溪、曾文溪

下淡水溪

多の河流、例之、武洛溪、隘寮溪等の諸水を容れ河は愈大となり、別に東港溪亦此等と同じく平野の中を流れ、其下流は淡水溪の分流と相連り複雑なる網狀をなせり、又平原の南端には別に林仔邊溪あり、要するに下淡水溪流域平野に於て河流の交錯し積原を造り、泥土を沖積し坦々たる平野をなせるの狀は中部に於けると其觀を異にせず、而かも水路の複雑なるは時に彼に優れるものあり。

臺東の山系及水系

臺東の山系及水系 本島の東岸に當り、本島の主山脈をなせる臺灣山脈に平行し、其の間に一構造谷を挟みて、剴然之と相隔たり、別に一帯の山脈をなして連互せるものあり、稱して臺東山脈と云ふ。此の山脈は、その南端を卑南平野に於ける卑南大溪河口の北に起し、北々東に向ひ一直線をなして走り花蓮港の南方木瓜溪河口に於て盡くるものにして、極めて狭長く、長さ約百三十軒に及び其の最狭きところ約六軒を占むるに過ぎず、而してこの山脈は、主として第三紀層並びに之と時代を等うして噴出せる火山岩よりなり、山甚しく高からざるも、巍峨として山勢峻峻なるもの乏しからず、その峰頭

臺東縱谷
臺東平野
卑南大溪
秀姑巒溪

の稍著しきものは、山脈の南部に於ける都巒山(二一七米)及びその中部成廣灣の西北に位する一峰(一四〇〇米)並びに觀音山の東方の一峰(二五七米)なり。此山脈の東麓の邊緣をなし、海に臨みて段丘よく發達し、時として其の幅數百米に及び、アミ蕃族の聚落其上に散點す、また北部に至るに従ひ、山勢漸く海に近く時として斷崖をなし、行人辛ふじて其岩角を踏み繼かに進むを得る所あり。臺東山脈の西方、主山脈との間には平坦狹長なる標式的構造谷あり、稱して臺東縱谷と云ひ、この沿岸に發展せる灌域平野を總稱して、臺東平野と云ふ。この平野を流るゝ河川の著るしきもの三あり、其の中央に位せるものを秀姑巒溪、北方に流るゝものを花蓮溪、南流せるを卑南大溪と云ふ。卑南大溪は、源を岡山に發し、多くの支流を合せ、始め新武路溪と呼び、横谷をなし、新開園の南方に於て臺東縱谷に出で、南に轉じ北勢溪を合せ、卑南大溪となり、卑南平野に出で其の南方にある知本溪並びに大南溪の三角洲等と相連なりて、卑南平野を造り、その北部に於て海に朝す。卑南大溪と相背きて臺東縱谷を北流せるものは、秀姑巒溪にして、源を臺

花蓮溪

灣山脈の高峰秀姑巒山に發し、始め轆轤溪と稱す、而して主山脈の急斜面を東走して横谷をなし、臺東縱谷に出づるや、新開園の北方に發源し、卑南大溪とは低平なる分水界をなし、流れ來れる一支流を北莊の北方に呑み、更らに縦谷を北流し、打打群溪を容れ、謝得武の北に至り、北方より縦谷に沿うて流れ來れる媽蘭均溪を合せ、東に轉じ、臺東山脈を横斷し、迂餘曲折して峡谷をなし、遂に大港口に至り海に注ぐ。花蓮溪は壽萊主山以南、安東郡山方面に於ける臺灣山脈の東斜面を瀉下する水の臺東縱谷に落つるもの相集りて、この縦谷を北走せるものにして、是等溪流中主要なるものには、馬鞍溪瓦納納溪北方の木瓜溪等なり、是等の溪流は、臺東縱谷に出れば何れも堆砂を開展し、數多の分流をなし、遂に又相合して花蓮溪の本流を造り、屢々網狀をなし、平野の間を蛇行し遂に花蓮港の南に至り、海に注ぐ。是等の三河流の齎らせし土砂は堆積して以て狹長なる臺東平野を造りしなり。この平野には今や輕便鐵道も布設せられ、次第に其開拓の歩を進むるを

見る。

第二章 海洋并に海岸線

臺灣本島は、日本列島の最西南端を作れる島嶼にして、東は太平洋の深海に接し、西は臺灣海峡の淺海を隔て、南部支那に面し、北は東支那海を控へ南は支那南海の東北門戸をなせるパシ―海峡を隔て、フィリッピン群島と相對す。

本島は地形の狀に於て述べし如く、垂直的肢節に富めども、水平的肢節は極めて簡單にして、本島と略面積を等うせるかの九州島の海岸線發達の程度五〇なるに反し、本島は一八に過ぎず。その延長の如き、彼が三千四百四十四軒を有するに本島は一千二百二十軒を占むるに過ぎず。就中海岸線發達の稍著しきは、臺灣山系の挫折部に屬する東北海岸と及び南岬附近にして、其の他は斷崖又は平滑なる砂濱の差こそあれ何れも直滑にして出入に乏しく、時

に洲渚の發達を見るのみ。之に反して本島に屬する島嶼は、其數に於て多からざれども肢節に富むもの少からず、澎湖群島の如きその著しきものなり。今之より臺灣本島の沿岸につきて詳述せん。

一 北海岸

北海岸は、三貂角より淡水水港に至る間に於て、沿岸峭壁多く時として砂濱を交ゆ、之れこの海岸は臺灣山系の外帯をなせる第三紀層より成れる丘陵の直ちに海に没するところ及び大屯火山の裾野の大部を占むるに依るなり。今三貂角を出でこの海岸を辿るに、角は東徑百二十二度北緯二十五度に位し、本島の東北部に突出する半島にして、箬蘭山は三百五十一米の標高を有して半島の脊梁をなし、海岸多くは斷崖をなす。角の北側に一灣あり福連庄灣と云ひ避泊に適し灣頭には同名の村落あり。これより頂雙溪河口を渡れば砂濱の相連なるあるも、湧底港を過れば又崖岸をなし、小出入を経て鼻頭角に達す、地は百二十米餘の高距を占め小半島をなし遠望宛も孤島の如しと云ふ。角上

北海岸

に燈臺あり、鐵造六角形白塗第四等回轉白光にして晴天光達二十一哩半に及ぶ。之より西すれば深湧灣八斗港の避泊港を経て基隆港に達す、港は本島第一の良港にして、港口東北に向ふため北風又は偏北風あるときは風波を防ぐに便ならずと雖、近來改修して築港の工を竣り大船巨舶も安全に碇泊するを得るに至れり、港口に社寮島及び桶盤嶼ありて桶盤嶼の西端には一立標あり、鐵杭上に燈籠を設け不動綠色の燈火を挑ぐ。尙港口の西角萬人堆鼻にも燈臺ありて、煉化造圓筒形白塗第五等不動白光にして、晴天光達十五哩に及ぶ。基隆港を出で、西北に進めば野柳鼻の一半島に至る、この半島頸部より淡水港に至るまでは、本島の北部に突出せる拳狀の突出部にして、大屯火山彙噴出の結果生じたるものにして、海岸の狀勢は巖に同火山の條に述べたるが如し。此沿岸に於ける主要なる岬角は富貴角(富基角)にして實に本島の最北端をなし燈臺の設あり、鐵造八角黑白横線塗、第二等不動白光にして、晴天光達十九哩に及び別に霧笛の設置あり、又無線電信局を設け電柱高く聳ゆ。淡水港は淡水河の注ぐところに灣入したる海面の稱にして、港口西北に開くため南風

西南風は之を避くるを得べしと雖も東北風の時には碇泊し難き缺點あり。本島北岸近海に横れる島嶼は、極めて少なくして彭佳嶼棉花嶼花瓶嶼基隆島あるに過ぎず。

二 東海岸

東海岸は三貂角より鷺巒鼻に至る間にして、唯だ宜蘭平野及び臺東平野の海に臨める地方に於てのみ、海岸平滑にして、其の他は山岳直ちに海岸に峙立し、峻崖をなせるところ多し、今此の海岸を観るに、三貂角より以南蘇澳港の北方を擁せる、小半島の頸部武荖坑溪の河口に至るまでは一大弓形を畫き、沿岸二部に分たる、即ち三貂角より頭圍河の河口に至る間は、險崖の下漸く道を通づるに過ぎざるも、之より以南は直條平滑なる砂浜をなし、濁水溪の河口は沙丘に擁せられ屈曲して幅廣ろき水瀦をなし爰に東港の小津をなすも淺沮にして、小船の假泊に適するのみ。蘇澳港は宜蘭平野の南部に位置し、二小岬に擁せられ、灣内南風湧北風湧の二湧を控へ、廣濶ならざるも自

然の良港をなす。蘇澳よりドーム角を経て新城附近に至る間は、險崖絶壁削るが如くして、直立六七百米を超へ怒濤常に岸脚を噛み艇舟を着くこと能はず。新城附近より木瓜溪河口に至るの間は、所謂臺東平野の北部葦萊平野の海に盡くるところにして、鈍き突起をなすも一帯に平坦なる砂濱をなし、其の南部に花蓮港あり。港は地形上港灣と稱すべき價値なく要するに一泊地たるに過ぎずして汽船は沖に假泊して唯風波靜穩なる時に於て端舟を往來せしめ、平常は端舟を砂濱に引上げ置くなり。これより南進し卑南大溪に至るまでは即ち臺東山脈の山脚直に海に迫り來りて絶壁をなし、或は數階の海岸段丘發達し丘上に狹長なる平野を造り、聚落も亦相連なれるを見る。臺東平野の南端卑南平野の海岸は前の葦萊平野の海岸と同じく、卑南港の港としての價値は花蓮港と相伯仲せり。卑南平野以南は臺灣山系又直に海に臨み一道の砂濱長く崖下に通じ、其間時に断崖を交へ巴望衝の南方には觀音石の險あり。牡丹灣は此沿岸の小灣にして之より更に南方に進まば南岬に達す、此沿岸多くは珊瑚礁發達し其古期のものは隆起して丘陵をなし海岸は峭壁をなせ

り南岬の南端は鷺鑾鼻と云ひ本島の最南端をなす、其頭には鐵造圓柱形の燈臺ありて不動白光は晴天光達二十裡に及ぶ。(第二十四圖、乙)

鷺鑾鼻の岬角は其西方にありて、之と相對して突出せる猫鼻頭の岬角と相擁し本島の南端に一灣を造り、灣の盡頭に當り恒春平野の終る處に大板轆港を造り本島極南の一門戸をなす。

本島東岸の近海には島嶼少なく、宜蘭平野の外洋上に在る龜山島及び龜卵島、臺東平野の東方海上に在る火燒島、北緯二十二度の南北に跨がれる紅頭嶼及び小紅頭嶼等の諸島あるに過ぎず。又鷺鑾鼻の南方沖合には七星石 *Seven Rocks* の群嶼あり。

三 西海岸

四海岸

臺灣本島の西岸は一言にして盡さば平滑と稱して可なり。島の北端淡水河口の西より起り島の中部房裡溪口に到るの間は其背後に或は第三紀丘陵、第四紀臺地等の横はるありて時に海岸近く逼ることあるも多くは其邊縁に卑低

なる海岸平野を伴ひ、又其間を貫流し來れる鳳山溪、中港溪、後壠溪等の下流には相應に三稜洲平野を開展し、海濱にも洲渚の發達せるものあり。房裡溪口より以南は平野著るしく發達し、大安大甲、大肚、濁水、西螺、新虎尾北港等の諸水は甚しく土砂を放瀉し、海岸には砂洲遠く海中に延展し遠淺の沿海を作り、洲渚の間には平野に於ける河流の方向に従ひ落を造り緩かに戎克船を出入せしむるものあり、風波靜穩なる自然の良灣としては一も求むべきものなきも猶此等の落を傳ひて河口の地に船を繋ぎ、或は對岸の支那地方と貿易し或は沿岸通商を事とする商船の爲めに地方的の商港たるもの亦少なからず、稍北にありては後壠港、通霄、漸く南して梧棲港、塗葛屈、鹿港、布袋嘴等あり。此等の中には沿岸航路の汽船寄港することありと雖、固より此等は數哩の沖に碇泊するの止を得ざるものなり。

中部地方より更に南するに従ひ洲渚の發達愈著るしく、海岸には幾多の不規則なる水湫をなせる潟湖と砂洲とは相交错して其幅十數杆の間は水陸或は相分つべからざるものあり、此沿海の潟湖は從て養魚地となり、沙濱は製鹽地となるもの少なからず。臺南地方有名なる港津安平の如きも自然人工共に何等の施設ある港灣たるにあらずして大船は數哩の外の廣濶なる沖合に碇泊し海岸との間の連絡は多くテッパイと稱する特殊の竹筏を用ゆるなり。安平以南打狗に至るまで潟湖相連り砂洲其外を擁するを見る。

打狗に至り海岸の單調少しく破れ二基の隆起珊瑚礁より成れる丘陵海岸に聳え、其南にあるものは之に連りて一條の砂嘴長く延びて其長さ十二杆に及び、中に本島稀有の大潟湖を擁し砂嘴の内側には紅樹叢生す。潟湖は其の北端兩丘陵の間に口を開き丘陵の蔭に當り今築港して南部臺灣第一の港灣となれり。

更に之より南方に至れば下淡水溪下流の平野の海に瀕する處亦一帶の砂濱をなし、内側に潟湖を造るを見る。枋寮以南に至り山巒漸く海岸に逼り其麓に一道の沙濱を通じ遂に島の南端に至れば恒春の一平野あり、其西を擁し隆起珊瑚礁より成れる丘陵ありて海岸又峭壁をなし、遂に島の西南端なる猫鼻頭の岬角に至りて盡く。

海流
日本海流

四 海流及潮汐

海流 臺灣島附近に於ける最も重要な海流を日本海流、一名黒潮とす。今此海流の起る處を見るに太平洋上北緯九度と二十度との間を西流する北東貿易風の皮流はフィリッピン諸島の東岸に達し北に折れて自流となり同島北部の近海に於て始めて日本海流となり、その本流は臺灣島の東岸に沿ふて流れ、支流は臺灣の南岬に於て分岐し臺灣島の西方澎湖水道を過ぎ、島の北を繞りて再び本流に會す。彼の北東貿易風によりて生ずる皮流は北東季節風の際にありては其の將に日本海流たらんとする時にはルソン島と東徑百三十度との間に於て四百哩若しくは五百哩の幅を以て西と北西とに流れ、其一部西流するものはパシ、パシントン二海峡を過ぎ支那海岸の北東皮流を合せて南支那海に入る、之に反して南西季節風の際にはソロン附近に於ける皮流の幅百五十哩に過ぎざるも南支那海より來る皮流を合せ又其幅を増すなり。而して此等の皮流一旦日本海流となるや其幅狭くして、臺灣と先島群島との間を通過

する時の如きは、其幅殆ど二百哩に過ぎず、同群島の北方に至り又擴がり東北に向ひて進むなり。本海流は其北進するに従ひ其速度を増し、四國以南に於て最大速度に達せるときは、二十四時間に百哩を走ると云ふ。而して其臺灣近海に於ける二十四時間の速度は概ね左の如し。

五月、九月間

十月、四月間

| | | |
|-------|----------|----------|
| パシ海峡 | 一八哩乃至四八哩 | 一八哩乃至四二哩 |
| 臺灣東岸 | 二四哩乃至四二哩 | 二四哩乃至三六哩 |
| 臺灣北東岸 | 二四哩乃至四八哩 | 一八哩 |

日本海流は有名なる暖流にして其平均温度は五月より九月までは攝氏約二八度にして同緯度に於ける海流限界以外の水温より高きこと六度内外なり、殊に其西北界は五五度乃至一度の急變を見ることあり。又其海水藍黑色を呈するを以て容易に附近の綠色の海水と之を區別するを得べし。

日本海流以外に臺灣附近に於ける海流は前述せる彼の季節風に伴はれて起る皮流にして夏季西南季節風の吹く頃は臺灣海峡支那東岸に於ては風力と時

間により其速度を異にし一時間一哩乃至三哩若しくは四哩、澎湖島近傍及其東にては八月中、時に四哩の速度を以て北流することあり、又其一支は分かれて二哩弱の速度を以てバシ及バリンタン兩海峽を経て東北に流れ太平洋の皮流に會す。

冬季北東季節風の頃には臺灣海峽にては一時毎一哩乃至二哩の速度を以て西南に流るゝ海流を生じ、バシ及びバリンタン兩海峽より入り來れる太平洋の海流を合せ南支那海に入る。此他臺灣の西岸を北流し、紅頭嶼附近を北又は北東に流るゝ區々の海流を生ずることあり。

潮● 潮浪の來るや朔望に於て臺灣東岸に於ては六時に、西岸に於ては十時乃至十一時に之を見ることあり、各地の潮信左の如し。

| | | | | | | | |
|---|--------|---|-------|-------------------|-----|----|-------------------|
| 淡 | 基隆 | 蘇 | 朔望高潮 | 大潮升 | 小潮升 | 潮升 | 小潮升 |
| 水 | 港 | 澳 | | | | | |
| 港 | 一〇時三〇分 | 灣 | 六時三五分 | 六 $\frac{1}{2}$ 呎 | 四呎 | 三呎 | 四 $\frac{1}{2}$ 呎 |
| | 一一時三三分 | | | 一一呎 | 八呎 | | 五呎 |

潮流

| | | | | | | |
|-------|-------------------|-------------------|-------|--------------------|--------------------|---|
| 堀 | 安 | 打 | 東 | 馬公港(測天島) | 小 | 潮流 |
| 港 | 平 | 狗 | 港 | 港 | 門 | 外流より來れる漲潮流は西南に向ひてバシ海峽に入り、落潮流は北東に向て流る、而して潮流は多少前述せる各種の海流の影響を受け朔望に於て殊に著るしとす、又海岸に沿ふて流るゝ潮流は西岸に於ては漲潮は北に落潮は南に。北岸に於ては漲潮は西に、落潮は東に流る。 |
| 堆 | 港 | 港 | 港 | 港 | 嶼 | |
| 一〇時〇分 | 九時四〇分 | 八時一九分 | 七時二一分 | 一一時三九分 | 一一時二九分 | |
| 一〇呎 | 三 $\frac{3}{4}$ 呎 | 三 $\frac{1}{2}$ 呎 | 四呎 | 一〇 $\frac{1}{2}$ 呎 | 一三 $\frac{3}{4}$ 呎 | |
| 五呎 | 二 $\frac{1}{2}$ 呎 | 二 $\frac{1}{4}$ 呎 | 二呎 | 七 $\frac{1}{2}$ 呎 | 九 $\frac{3}{4}$ 呎 | |
| | 一呎 | 三 $\frac{1}{4}$ 呎 | 一呎 | 四 $\frac{1}{2}$ 呎 | 五 $\frac{1}{4}$ 呎 | |

地震

本島は由來地震多き地方にして、激震のみに就いて見るに、清の康熙廿五

年(西曆千六百八十六年)以來明治三十九年四月十四日に至るまで、二百二十年間に十八回あり、内十三回は本島の南西部に起り、他の五回は北端部を襲へり。今本島に於ける地震分布の模様を類別すれば、凡そ次の如く五地方に分たる。

第一 北部地方 宜蘭臺北附近に於て最も多く、往々激烈なるものあり。宜蘭より基隆に至る海底にも著しき地震帯ありて、基隆港は曾て津浪に襲はれたる事あり。其の他、石底樹杞林白沙岬の三箇所は各局部的小震を發する地方なりとす。

第二 南投臺中地方 此地方に於て最も著しき地震は明治四十二年五月南投を中心として起りたる強震なり。

第三 嘉義より阿緞に至る地方 此地方は古來地震頻繁にして、傾臺後も屢、強烈なる地震を起せり、本島地震帯中最も主要なるものなり。

第四 恒春半島 本島の南端部にして、特に鶯鑾鼻は局部的小震多き地方なり、

第五 花蓮港地方 花蓮港又は其の附近の海底に發するもの多し。

第六 臺東地方 臺東及び其の附近の海底に發するものなり。

明治四十一・四十二の兩年間に於ける全島有感地震四百五十一回あり、之れを前記各地震地方に配分すれば、最も多きは第三嘉義より阿緞に至る地方にして全數の四〇%を占め、之に次ぐは第五花蓮港地方にして二一%を占む。第六臺東地方は一七%、第一北部地方は一三%にして、最も少きは第四恒春半島にして僅に二%なり。以上述ぶる所を以て略、本島に於ける地震分布の模様を知るべし。

本島地震と被害の程度 死者百人以上を出したる近年日本の破壊的地震につき死者一人に對する金潰家屋の數を示さば次の如し。

| 名 | 稱 | 年 | 死者一人に對する全住家の數 |
|-----|---|--------|---------------|
| 陸羽地 | 震 | 明治二十九年 | 二一・二 |
| 濃尾地 | 震 | 同 二十四年 | 一一・〇 |
| 庄内地 | 震 | 同 二十七年 | 五・九 |

| | | |
|------|----------|----|
| 臺灣地震 | 同三十九年三月 | 四五 |
| 臺灣地震 | 同三十七年十一月 | 三四 |

前表によれば兩度の臺灣地震は内地の諸地震に比して震害の著しく激烈なるが如し。然れどもこれ決して地震其物の大小のみに關係するものにあらず。寧ろ主として建築の良否に關係す。内地の木造家屋の耐震的なるに比して、臺灣流の土塙造りは構造極めて粗悪にして脆弱なる爲め、地震に際しては屋根落ち壁倒れて、殆んど避難の暇なき爲め、三十七年十一月の地震の際には全潰家屋三四毎に死者一人を出だすに至れり。濃尾地震の如きは臺灣兩度の地震に比して遙に大震なりしが、而かも死者一人に對する全潰家屋の數は一〇なりき、以て家屋構造と震害と密接の關係ある事を知るに足るべし。更に負傷者に就て見るに、負傷者と死者とは三七毎に一乃至一五毎に一の割合なるを以て普通の例とするも、臺灣地震にては負傷者と死者とが殆んど同數なり、又負傷者の種類に就て見るに、内地の地震にては打撲及挫傷最も多く全數の七割以上を占め、骨の損傷は意外に少く、僅に全數の百分の八に止れ

顯著なる地震

ども、臺灣地震に於ては之に反し骨の損傷最も多く、約傷者の半數を占む。此等は皆主として脆弱なる土塙造りの爲めにして、潰倒に際し重量大なるを以ての故なり。因に云ふ土塙と稱するものは、粘土を長方形に切り、天日に乾し堅めたるものを積み上げて壁とし、木材を用うる事極めて少し、市街地に於ても全部土塙造りの家屋なれば一朝強震に遭遇すれば被害を見る事殊に甚しきは敢て怪むに足らず。

顯著なる地震 領臺以後に於ける顯著なる地震は次の如し

- (一) 明治三十一年九月一日午後四時五十九分北部強震
- (二) 明治三十一年九月三日午後十一時二十一分北部強震
- (三) 明治三十四年六月七日午前八時五十分北部強震
領臺後初めての大震にして、臺北臺隆宜蘭地方に於て最も強く水返脚に於て土人家屋五十六戸破損し、其他多少の被害ありたり。
- (四) 明治三十六年六月七日午後五時七分北部強震
- (五) 明治三十六年九月七日午後三時十四分臺東強震

(六)明治三十七年四月二十四日午後二時三十九分南部西沿岸烈震
北は斗六より南は蕃薯藜に互り強烈にして死傷者十三人家屋の破損九百餘戸に及べり。

(七)明治三十七年十一月六日午前四時二十六分嘉義烈震
北は斗六より南は鹽水港に至る間強烈にして、殊に嘉義地方に於て震害最も甚しだく、死者百四十五人、傷者百五十八人家屋損害三千七百九十戸内全潰六百一十一戸に及べり。

(八)明治三十八年八月二十八日午後零時二十四分花蓮港強震

(九)明治三十九年三月十七日午前六時四十三分嘉義大震

領臺以來の大地震にして、當地方は嚮に明治三十七年十一月の烈震の爲め多大の被害を蒙り、瘡痍未だ癒えざるに、僅に一年半にして再び猛烈なる大震の襲撃を受けたり。死者千二百六十六人、傷者二千四百七十六人、全潰家屋七千二百八十四戸、破損家屋三萬二十一戸(住家のみにて)に及び、城壁を破壊し震害の激烈なる事は明治二十四年の濃尾大地震に次ぐと云ふ。

然れども激震區域は極めて狭小にして、嘉義廳下梅仔坑より新港附近に至る東西約七八里、多里霧より嘉義附近に至る南北約七八里の地方に過ぎず震源は比較的淺かりしものゝ如く、爲めに地表に著しき斷層線を現はしたり。此斷層線は梅仔坑より打猫に至る約三里九丁に互り、横じりの最大なるは八尺にして開元後庄に現はれ、陥落の最大なるは六尺に達し、梅仔坑附近に出現せり。大森博士は之れを梅仔坑斷層と呼べり。尙大震に引繼ぎて餘震頻繁に起り、其内強烈なるものは同年四月四日及七月に發し、共に死者一人宛を出だせり。

(十)明治三十九年四月十四日午前七時五十二分斗六より蕃薯藜に至る地方強震
此れ又著名なる強震にして死者十五人、傷者八十四人を出し、家屋の損害一萬餘戸に及べり。

(十一)明治四十一年一月十一日午前十一時三十五分璞石閣拔仔庄強震
東部地方に於ては明治四十二年十一月花蓮港強震に次ぐものにして死者二人を出だせり。

- (十二) 明治四十二年一月二十日午前十時五十九分、臺東強震
- (十三) 明治四十二年四月十五日午前三時五十四分極北部強震
臺北最も被害多く、桃園基隆之れに次ぐ。死人九人、傷者五十一人、家屋の損害一千餘戸に及び、傾臺以後北部に於ける最強の地震なりとす。
- (十四) 明治四十二年五月二十三日午後六時四十四分南投彰化強震
- (十五) 明治四十三年十一月二十一日午後三時三十七分花蓮港強震
花蓮港を中心として臺北基隆宜蘭地方に強烈にして傷者四人、家屋損害五十餘戸なり。

五 臺灣の屬島

澎湖群島

澎湖群島は外人之をベスカドルス諸島と稱し、臺灣本島との間に澎湖水道を挟み、臺灣海峡中に在るものにして大小四十七個の島嶼と多數の岩礁とよりなる。

本群島の主要部をなせるものは、北回歸線上に横れる澎湖島白沙島漁翁島

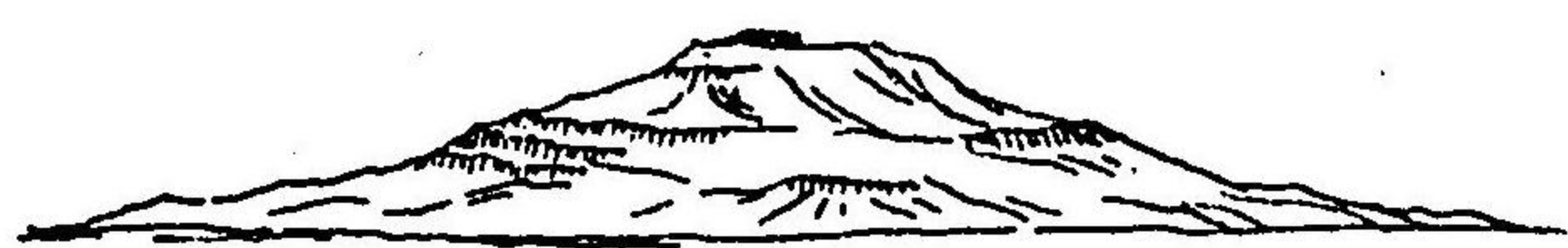
並びに其附近の島嶼にして、其他この南方海上に基散せる小嶼と共に臺灣海峡淺海の海底より僅かに海面上に露はれたる低平なる島嶼をなせり。是等の諸島は第三紀層を貫きて噴出せる玄武岩の熔岩盤によりて構成せられ、是等の熔岩は三回に流出せしものごとく、其三層分明に現はれ、且つ各層の間には砂層を含めるを見る、而して是等諸島の特色は此の熔岩流の高き山岳を形成するに至らずして、水平的に氾濫し又或ものは海中に噴出し、其最後のものと雖海浪の浸蝕を受け爲めに何れの島嶼も低夷にして平均二三十米の丘陵をなし、最高地點と雖僅かに五十六米の標高を示すに過ぎざると、其表面には河と云ふべきものなく、島上又樹木の繁茂せる處極めて乏しきに在り。されば是等の島嶼を遠望すること極めて難く漸く其附近に至りて水平線上に島影を認むるに過ぎず、又諸島中稍大なるものを觀るに何れも複雑なる島形をなし、殊に主島澎湖島の如き水平的肢節に富み海岸線の發達甚だ大なるものあり、而して海岸には或は低き峭壁をなし斷崖直ちに海に臨めるところあるも、其間には諸處に砂濱を交ゆるところ少からず又至るところ珊瑚礁よく

發達し 其礁脈遠く海に連なり遠きは三里の沖合に及べる所ありと云ふ、從つて此等諸島の汀線以外の部分を見るに一はこの珊瑚礁の發達せると一は又磯波の破壊的作用によりて水底に於ける岩盤次第に浸蝕せられたるとにより、汀線に沿うて淺き海底の臺地を造り、而して潮汐の干満により此の臺地は僅に出沒するを觀る、尙海砂風浪に送られ砂嘴の發達著しき所あり。

澎湖

今之よりは是等島嶼の主要なるものに就て觀察せん。

澎湖島は本群島の最大なるものにして周圍一〇一五軒、面積六二七方軒にして支那人は一に之れを大山嶼と呼ぶ、島の眞北に當り中墩島白沙島あり、是等の諸島は其西方に横はれる漁翁島と相擁して其中に澎湖灣を抱き、全體の形は既に故齋藤理學士が巧みに喩へられし如く多島海の火山島サントリン群島と酷肖し、該群島のテラ島は澎湖中墩白沙の三島を連結せしものに比すべく、テラシア島は恰も漁翁島に當り、中央火口島は我が大倉嶼に比すべく、要するに本諸島は東洋のサントリン島と稱すべき如きもこは形狀上的一致に過ぎずして其構造は根本的に相異なるものなり。澎湖島の中央部に於ては拱



紗帽山(齊藤理學士に依る)

北臺の丘陵及び其東北にあたり大武山ありて本島第一の地點を爲す、拱北臺よりは四個の半島突出す即ち西南に楓樞美半島西方に媽宮半島、北に牛馬劍鷄母塢東北に尖山半島あり、而して各半島の間には何れも深き灣入を造る、是等半島中、楓樞美半島は屢經れて狭き地峽部を造り長く延亘す、其最も狭きところは井仔按隣裡西郷の中間にして僅かに百米餘の低地をなすに過ぎず、其地峽部の西には紗帽山隆起して海拔四七米なれども、外界の浸蝕作用のために圓錐形を呈し、其山腹には玄武岩の累層よく露はれ帽子の如き形をなすを以て人の注意を惹く此半島に對して北に突出するものは媽宮半島にして楓樞美半島との間に深き媽宮灣を擁す、この灣は澎湖灣の主灣をなしかつこの兩半島に圍繞せらるゝを以て風浪を防ぎ安全なる碇泊地をなす、媽宮半島よりは別に大案山半島を出し、其先端には更らに小案島を分ち、半島との間に又一小灣を造り之を狹義の媽宮灣或は馬公又は戎克灣アキクと稱し、其西北岸に本島の主邑をなせ

馬公

る馬公横はり海軍の要港をなす。

澎湖島の北に突出せる牛母件嶼或は鷄母塢半島は其西に、同名の入江、東に港底灣を擁し其間に突出せる半島部をなし其北端は極めて狭き海峡をなせるも現時は繼安堤なる石堤によりて中墩島と連結せらる、中墩島は周圍四・八方面積一・三方秆高さ僅かに一〇米餘の小嶼にして、其北は又永堤なる石堤によりて白沙島と連結せらる、而してこの附近の海は極めて淺くして干潮の時は岩盤水面上に露はれ徒渉するを得ると云ふ。

白沙島

白沙島は澎湖灣の北を擁する島にして、群島中三大嶼の一なり、其面積一・三八方秆周圍二九秆に及び、海岸出入に富む。然れども其高さは極めて低平にして後墩山三六米龜頭山等は本島に於ける比較的高き丘陵地をなす、殊に海濱の地方は平盤廣く發達し、泥沙遠く相連なり、島の西南には砂嘴の突出せること約一秆に及ぶものあり。

漁翁島

漁翁島は澎湖灣の西を擁する小島なれば一に之を西嶼と稱す、其形南北に長くして一〇秆に近く、東西の幅狭きところは一秆に充ざるところあり、其

澎湖灣

面積は二九方秆にして、周圍は三九五秆に及ぶ。本島より東北に突出せる岬角を漁翁角と稱し白沙島との間一漚を隔つるのみにして岩礁多くこの間を牛公灣と云ひ潮流極めて急速なり。漁翁島の南に竹篙灣の小灣あり北風を防ぎ良港をなす、之より海岸線は南に走り本島の東南角をなすものを、小島角(海拔五二米)と呼び、西南の岬角をなすものをリクター角と稱し燈臺此の上に設けらる。本島の地形は諸島中地盤比較的に高くして臺地狀をなし、海岸は峭壁を以て直ちに海に没す。島の西南外按半島に於ては海拔五六米に達するところあり、尙漁翁島の北端には極めて狭き海峡を隔て本島より離脱せる小門島の横はるあり。

此の三大島に扼せられ中間に横はれる一灣は之を澎湖海又は澎湖灣と稱し、灣内廣くして東西三漚南北五漚に餘り水深くして大船を入るゝに足り、臺灣海峡に於ける第一の避難地と稱せらる。

本島の附近には尙幾多の島嶼ありて其稍著しきものを述ぶるに、澎湖海の中央より稍北に偏して六倉嶼あり、白沙島の北には稍大なる吉良嶼(面積三・一



(る依に士學理藤齊) 島 井 虎

方杆周圍一〇杆・枯婆嶼・鐵鉛嶼・員貝嶼其他の岩礁あり。澎湖島の西南にはこれより離脱せる虎井嶼(面積一五杆周圍八杆)桶盤嶼等あり。尙この他稍著名なるものは虎井嶼の南ローバ海峡を隔て、八罩嶼及び將軍嶼あり。この西方海中に孤立して花嶼あり。更らに八罩嶼の南にはステイプル海峡を隔て頭巾嶼・鐵鉛嶼・西嶼・東嶼・平及び其他の岩礁よりなれる小群嶼あり。この群嶼の東には西吉嶼・東吉嶼又西には前述せし花嶼の南にあたり大猫嶼・小猫嶼・草嶼等の小列嶼をなして横はれるものあり、又澎湖群島の最南にあるものを大嶼と稱し其大さ略八罩島に伯仲す。以上述べ來りたる是等の諸嶼は何れも澎湖島と同じく玄武岩よりなり珊瑚礁を伴ふ。

この他臺灣半島附近の屬島としては左の數者あり。

● 小琉球島 ● 臺灣南部淡水溪河口の南方約七哩の沖にある小島にして臺南平野に於ける隆起珊瑚礁と同じく古期の珊瑚礁より成る。此他又本島の西南海上に火燒島・紅頭嶼・小紅頭嶼等あり、是等の諸島は遠く

小琉球島

南方モルッカ諸島・フィリピン諸島のミンダオ島を経てルゾン島南部に亘れる所謂マヨン火山脈の更らに北方に延亘せるもの、北端をなせるものにして、この火山脈はルゾン島を離れてより、臺灣南方のバシー海峡に於て、ハブヤン・バタン・パン諸島を起し延びて紅頭嶼・火燒嶼となれるものにして所謂火山島をなせるものなり。

紅頭嶼

紅頭嶼は臺灣島の南端慈鑾鼻岬角の北東々三十五哩の海上にありて東西一二杆南北六杆周圍約三六杆に及ぶ、遠く之を望めば稍臺地狀をなせるも要するに其火山最初の形相は著しく削磨せられ其原形を想像するに難し、沿岸には絶壁をなせる所多く其稍平坦なる所は砂濱をなし、其背後には土人の村落を造るものあり、本島を構造せる主要なる岩石は玄武岩角閃富士岩等にして、島の西端は斑瀝岩・蛇紋岩等古火成岩露はれ、海岸には珊瑚礁の縁礁をなし發達せるもの少からず、又内地にも隆起珊瑚礁あり蓋し第四紀古期に生せしものならん。

小紅頭嶼は本島の南にある小嶼たるに過ぎず。

小紅頭嶼

火燒島

火燒島は外人之をサマサマと稱し、卑南の東東南約一五哩のところに在る小島にして圓錐形をなし森林鬱蒼たり、島は

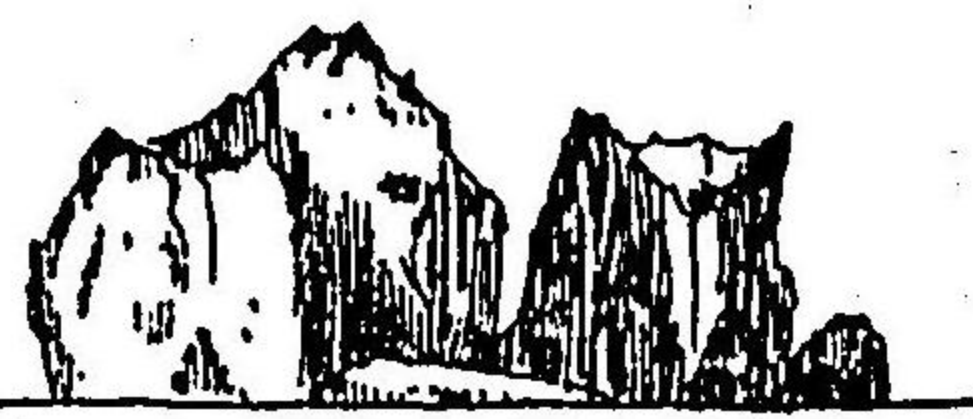
主として紫蘇輝石角閃富士岩より成り、其沿岸に珊瑚礁の發達せること前者に異ならず。

龜山嶼は宜蘭平野の東方の沖にあり、富士岩より成れる小嶼なり。

更らに本島北端の東北の海上に當りて二三の小嶼あり、即ち花瓶嶼(ビンナクル)棉花嶼(クラグ)彭佳嶼(アザンクル)の三島にして遙かに其の東方尖閣群島に對す。

花瓶嶼は基隆の東北東二一哩に位し玄武岩質富士岩よりなる岩礁にして海拔僅かに四〇米、其島頂は鋸齒の如く出入す。

棉花嶼は土名扛橋嶼と稱し基隆の東北二八哩の沖にありて花瓶嶼の西々北に位し、又玄武岩質富士岩よりなる火山島にして南北五〇〇米東西三〇〇米の小島をなし海岸は峭壁を以て圍まれ僅か



(る依に士學理藤齊) 嶼瓶花



(る依に士學理藤齊) 嶼花棉

龜山嶼

花瓶嶼

棉花嶼

彭佳嶼



(圖原者編) 嶼佳彭

に西北に小河を開く、島の高さ漸く海拔五五米に及ぶ。この火山噴出の中心は今日之を求むる能はざるも、想ふに島の東方最高丘の東方に其中心の横はりしものゝ如く、之より熔岩を溢出し次で少量の火山砂礫等を噴出し、最後に是等の層を貫きて熔岩を噴出し小火山嶼を造りしも今は僅かにその形骸を止むるに過ぎるものゝ如し、唯本島は鳥類の棲息するもの極めて多く、數萬の群をなして飛翔する光景實に驚くべきものありと云ふ。

彭佳嶼は土名一に大峙山嶼と稱す、臺灣領土の最北に位し、基隆を距る北々東三十五哩の處にあり、三島中最大なるものにして海岸は悉く絶壁によりて圍まれ、地勢は東方に高く西方に低くして最高は海拔百六十米に及ぶ、又火山岩よりなり海岸には珊瑚礁ありと稱せらる。

第三章 地質

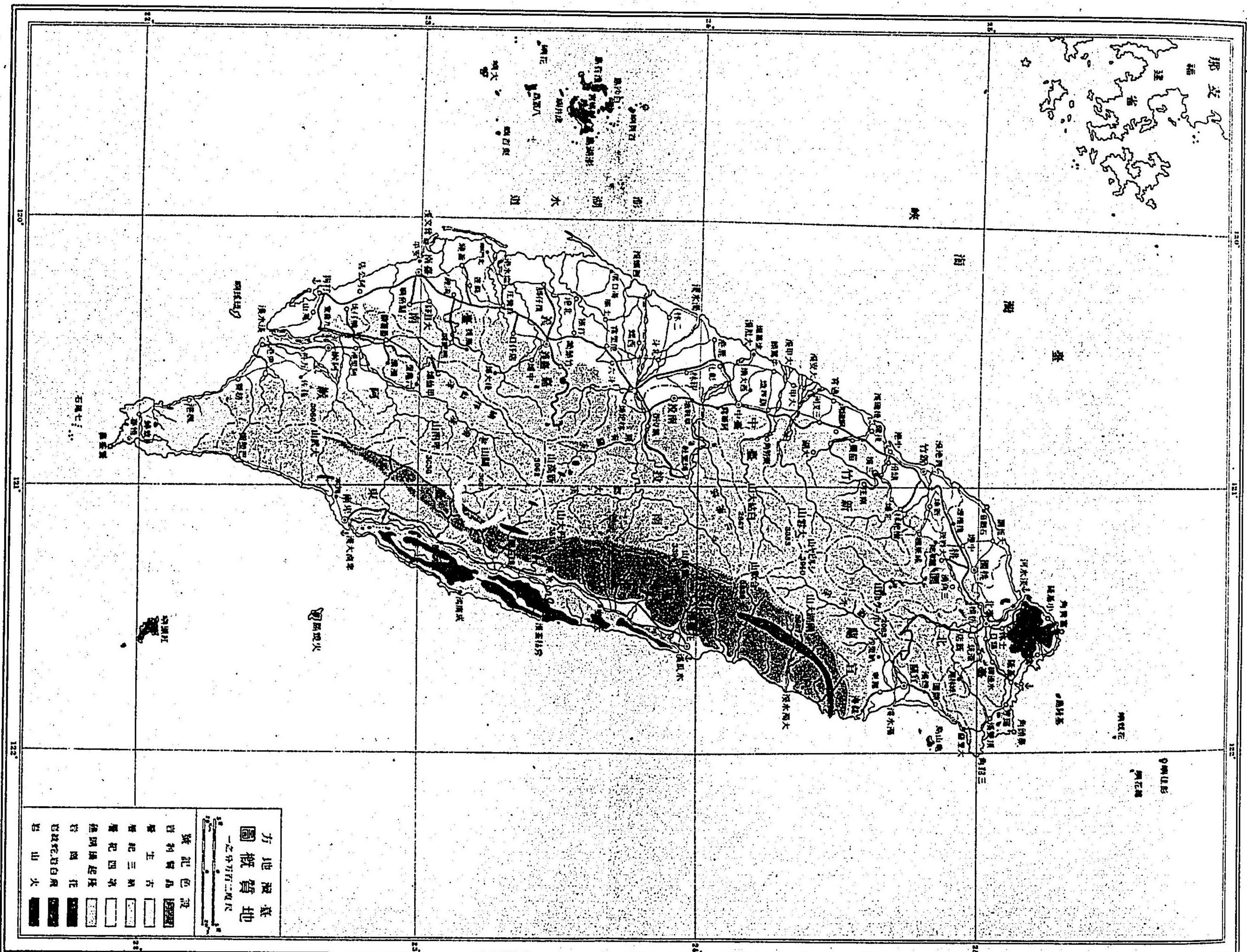
一 汎論

臺灣本島を構成する地質は、主として水成岩にして、變質岩之に次ぎ、火成岩最も少し。而してその島の脊梁骨を構成する地質は片麻岩系、晶質剝岩系なり。

臺灣の片麻岩系は今日までに知る所に據れば、主として花崗岩の働力變質を受けて變質せる正片麻岩にして、其他の片麻岩類は多く之れを發見せざる者の如し。晶質剝岩系は石墨剝岩・綠泥剝岩・絹雲母剝岩の如き普通の變質岩あるは他地方に於けると異ならざるも、大部は本系に屬すると思はるゝ。結晶石灰岩の大規模に發達するは本島の地質の一異彩と云はざるべからず。而して此の結晶石灰岩は下部に於ては普通の晶質剝岩類に移化し、上部に於て古生代の粘板岩と互層するの事實よりして之れを考ふれば、始原代より古生代の

系なり。

臺灣の片麻岩系は今日までに知る所に據れば、主として花崗岩の働力變質を受けて變質せる正片麻岩にして、其他の片麻岩類は多く之れを發見せざる者の如し。品質剝岩系は石墨剝岩綠泥剝岩絹雲母剝岩の如き普通の變質岩あるは他地方に於けると異ならざるも、大部は本系に屬すると思はるゝ結晶石灰岩の大規模に發達するは本島の地質の一異彩と云はざるべからず。而して此の結晶石灰岩は下部に於ては普通の品質剝岩類に移化し、上部に於て古生代の粘板岩と互層するの事實よりして之れを考ふれば、始原代より古生代の



下部に相當する者なるが如し。

臺灣本島地質の第二の異彩とも云ふべきは、粘板岩系の廣く發達せることにして、品質剝岩系及び結晶石灰岩系の西側に沿ひ、中央分水嶺を構成し、分水嶺中の高山峻岳は皆此の粘板岩より形成せらるゝなり。而して此の粘板岩系の地質年代も亦、結晶石灰岩系の夫れと同じく單純ならずして、上部に於ては第三系に移化し、下部に於ては、結晶石灰岩系に移化す。蓋し下部は古生界を、上部は白堊系乃至第三系の下部を代表する者の如し。而して精確に其の地質系統と地質年代とを知るを得るは、後日化石の發見と層位の研究とに俟たざるべからず。

第三系は主として粘板岩系の西側に發達し、其の他臺東海岸山脈も亦概ね第三系より構成せらる。其の下部粘板岩系とは漸移して判然たる境界線を其間に引く能はざるも、上部第四系とは、概ね地形上より之れを區別するを得べし。即ち第三系は主として海拔二百米乃至千米の中山性の山嶽を構成するも、第四系は概ね盆地又は海拔百米乃至二百米の臺地を構成せるなり。

第三系は必ずしも埋藏する所の化石に乏しからざるも、調査未だ充分ならずして、基隆附近八斗の砂岩中より海膽類エキノデックス(Echinodiscus)の新種を發見したる外、學術上殊に價值あるものあるを知らず。唯、本島鑛産の一富源たる煤炭の主として北部第三系中に埋藏せられ、石油の概ね西部第三系中に賦存し、金銀砂金及び銅の極北東部の第三系中より産するは、應用地質學上重要な事實と爲さるべからず。但し西部第三系中の臺南廳下滾水坪に於ける高さ七十餘尺に達する泥火山の如きは、學術上の珍とするに足るものなり。

第四系は第三系の西部に發達し、其の分布最も廣く、人文上要用の地域に屬す。若し夫れ苗栗附近の砂岩及び泥板岩の互層より成る一累層が、果して第四系の下部に屬するか、抑も亦第三系の上部に屬するかは尙ほ將來の研究を俟たざるべからず。

臺灣は地域亞熱帶乃至熱帶に屬するを以て、熱帶地方特有の岩類發達せる所少からず。打狗附近鳳山の丘陵小琉球嶼恒春海岸には珊瑚礁の厚く發育せ

るあり、桃園地方其の他には紅土あり。是等は内地に於ては全く見るべからざる地質的光景なりとす。

火成岩は其の露出區域割合に狭少なるも、其の岩種は必ずしも少しと云ふべからず。深成岩には花崗岩閃綠岩斑縐岩及び蛇紋岩あり、火山岩には流紋岩富士岩及び玄武岩あり。而して其の噴出の時代は始原代より第四紀に亘り現出の状態は岩床併盤岩脈又は熔岩流なりとす。

本島の火成岩に就て一言注意すべきは、閃綠岩斑縐岩蛇紋岩の如き、曾ては古火成岩の名を以て呼ばれたる所謂深成岩が、單に古代の地層に限らず、新生代の第三系を貫き、或は第三系中に岩床を爲して存在し、其の迸發の確かに第三紀以後なることを示せることなり。即ち擺接堡に於ける閃綠岩は第三系中に岩床を爲して迸發し、坪林尾の西南金瓜寮溪を溯ること約三里の處及び大崙坎溪の支流合脰溪の合流點附近に露出する斑縐岩は、第三系中に併盤を爲し、合脰頭監督所附近及び恒春半島大板橋の斑縐岩は第三系を貫きて岩脈を爲し、臺東海岸山脈に於ては蛇紋岩は第三系を貫通して岩脈を爲せり。

始原大統

片麻岩系

二 始原大統

片麻岩系 片麻岩系は臺北の東北の海岸ドーム角より起り、概ね東西に走り次で島の長軸に沿ふて西南の走向を探り太魯閣の蕃地に入る者の如きも、其の詳細は蕃地の踏査を俟たざれば明かならず。

岩石は花崗岩より變せる正片麻岩にして、時としては片理明ならずして純粹の花崗岩なることあり。成分鑛物は主として正長石・石英及び黒雲母にして、黒雲母花崗岩に屬す。尙ほ大南湧に於ては正長石・石英・黒雲母・白雲母・角閃石及び磁鐵鑛より成る角閃片麻岩露出すと云ふ。其の品質剝岩系との關係は未だ詳ならず。

品質剝岩系

品質剝岩系 品質剝岩系は島の東岸蘇澳の南島岩角花蓮港間に起り、島の長軸に並行し帶狀を爲して中央山脈以東に露はれ、南走するに従ひ次第に狭くなり、遂に知本溪の上流に至りて盡く。岩石は絹雲母剝岩・絹雲母・石墨剝岩・絹雲母・綠泥剝岩・石墨剝岩・點紋綠泥剝岩・石墨剝岩・點紋綠泥剝岩・石墨剝岩・滑石剝岩・陽

起剝岩及び藍閃剝岩なり。

絹雲母・石墨剝岩は灰色又は暗灰色にして絹絲光澤を放ち、絹雲母・石墨・石英及び磁鐵鑛より成り、時に石英分に、時に石灰分に富む。其の石英は眼球狀を爲すことあり。往々點紋あるは變質の結果斜長石を生せるなり。

絹雲母・綠泥剝岩は帶綠色にして絹絲光澤を放ち、主として絹雲母・綠泥石及び石英より成り、往々石灰に富み、又滑石質となることあり。其の上層粘板岩と接する處は綠泥質千枚岩に移化し、遂に粘板岩に變ず。

石英剝岩は主として石英より成るが、其の他概ね絹雲母の少量を含む。其の石墨を含む者は石墨剝岩に、綠泥石を混するものは綠泥剝岩に移化す。

滑石剝岩は大南湧の北海岸に露出し、主として滑石・石英及び綠泥石より成り、其の他白雲母及び磁鐵鑛を有す。時として石英は眼球狀を呈することあり。

角閃剝岩は暗綠色を呈しドーム角に於て正片麻岩の兩側に相接して露出す。主として角閃石及び石英より成り、時として粒狀にして火成岩としての角閃岩に屬するものあり。

陽起剝岩は主として陽起石と石英とより成り、往々黄鐵礦を撒點す。淡綠色乃至黄綠色を帯び質は緻密乃至粗粒なり。又結晶の大なるものは時としては松葉を束ねたるが如きものあり。

藍閃剝岩は其の層位及び分布を詳にせず、唯水尾の背後の中央山脈より流下する溪流中に於て轉石を得たるのみ。表面は分解して絹雲母を含み、内部は主として藍閃石より成る。

以上品質剝岩の層位に就ては石井理學士は埔拔横断線路に於ては上部に綠泥剝岩あり、次に石墨綠泥剝岩あり、最下部に絹雲母剝岩あり、石英剝岩は隨所に夾雜して一定の層位を占めず、層向は南北にして西に傾斜すと云ひ、出口理學士は集璞横断線路に於ては上部に綠泥剝岩あり、下部に石墨剝岩ありて、他の種類の剝岩を認めずして一の背斜を爲すと云ふ。尙溪流中の流礫には石墨剝岩の非常に摺曲せるものありと云ふ。

三 結晶石灰岩系

結晶石灰岩系

純白色乃至灰白色を呈し、時に石墨綠泥石又は絹雲母等を混するものを結晶石灰岩と稱し、其の下部は品質剝岩系中に介在して著るしく剝理を帯び、上部は古生代の粘板岩層と互層し、始原代より古生代の下部を代表す。初めは北端に於ては蘇澳の南より大清水溪附近に及ぶ幅員を有するものと想像せられたるも、種々踏査の結果臺灣山系の主軸に沿ひ中央部に多少發達するも、北走するに従ひ次第に減じて剝岩中に介在し、南するものは粘板岩系中に尖滅するものの如きを知るに至れり。

四 粘板岩系

粘板岩系は中央分水嶺の骨格を構成するものにして、北部に於ては北は宜蘭廳大里簡の南、合興より、南は蘇澳の南烏岩角の北に及び、島の長軸に沿うて南々西走し、西側は阿緞廳下枋藁の南、南勢湖溪の附近に於て、東側は牡丹灣頭に於て第三系に被覆せらる。岩石は綠泥質千枚岩千枚岩硬砂岩粘板岩石盤石及び灰色砂岩にして、千枚岩は表面風化して絹雲母を生じ、遠く其

の露出部を見れば凱々たる白雪を見るの感ある處あり。硬砂岩は粗粒堅實にして石英白雲母磁鐵礦より成る。多く粘土を含むものは黝色を帯ぶ。石盤石は暗黝色を呈し、粘土の外白雲母を多く混じ、年代古きものは劈開著しく發達し、石材として使用するに足るも、年代新きものは劈開完全ならずして不規則に破壊す。灰色砂岩は石英長石磁鐵礦及び白雲母より成る。

粘板岩系は下部に於ては結晶石灰岩系に、上部に於ては第三系に移化する。前の場合に於ては綠泥質千枚岩發達し、尙ほ其の上部に硬砂岩粘板岩の互層あり、後の場合に於ては不完全の劈開を有する石盤石となり、往々其の中より海膽類の化石發見せらる。

粘板岩系は化石に乏しく、其の精細なる地質年代は之を知る可らず。明治四十二年十一月新高山上海拔約三千六百米の地點より中島某の拾得せる葉鰓類に就き横山理學博士は古生代に産するマクロドン *Macrodon* 及びククラエア *Cunlhea* ？ 并に中生代の三疊紀に出づるミオンフォリア *Myophoria* ？ 及びシジツス *Shizodus* ？ に屬する者の如しと爲せるによりて之を觀れば、此の新高山附近の

地層は古生代の上部か或は中生代の下部を代表する者の如く、又桃園廳下挿天山麓、室蘭廳頭圍堡金面庄白石湖及び臺北廳屈尺第二發電所附近よりは、スパタンヂー族に似たる海膽類を出だせるを以て、粘板岩系の上部は、中生代の末葉より第三系の一部を代表する者の如し、尙ほ神保理學博士は宜蘭廳下蘇澳の石盤石中より有孔虫を發見せるを以て、其の種屬確定の上は本系の地質年代に更に光明を添ゆることあるべし。

粘板岩系の地質構造に就ては出口理學士は叭樹橫斷線路上に於て圓山附近に一の背斜、パロン山西麓に一の向斜、挿天山地麓に一の背斜を、埔拔橫斷線に於て埔里社より中央分水嶺迄に一對の向背斜を、分水嶺の西麓に一の向斜を、集球橫斷線路に於て新高山西麓に一背斜を中央分水嶺なる秀姑巒山頂に一向斜を認めたり。

五 新生大統

第三系 第三系は主として粘板岩系の西側に發達し、其の他臺東海岸山脈

第三系

及び恒春半島を構成す。粘板岩系の西側に發達するものは下部は粘板岩系との境界判然たらざるも、上部は第四系によりて被覆せらる。今其の成生の状態と地方的分布とに由り、苗栗以北を北部第三系、以南を西部第三系と名づけて之を説明す。

北部第三系

北部第三系は石炭を夾むを以て特徴とし、淡褐色の砂岩、灰色の泥板岩質砂岩、淡褐色又は白色の石灰質砂岩、砂質泥板岩、滙青質の石炭層、砂岩礫より成る礫岩、ロタリア及び葉鰓類を含む石灰岩、玄武岩質凝灰岩等より成り、就中砂岩最も多く發達す。基隆港の沿岸に發達せる砂岩は方狀の節理を有し、又往、泥灰質の團塊を含み、基隆燈臺の下及び社寮島に於ては團塊の下部は海波の浸蝕作用を免れたる結果、團塊を冠石とする土柱ありて天工の奇を極む。又臺北基隆附近の八斗の砂岩中よりは直徑十一センチメートルに達する海膽類エキノデウス *Echinodiscus formosus* Yosh. の化石を産し、淺海成相に屬す。

土柱

西部第三系

西部第三系は石油を胚胎するを以て特徴とし、燃質瓦斯鹽水合油層滲出油

泥火山

等の石油の徴候は處々に發見せらる。石英・長石磁鐵礦及び白雲母より成り、往々黃鐵礦の團塊を含む細粒砂岩泥板岩質砂岩泥板岩質砂岩・珊瑚及び葉鰓類の化石を含む石灰岩より成り、就中砂岩及び泥板岩質砂岩最も能く發達す。又燃質瓦斯は地中の泥土を伴ふて噴出し、高き七十餘尺に達する泥火山を形るものあり、臺南廳下滾水坪に於けるが如し。

西部第三系中にも往々にして石炭を埋藏するも概ね薄層なり、唯、南投廳下加道坑の亞炭は厚さ六尺に達するものあり。

恒春半島の第三系

恒春半島を構成する第三系は下部は泥板岩より成り、上部は礫岩礫岩及び砂岩の互層、砂岩砂岩及び泥板岩の互層より成り、蚊蟀支應より港口溪を溯ること約十町にして上下兩部の不整合線を以て相接する處あり。

泥板岩は脆弱にして褶曲錯雜し、礫岩は砂岩・硅岩・石灰岩・橄欖岩等の圓礫より成り、天然の混凝土にして削剝作用に對する抵抗力強く突兀巍峩なる斷崖を爲す。大尖石・小尖石の如き是れなり。石炭及び石油の如き應用材料に乏し、深海及び海岸成相なり。

臺東第三系

臺東第三系は主として海岸山脈を構成するものにして、其の他臺東の縦谷の西部に點々散在す。多少の石油を含むも石炭に乏し。岩石は之を下層より列擧すれば礫岩オパーキュリナ石灰岩砂岩及び泥板岩の互層集塊岩及び凝灰岩石灰岩砂岩及び石灰質砂岩にして粘板岩系を不整合に被覆す。

礫岩には品質剝岩を礫とするものと、粘板岩を礫とするものとの二種ありて、前者は花蓮港の背後にある米崙山に、後者は卑南大溪の左岸利基社社の對岸に於て二百尺の絶壁を爲して露出す。礫片往々細小となり、厚さ二三寸の亞炭を含むことあり。

オパーキュリナ石灰岩は黝白色にして顯微鏡下にオパーキュリナを認むるを得べく、卑南街の北擺仔擺及び猿仔山に露出す。

砂岩及び泥板岩の互層は岩質西部第三系に於けるものに類似し、其の内に石油を胚胎す。海岸山脈分水嶺以西、殊に南部に發達す。

砂岩は概ね淡黝色を帯び、時としては暗黝色又は帶青色なり。主として石英及び長石より成り、其の他角閃石磁鐵礦白雲母オパーキュリナ植物等を混在す。

集塊岩及び凝灰岩は主として分水嶺を構成し、其の分布廣大なり。岩種は閃輝富士岩又は輝石富士岩に屬す。

石灰岩は集塊岩を被ひ、又は集塊岩に移化する。往々腹足類の化石を埋藏するも保存不完全にして屬種を知る可らず。

臺灣總督府殖産局鑛務課發行の臺灣地形地質鑛産地圖説明書には化石の產地及び種類并に母岩を次の如く表示せり。

| 化石 | 產地 | 母岩 |
|-------------------------------|------------|-----|
| ロタリア <i>Rotalia</i> sp. | 臺北廳擺接堡冷水坑 | 石灰岩 |
| オパーキュリナ <i>Operculina</i> sp. | 新竹廳苗栗一堡出磺坑 | 砂岩 |
| | 南投廳北山坑 | 砂岩 |
| | 臺東廳廣鄉貓仔山 | 石灰岩 |
| | 同 擺仔擺仔 | 石灰岩 |
| | 同 雷公火 | 砂岩 |

珊瑚

同 公埔

嘉義廳六里溪

臺南廳千秋藎

同 大崗山及小崗山

同 半屏山

海膽類スクテラ *Scutella* sp. 臺北廳大加蚋堡林口庄

同 芝蘭堡一芝山岩

同 基隆堡八斗庄

桃園廳大崙崙地牛角南峙北下

同 大崙崙地枕頭山

臺北廳大加蚋堡錫口

同 基隆堡外木山

阿古女 *Conus* sp.

桃園廳大崙崙地枕頭山

玉介 *Naucis* sp.

嘉義廳後坑庄

砂岩

石灰岩

石灰岩

石灰岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

川合介 *Cerithium* sp.

同 火炎山

牡蠣 *Ostrea* sp.

臺北廳擺接堡冷水坑

同 大加蚋堡錫口

同 桃園廳海山堡蔴山

同 大崙崙地水流東

同 三角湧蕃地湊合

新竹廳苗栗烏眉坑

嘉義廳六重溪庄

臺南廳新化東重山子頂庄

同 關帝廟古亭坑間

帆立介 *Pecten* sp.

臺北廳三貂堡龍山洞

同 基隆堡九价土地公坪

同 大加蚋堡六張犁

同 林口庄

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

砂岩

| | | | | | | | | | | | | | |
|----------------------|----------------|------|-------|------|--------|----------|----------|----|---------|-----------|--------|--------|----------|
| 同文山堡太平より丁仔蘭溪砂岩に下る峙砂岩 | 同東勢坑派出所より上約七八町 | 同友蚶庄 | 同大安藁社 | 同社后坑 | 桃園廳石灰坑 | 同三角湧蕃地湊合 | 臺中廳東勢角七份 | 同 | 嘉義廳中埔口庄 | 臺北廳大加蚶堡錫口 | 南投廳北砂坑 | 嘉義廳清水溪 | 臺北大加蚶堡錫口 |
| 砂岩 | 砂岩 | 砂岩 | 砂岩 | 砂岩 | 石灰岩 | 砂岩 | 砂岩 | 砂岩 | 砂岩 | 砂岩 | 砂岩 | 砂岩 | 砂岩 |

魁蛤 *Arca* sp.
 風吹介 *Yoldia* sp.
 滿月介 *Lucina columbella*
 蜆介 *Cyrena* sp.
 廉介 *Venus* sp.

| | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-----|----|-----------|---------|-----------------|-----------|------------|-----|---------|---------|-----------|------------|------------|
| 同公館附近 | 同錫口 | 同 | 臺北廳基隆堡外木山 | 同擺接堡牛埔庄 | 桃園廳大崙崙蕃地ビヤサン溪上流 | 同三角湧蕃地五藁溪 | 臺北廳大加蚶堡林口庄 | 同 | 同芝蘭一堡士林 | 同大加蚶林口庄 | 同阿緞廳海口庄竹坑 | 臺北廳大加蚶堡林口庄 | 同文山堡大平庄枋山坑 |
| 砂岩 | 砂岩 | 砂岩 | 泥板岩 | 泥板岩 | 泥板岩 | 泥板岩 | 泥板岩 | 泥板岩 | 砂岩 | 泥板岩 | 泥板岩 | 泥板岩 | 泥板岩 |

鳥介 *Cardium* sp.
 櫻介 *Tellina* sp.
 蘆木類

水松 *Fuxodium* sp.
 セクオイア *Sequoia*
 水松? *セクオイア*
 櫟? *Quercus* sp.
 柳? *Salix* sp.
 肉桂? *Cinnamomum* sp.

又ホルランド及びニュートンの兩氏は基隆附近及び臺北附近の石灰岩中の
蘇蟲類の化石をばセレボラ *Calappa formosensis* と鑑定し、中新統に屬するもの
となせり。以上の化石より之を観るも、臺灣の第三系は中新統を代表する者
の如し。

第四系

第四系は第三系の西部に於て廣く分布し、生産的に最も重要な地
歩を占む。分ちて第四紀古層洪積層及び第四紀新層(沖積層)の二とす。

第四紀古層

第四紀古層は海拔百乃至三百米の臺地を構成し、北は桃園廳に起り新竹臺
中南投嘉義を経て、臺南廳鳳山附近の丘陵及び恒春の西方の丘陵を構成す。
岩石は粘土砂礫紅土及び珊瑚石灰岩にして、就中礫を最も多しとし、桃園廳
の臺地に於て其の厚さ百米に達するものあり。洪積層中には介殼及び珊瑚化
石を埋藏す。珊瑚石灰岩は打狗附近及び鳳山の丘陵、琉球嶼、恒春海岸に於
て最も能く發達し、就中龜仔角及び鷺鑾鼻に於ては二百米内外の斷崖を爲せ
り。紅土は熱帶地方特有の岩石にして、主として水酸化礬土より成る黃褐色
乃至紅褐色の岩石なるも、種々の岩石の分解によりて生ずる者の如し。桃園

廳附近の者は鐵分に富む石英砂粒より成り、大屯火山麓附近に於ては斜長石
角閃石輝石及び磁鐵礦の分解より生ぜり、其の分布廣きも殊に桃園地方に多
く主として茶畑に利用せらる。又土人は之を日光にて固め煉瓦に代用せり。
又其の紅土より成る丘陵を火炎山と稱するは燃ゆるが如き紅色を呈するに由
るなり。(第二十三圖甲乙)

苗栗層

苗栗附近には主として砂岩及び泥板岩より成る一種特別の地層あり。傾斜
角十度内外に達するは第四紀層の殆ど水平なると其の趣を異にし、第三紀層
の如きも、其の層向傾斜は全く第三紀層と異なり。又一般に軟弱にして、殆
ど其の層位を測定すべからず。想ふに第三紀の最上部か、或は第四紀の最下
部に屬するものにして、鐵産課の所謂苗栗層是れなり。苗栗附近の外觀音山
下、恒春街の西方丘陵、珊瑚石灰岩下、又は鼻南街の北加路蘭附近に之を見
尙ほ澎湖島の玄武岩臺の基礎を爲すものも亦之に屬す。

第四紀新層

第四紀新層は桃園廳より南方新竹臺中嘉義臺南に連なれる三角洲、臺東花
蓮港の縦谷平野、臺北及び埔里社の陷沒平野に發達し、溪流に沖積せられ湖

底に沈積せられて生じたるものなり。又宜蘭廳濁水溪口臺北廳双溪口金包里海岸新竹海岸及び臺南附近には風の爲に堆積せる砂丘發達す。

・六 火成岩

(イ) 深成岩

花崗岩 花崗岩は黒雲母花崗岩及び白雲母花崗岩にして、大南澳の溪流中に其の轉石あり、又三棧溪及び權基利溪に其の破片あるの事實よりして考ふれば、宜蘭廳下大南澳の附近より花蓮港に至るの間藩界中に露出せる者の如し。而して其の多くは變質して正片麻岩となれり。

閃綠岩 臺東廳下知本溪に露出する閃綠岩は粘板岩を貫きて迸發し、粘板岩に接觸變質を與へて滑石剝岩状或は石墨剝岩状を呈せしむ。臺北廳下石碇堡鹿窟附近同權接堡鹿藜及び冷水坑等に露出する閃綠岩は第三系を貫き、内部は純然たる閃綠岩なるも、砂岩に接觸する邊縁は玄武岩に移化する輝石閃綠岩なり。其の他紅頭嶼に於ては富士岩と共に、八罩島に於ては玄武岩と共に

花崗岩

閃綠岩

に噴出せり。

斑糲岩 飛白岩 斑糲岩は殆ど凡ての地質年代に迸發せし者の如く、又現出の狀態は或は岩脈を爲し、或は併盤を爲す。

品質剝岩系を貫く斑糲岩は集璞橫斷線路のマシサン社附近に、粘板岩系を貫くものは叭樹橫斷線路に於けるパロン砲臺下に幅百間、ララー監督所下に幅約二百間、ララー監督所とタカサン監督所との間に幅約五十間、集璞橫斷線路上中央分水嶺に於て幅約二百間のもの露出す。

第三紀層中に併盤を爲すものは桃園廳角板山蕃地大崙炭溪の支流合膾溪の合流點附近、臺北廳下新店溪の支流平廣坑溪の上流等に露出するものにして、岩床を爲せるものは大崙炭溪の支流合膾溪の合流點より約一町の上流に露出するものにして、其の厚さ約二十尺、砂岩は變質して白雲母を多く含む珪岩様のものとなれり。又岩脈を爲して第三紀層を貫通するものは合膾頭監督所に至る間に三條あり、又臺東海岸山脈には斑糲岩點々露出して南北に連亘し概ね蛇紋岩を伴ひ、恒春半島に於ては大板糖に露出し、砂岩及び泥板岩を貫

斑糲岩

蛇紋岩

通す。

蛇紋岩は常に斑礫岩と伴ふて出で、又其の分解によりて生じたるものなり。多く第三系を破りて迸發せり。蛇紋岩の最も廣き分布は臺東海岸山脈の雷公火附近にして北東より西南に互り長さ約三里に達す。其の他卑南街の附近に於ては點々飛石の如く露出して連嶺を構成し、利基利基に於けるものは明に岩脈を爲して第三紀層を貫けり。尙は大料炭溪の上流合脂溪合流附近斑礫岩の露出より西北方に當り、又其上流約十四五町の處の右岸に岩脈をなして露出せり。深綠色にして脂肪光澤を放つ。

輝綠岩

輝綠岩は花蓮港海岸に其の流礫あり、水邊脚附近に其の轉石を見るも未だ其の露出を詳にせず。

流紋岩

流紋岩は本島に於ける流紋岩は其地域極めて狭少にして、唯澎湖廳下八罩群島中花嶼に岩脈となりて出るものあるに過ぎず。

(口) 火山岩

富士岩

富士岩は其の岩質上よりすれば輝石富士岩角閃富士岩閃輝富士岩等の種類あり、噴出の年代よりすれば第三紀に噴出せるものと、第三紀後に噴出せしものととの區別あり。現出の状態よりすれば熔岩流を爲せるものと、岩床又は岩脈を爲せるものととの區別あり。

臺東海岸山脈に於て熔岩及び集塊岩を爲して露出するものは第三紀の時代に、現今山脈の方向に幾多の噴火口を生じ、之よりして多量の熔岩を噴出せしものに係るなり。

第三紀後に噴出せしものは大屯山竹仔山礮嘴山七星山及び紗帽山を包含する所謂大屯火山彙、及び觀音山を構成するもの、基隆山金瓜石山牡丹坑山草山及び鷓母嶺より成る所謂三金山火山岩塊及び尖山並に火山島嶼なりとす。

大屯山の北半并に西南部を構成し、尙ほ東北海岸の丁火巧山及び八斗仔山并に浦仔山に露はれ、更に觀音山の一角崩山附近に出づるものは、灰白色の石基中に長さ四五耗に達する角閃石の斑品を撒點する角閃富士岩に屬し、之を鏡下に檢すれば石基は斜長石角閃石磁鐵礦及び褐色の玻璃より成り、斑品

角閃富士岩

輝石富士岩

としては短冊状にして累帯構造を有し、角閃石及び玻璃を包裹する斜長石
綠色にして磁鐵鑛を包裹物として有する角閃石并に磁鐵鑛あり。又丁火巧山
の者は更に紫蘇輝石及び普通輝石を有す。

七星山を構成し、南走して士林の東北石角庄に達するものは、輝石富士岩
に屬し、外觀灰白色を呈し、組織は多少粗鬆にして、角閃石の三四耗の斑品
撒點す。之を顯微鏡下に檢するに斑品としては斜長石角閃石紫蘇輝石普通輝
石及び磁鐵鑛あり。石基は斜長石角閃石輝石磁鐵鑛及び玻璃より成る。出口理
學士に據れば角閃石は多色性著しき曹達を含むパーケヰカイドに屬し、邊緣
は黒色の磁鐵鑛に化し、甚だしきは單に殘骸を遺すに過ぎざるものありと云
ふ。

磺嘴山を構成し、東走して員潭仔溪に達するものは黝黒色の石基に長石の
斑品を散點する閃輝富士岩に屬し、顯微鏡下に照らせば、石基は毛氈質にし
て、斜長石磁鐵鑛及び玻璃より成り、稀に角閃石を含み、斑品としては斜長
石單斜及び斜方の兩輝石角閃石及び磁鐵鑛あり、但し角閃石はパーケヰカ

輝石富士岩

トに屬す。

磺嘴山の西南側に横たはる大尖後山を構成するものは灰白色の石基に有色
鑛物の斑品を散點する輝石富士岩にして、石基は針狀の斜長石磁鐵鑛及び輝
石粒并に褐色玻璃より成り、斑品としては斜長石及び普通輝石并に多少の紫
蘇輝石及び磁鐵鑛あり。

竹仔山小觀音山而天山大屯山の南側及び菜公坑山を構成する者は、複輝石
富士岩に屬し、其の分布富士岩中最も廣大なるものなり。石理は概ね緻密に
して淡褐色乃至灰白色を呈し、菜公坑山のものには扁桃構造を有し、直徑三四
耗の孔隙に往々玉滴石を含む。斑品としては斜長石單斜斜方兩輝石及び磁鐵
鑛あり。芝蘭三堡土地公埔及び白石脚附近のものは少量の褐色角閃石を含む。
單斜輝石には時としては玄武岩に於けるが如くチタンを含み紫色を帯ぶるも
のあり、其の紫蘇輝石との割合は概ね相等し。石基は斜長石の針狀結晶、兩
輝石及び磁鐵鑛粒并に玻璃より成る。

紗帽山の全體及び觀音山の殆んど全體を構成するものは暗黝色の石基に輝

紫蘇輝石富士岩

石の斑品を散點する紫蘇輝石富士岩にして、之を顯微鏡下に照らせば、石基は斜長石兩輝石磁鐵礦及び黄色玻璃より成り、斑品には斜長石紫蘇輝石少量の普通輝石及び磁鐵礦ありて、紫蘇輝石は多色性強く帶綠色より帶褐紫色に變し、磁鐵礦を含む。觀音山成仔寮附近の墓地には比較的少量の磁鐵礦を含む結果、磁石に感ずるものあり。之を反經石と稱す。臺北廳誌に曰く、反經石一在觀音山西雲巖上凡二石其形如馬鞍每棒羅鹹本子午置於石則反爲卯酉故名と。

橄欖富士岩

八里盆堡成仔寮庄觀音坑溪の右岸に一岩脈を爲すものは橄欖富士岩に屬し、灰白色多孔質にして、石基は斜長石輝石磁鐵礦粒橄欖石及び其の分解物イッデングサイト并に少量の玻璃より成り、斑品は橄欖石の大品の外に普通輝石及び磁鐵礦ありて、橄欖石は裂罅より分解し、赤褐色のイッデングサイトに變するもの多し。

三金山火山岩塊は輝石富士岩に屬し岩脈として迸發せしものにして、其の後の水蝕作用の爲に比較的抵抗力の弱き周圍の水成岩を削磨し去り、其の結

果或は秀麗なる圓錐形を呈し、或は巍峩たる峻峯を形成するに至りしものなりと。尙ほ牡丹坑山の者は比較的石英に富み、金瓜石の者は黒雲母多く、基隆山のものには角閃石を多く含み、草山及び鷄母嶺の者は殆ど石英を含まざるも、孰れも石英閃雲富士岩に屬すと云ふ。又尖山火山は斜長石と玻璃とより成る富士岩なりと云ふ。

火山島嶼の中基隆方面にある彭佳嶼棉火嶼及び花瓶嶼は濃黝色又は帶青色の玄武岩質富士岩より、宜蘭方面にある龜山島は紫蘇輝石富士岩より、臺東方面にある火燒島は紫蘇輝石角閃富士岩より、紅頭嶼は長石玄武岩角閃富士岩變朽富士岩斑縞岩蛇紋岩より成る。

火燒嶼を構成する富士岩は加賀の白山熔岩に酷似し、灰色の石基に長さ五ミリメートル幅二ミリメートルの角閃石の斑品を散點する紫蘇輝石角閃富士岩にして、之を顯微鏡下に檢すれば、角閃石は斑品中最大にして岩漿の浸蝕作用による黒色の邊緣を有し、暗褐色を帯び、長石の微品を包裹物として有す。紫蘇輝石は其の量も角閃石より少く、其の大きさも角閃石より小に、底面

紫蘇輝石角閃富士岩

を雙品面として透入雙品を現はす。斜長石は卓狀又は長方形にして雙品線に對して三十度の消光角を有し、曹灰長石に屬す。累帶構造著し。石基は針狀の輝石と卓狀又は長方形の中性長石と磁鐵鐵粒及び無色の玻璃とより成る。鱗石英は覆瓦狀を爲して空隙を充たす。

紅頭に露出する角閃富士岩は多孔質黝色の石基に長さ二ミリメートルの角閃石の斑品を散點する者にして、之を顯微鏡下に照すに斑品は角閃石の外斜長石及び輝石あり。輝石は劈開線鮮明、淡色にして消光角割合に小に(三十二度以下)蓋し透輝石に屬する者の如し。斜長石は長き直方形にして大小種々あり、累帶構造著しく、通常累帶に沿ふて玻璃包裹物を排列し、往々輝石及び角閃石の結品を底面及び正軸庇面に包含す。對稱消光角は三十度乃至三十四度にして曹灰長石に屬する者の如し。角閃石は單に斑品として出づるに過ぎず。褐綠色を帯び、岩漿の浸蝕作用を受けたる結果、輝石及び磁鐵鐵粒の集合より成る黒色の邊縁を有す。石基は主として直方形又は正四角形の曹灰長石、淡色の輝石粒、丸き磁鐵鐵及び燐灰石の結品并に少量の玻璃より成る。

離脱せる角
閃石

變朽富士岩は綠色にして斑狀構造を有し、斑品としては斜長石及び角閃石あり。斜長石は三十三度の對稱消光角を有し曹灰長石に屬し、角閃石は全く分解して綠簾石綠泥石及び方解石の集合物となる。石基は斜長石の針狀結品綠泥石片磁鐵鐵及び黃鐵鐵より成る。

紗帽山東麓磯溪及び基隆三金床よりは富士岩の一成分を爲せるもの、其分解によりて離脱し、表面黃灰色の土質を以て掩はるゝ小指の爪大の角閃石の結品を多く産す。

玄武岩

玄武岩 玄武岩は中央分水嶺の西側に沿うて第三系を貫き、概ね岩床又は併盤を爲し、時に岩脈を爲し南北に連互して現出す。南は阿蘇應下木柵に南北十數町に互る岩脈を爲す深黒色のものに起り、阿里山に互り、北走して新竹廳下油羅及び内灣に於て岩床及び併盤を爲し、桃園廳下咸菜堡を経て北東に走り、大料峽附近に於て出沒隠現し、角板山に於て大露出を爲し、臺北廳下擺接堡鹿寮冷水坑附近に於て錯雜を極め、水返脚の南鹿窟より耳控龜附近に於て終る。

澎湖群島の玄武岩

三回の熔岩流

澎湖群島を構成する玄武岩は岩臺を爲せるものにして、八罩群島嶼坪に於ては板狀節理、同大嶼に於ては柱狀節理著しく發達し、一般に扁桃狀構造に富み、其の孔隙は霰石(文石)によりて充たされ、裂罅には瑪瑙を挟むを常とす。澎湖群島に於ける玄武岩は第三紀中に熔岩として少くとも三回流出したる者の如く、而して其の各流出の時期は多少の年月を経過したることは其の間に、可なりに厚き凝灰質の水成岩を介在するによりて之を知るを得べし。最上熔岩流は現在の表面を構成するものにして緻質の墟母を以て被覆せられ、柱狀節理發達するを以て其の特性とす。第二熔岩流は楓櫃美及び峙裡間に露出し、厚さ十米に達す。熔岩流の上部は多孔質帯白色にして多く分解し、下部は新鮮にして緻密なり、海岸に怒濤の洗ふ所となりて露出するもの是れなり。第三熔岩流は最下部を占め、隨て此の群島中に於ては最舊の噴出に係るものにして、屢、海岸の底部を構成す。熔岩流の上部は同様に多孔質にして往々準塊岩を爲す。峙裡附近に於て能く其の露出を見るを得べし。

小藤博士の研究に據れば最新の熔岩流はイッディング石に化したる橄欖石と紫

第一の熔岩流

第二の熔岩流

褐色のチタン輝石を含むを以て特性とし、第二の熔岩流を爲せるものは褐色の輝石を有し、橄欖石は屢之を缺き、紫蘇輝石によりて置き換へらるるを以て特性とし、第三は方沸石を含むを以て特性とす。

第一の熔岩流には二種あり、甲は灰黒色緻密にして橄欖石の斑品を有し、顯微鏡下に檢すれば完品質にして短冊形の斜長石紫褐色の輝石の微品、磁鐵礦及び橄欖石粒より成る石基中に、岩漿の浸蝕作用を受け、并に又多少分解したる橄欖石の斑品あるものなり。乙は同じく灰黒色にしてアナメサイトの觀を呈し、多少イッディングサイト化する橄欖石の巨品を含むことと、多くの輝石粒を有するを其の特性とす。橄欖石は唯一の斑品にして種々の大きさを有し、不規則に分布し、形狀種々に變化し、常にイッディングサイト化せざるものなし。石基中には瓶綠色又は泥褐色を呈し、脱矽作用を受けたる玻璃を短冊形の斜長石の間に含む。

第二熔岩流を爲せる者にも亦二種あり、一は灰黒色にして褐色の斜長石の斑品を有し、鏡下に檢すれば斑狀、半品質にして輝綠岩的構造を現はし、短

最下部の熔
岩流

冊形の斜長石は淡褐色の輝石の結晶中に埋没す。斜長石には二種あり、一は大形にして地下成生物に屬し、褐色酸化鐵を其の裂罅中に浸染し、肉眼にて褐色の斑品となりて現はるゝものは是なり。他の一は小形にして短冊形を呈し、全く輝石に包含せらる。岩石は屢、多孔質にして縞狀にして紫色の玉髓其の空間を充す。第二式に屬する岩種は橄欖石を缺き紫蘇輝石を含む玄武岩にして、灣貝澎湖島西溪、金嶼及び八罩島に露出す。黝色細粒にして輝石に富み、顕微鏡下の構造富士岩に似たり。石基は短冊形の斜長石、輝石粒及び磁鐵礦より成り斑品には板狀にして雙晶線少く、多少並行せる多くの割目を有する斜長石、邊緣に輝石の粒を有する紫蘇輝石及び時としては普通輝石あり。熔岩流の最下部を占むる玄武岩は濃黝色細粒にして顕微鏡下に之を検すれば半結晶質にして多少斑狀構造を呈し、不規則の形狀を呈せる橄欖石或は、判然たる結晶形を呈する輝石の集合を其の斑品とし、石理は一般に粗鬆なり。然れども斑品礦物の大きは一般に石基を構成するものと大差なく、造岩礦物排列の状態は粒狀に近づく。斜長石は其の量輝石より多し。輝石は時として

紅頭嶼の玄
武岩

は紫褐色にして漏斗構造を呈す。石基は短冊形の斜長石、紫褐色の輝石の結晶、磁鐵礦粒及び他形の橄欖石より成り、方沸石及び玻璃其の間隙を充たす。方沸石は此の熔岩の特有成分にして、一般に新鮮無色、且つ單屈折性なるも屢、光學異常を現はす。時として褐色にして纖維狀の曹達沸石に化す。其の他副成分として燐灰石あり。要するに斯る鹽基性の岩石中に方沸石及び無色の玻璃を發見するは異例に屬す。紅頭嶼の長石玄武岩は、寧ろ多孔質にして黝褐色の石基に褐色の橄欖石及び黑色の普通輝石の斑品を撒點す。鏡下に檢するに橄欖石は六角又は略四角形を呈することあるも、多くは岩漿浸蝕の結果不規則の形狀を呈し、底面劈開の痕跡を有することあり。周辺部は多少分解するも、内部は新鮮なり。顕微化學試験に據れば單に苦土の痕跡あるに過ぎざるを以て磁橄欖石に屬するを知るべきなり。多量の褐色透明のクロム尖晶石、磁鐵礦の結晶及び粒を含む。斜長石は直方形にして瓦斯を含む空品あり、對稱消光角三十二度にして曹灰長石に屬す。斑品として其の量少し。輝石は寧ろ自形を呈するも、周辺

は多少岩漿の浸蝕作用を受く。聚片雙晶を爲し、黄綠色を呈し、空胞を有する玻璃包裹物あるを常とす。石基は岩石の大部を構成するものにして、微斑品たる橄欖石及び輝石は其の性斑品を爲せるものと異なることなく、短冊形の斜長石と磁鐵鏝粒との集合物の間に埋没す。短冊形の斜長石は多くは空虛にして其空處は一部又は全體玻璃を以て充たさる。斯かる斜長石の骸晶は寧ろ異例に屬す。

七 温泉

本島は由來温泉に富み、有名なる北部の北投温泉より南部恒春地方に至るまで、隨所に湧出し、從來已に知られたるもの五十餘箇所に達すれども、今後蕃界の開發と共に猶發見する事多かるべし。温泉の種類は硫黄泉鹽類泉鐵泉珪質石灰泉炭酸泉鹽泉及び單純泉の七種にして、就中硫黄泉及び單純泉最も多し。硫黄泉は火山地方、殊に大屯火山地方に湧出するものに多く、他の温泉は主として水成岩中に存在す、炭酸泉は往々多量の鹽分を含有するもあり

温泉

阿緞廳下四重溪温泉の如きは其の適例なり。
著名なる温泉を表示すれば左の如し。

| 種類 | 所在地 | 湧出時間 | 温度(攝氏) | 清濁泉色 | 臭氣 | 味 | 反應 | 性 | 湧出地盤 |
|-----|-------------|---------|--------|------|-----|---|----|---|------|
| 硫黄泉 | ※北投温泉社 | 百六十五石四 | 十三度 | 透明無 | 硫臭無 | 酸 | | 同 | 富士岩 |
| | ※北投庄併行 | 百三十五石同 | | 同 | 酸味同 | | | 同 | |
| | ※同 瀧ノ湯源 | 四百九十五石同 | | 同 | 同 | | | 同 | |
| | 同 大 礮 碎 礮 | 多同 | | 同 | 同 | | | 同 | |
| | 同 草 山 坑 庄 | 同 | 温 | 同 | 同 | | | 同 | |
| | 同 冷 水 坑 庄 | 同 | | 同 | 同 | | | 同 | |
| | 同 礮 溪 内 多 | 同 | | 濁濁濁 | 無 | | | 同 | |
| | ※同 炭脚ノ一 | 同 | 九 | 同 | 酸味同 | | | 同 | |
| | ※同 炭脚ノ二 | 百八十五石 | 十五度 | 同 | 同 | | | 同 | |
| | 同 金 包 里 坪 壘 | 多 | 十四度 | 透明無 | 同 | | | 同 | |
| | 同 煖 仔 坪 壘 | 多 | 十七度 | 同 | 同 | | | 同 | |
| | 同 三 項 中 橋 庄 | 高 | 熱同 | 同 | 同 | | | 同 | |

以上の諸温泉は最も著名なる者にして、就中*印を附せるものは浴場の設備あり。又草山庄は桃の名所にして、近傍に竹仔温泉ありて官設民營の旅舎あり、共に士林まで鐵道の便あり。又宜蘭バリンヤの奥、濁水溪の奥にタポー溪温泉あり、炭酸泉にして湧出量多し。又臺東廳八通關北西の麓にも温泉あり、埔里社東北の山中、濁水溪の上流にある温泉の如きは、河岸に湧出し、天然の岩石を掘りて浴槽を設け土人の入浴する者あり。其他臺北廳石碇堡水返脚過港庄同廳蕃地ラガー社宜蘭廳龜山島同廳清水溪上流蕃地同廳蕃地大南灣新竹廳蕃地盡尼社南投廳蕃地霧社東萬社同チヨンボラン社同丹大社同濁水溪支流郡大溪上流域門龍同郡大溪上流舟友毛社同郡鞍社阿緱廳蕃地笨濃社埔來溪上流三ヶ所同蚊仔只同後堀仔溪上溪竹頭崎より一里半同牡丹灣海岸同知本臺東廳蚵仔寮溪新武路溪上溪下谷内社花蓮港チャカン溪洞門等に温泉の湧出あれ共、性質等未だ不明なり。

北投温泉

北投温泉 北投温泉地は臺北を距る僅かに二里餘、汽車の便あり、且つ此地は所謂大屯火山麓地方にして、中央の温泉の流れを挟み、三面山に圍まれ、

一面は廣漠たる平野を擁する丘陵地にして、頗る風景に富み、加之泉量多く温泉の種類に富むを以て、近來大に發達し、衛戍病院も設置せられ、浴客年六千人を超過すと云ふ。

北投地方に於ては、湧出地盤は主として火山岩なれども第三系又は第四系なることあり、屢硫氣坑より湧出す。温泉には硫黄泉鹽類泉單純泉の三種あり、就中硫黄泉最も多く、單純泉最も少し。瀧の湯は北投停車場を距る十二町にある瀧の湯浴場より、北投溪を溯る事五町にある舊爆裂火口なる一小窪地より發源し、熱泉と共に硫汽を噴騰す。湧出量は一時間三百三十石なり、然れども途中に於て、一時百六十五石の湧出量ある偕行社温泉を混合するを以て、瀧の湯温泉に於ては一時間四百九十五石となる。本温泉は無色透明にして、少量の沈澱あり、味は收斂性にして、酸味強し。泉源に於ては硫黄泉なるも、僅五丁を距る浴場に於ては鹽類泉となるは誠に奇妙なる現象といふべし。明治四十四年東京衛生試驗所の分析の結果は泉源に於て次の如し。

瀧の湯温泉泉源

イオン表 (本礦水一千瓦中に含有す)

| | | |
|--|--------|---------|
| カチオン | | |
| 水素イオン(H ⁺) | 0.0554 | 65.0901 |
| カリウムイオン(K ⁺) | 0.0456 | 10.5499 |
| ナトリウムイオン(Na ⁺) | 1.326 | 48.556 |
| アンモニウムイオン(NH ₄ ⁺) | 0.1067 | 11.5498 |
| カルチウムイオン(Ca ⁺⁺) | 0.1355 | 31.575 |
| マグネシウムイオン(Mg ⁺⁺) | 0.0166 | 1.1031 |
| フェルロイオン(Fe ⁺⁺) | 0.1371 | 2.458 |
| アルミニウムイオン(Al ⁺⁺⁺) | 0.1580 | 5.763 |
| アニオン | | |
| | | 1.9999 |

| | | | |
|---|---------|---------|---------|
| クロールイオン(Cl ⁻) | 3.555 | 106.228 | 106.228 |
| 硫酸イオン(SO ₄ ⁼⁼) | 2.164 | 30.814 | 30.814 |
| ヒドロ磷酸イオン(HPO ₄ ⁼⁼) | 0.00101 | 0.0101 | 0.0111 |
| 硼酸(メタ)(HBO ₃) | 8.9506 | 285.297 | 1.9999 |
| 珪酸(メタ)(H ₂ SiO ₃) | 0.1705 | | |
| | 9.1211 | | |

其他バリウムイオン、鉛イオン及フェルロイオン各痕跡

鹽類表

| | |
|---|--------|
| クロールカリウム(KCl) | 0.5337 |
| クロールナトリウム(NaCl) | 1.1031 |
| クロールアンモニウム(NH ₄ Cl) | 0.1131 |
| 硫酸ナトリウム(Na ₂ SO ₄) | 2.164 |
| 硫酸カルチウム(CaSO ₄) | 0.1355 |

| | |
|---|---------------|
| 硫酸マグネシウム(MgSO ₄) | 0.1376 |
| 硫酸亞酸化鐵(FeSO ₄) | 0.04455 |
| 硫酸アルミニウム[Al ₂ (SO ₄) ₃] | 0.9870 |
| 磷酸アルミニウム[Al ₂ (HPO ₄) ₃] | 0.00111 |
| 遊離鹽酸(HCl) | 1.0355 |
| 硼酸(メタ)(HBO ₃) | 0.0765 |
| 珪酸(メタ)(H ₂ SiO ₃) | 0.1720 |
| | <u>2.1041</u> |

偕行社温泉は瀧の湯泉源の北方断崖上にありて、砂岩の裂罅中より上下の二箇所に於て湧出す、上方のものは攝氏四十三度、下方のものは其東方約五六間の處より湧出し、攝氏五十一度あり、其一部を引きて浴場を設く。湧出量は一時間百六十五石なり。本泉は無色清澄にして少許の沈澱あり、微に收斂味を具へ、弱酸性反應を呈す。明治四十四年東京衛生試験所の分析によれば次の如し。

偕行社温泉

成分

固形物總量 約〇三〇グラム(二千グラム中)

イオン表

| | | |
|--|---------|----------------|
| カチオン | | |
| カリウムイオン(K ⁺) | 0.00354 | 0.02068 |
| ナトリウムイオン(Na ⁺) | 0.01034 | 0.04859 |
| アンモニウムイオン(NH ₄ ⁺) | 0.01572 | 0.08681 |
| カルチウムイオン(Ca ⁺⁺) | 0.00779 | 0.04975 |
| マグネシウムイオン(Mg ⁺⁺) | 0.00303 | 0.01531 |
| アルミニウムイオン(Al ⁺⁺⁺) | 0.01456 | 0.05801 |
| アニオン | | |
| クロールイオン(Cl ⁻) | 0.00969 | 0.02193 |
| | | 0.02713 |
| | | <u>0.02713</u> |

| | | | |
|--|--------|--------|--------|
| 硫酸イオン(SO ₄) | 0.1602 | 1.2402 | 3.3518 |
| 珪酸メタ(H ₂ SiO ₃) | 0.1341 | 4.1843 | 3.6339 |

其他フェルロイオン、ニッケルイオン及び硼酸の各痕跡
 鹽類表(本礦水は其集成に於て一ケラム中次
 の成分を含有する溶液に概略相當す)

| | | | |
|--|--------|--|--|
| クロールアンモニウム(NH ₄ Cl) | 0.0185 | | |
| 硫酸アンモニウム((NH ₄) ₂ SO ₄) | 0.0191 | | |
| 硫酸カリウム(K ₂ SO ₄) | 0.0040 | | |
| 硫酸ナトリウム(Na ₂ SO ₄) | 0.0118 | | |
| 硫酸カルチウム(CaSO ₄) | 0.0110 | | |
| 硫酸マグネシウム(MgSO ₄) | 0.0153 | | |
| 硫酸アルミニウム(Al ₂ (SO ₄) ₃) | 0.0210 | | |
| 珪酸メタ(H ₂ SiO ₃) | 0.0521 | | |

0.2924

金包里街温泉

金包里街温泉 臺北廳金包里街の北隅にあり、金包里温泉と稱す。元該地の郵便電信支局長某此處に居を構へ、浴場を設けて後之を旅館に改めたるものなり。溫度三十七度なれば少しく低温に過ぐ、湧出量一時間十五石なり。性質は單純泉にして、無色透明、臭味なく、反應は弱亞爾加里性なり、一リトル中固形物の總量は〇.二四一〇瓦にして比重は一〇〇〇なり、成分は左の如し。

| | |
|------------|--------|
| クロールナトリウム | 0.0317 |
| 硫酸カリウム | 0.0061 |
| 硫酸カルチウム | 0.0153 |
| クロールマグネシウム | 0.0043 |
| 硫酸礬土 | 0.0216 |
| 珪酸 | 0.0521 |
| 亞酸化鐵 | 0.0115 |

酸化鐵 0.0113

硫化水素 痕跡

硝酸 痕跡

磷酸 痕跡

硼酸 痕跡

冷泉 冷泉には硫質泉・鐵泉・炭酸泉及鹽泉の四種あり。硫質泉には臺中廳軍

功寮同火坑・嘉義廳公田庄無水腫・同後仔坑・同汙仔坑・同汙水溪上硫中崙同凍仔脚臺南廳龜

丹溪同紅毛藜土名與汚仔坑阿緜廳木柵庄草內湖同打狗海岸あり。鐵泉には宜

蘭廳龜山島同蘇湧あり、炭酸泉には八角林あり、鹽泉には阿緜廳月眉潭庄月

光山下同滾水坪臺東廳雷公火花運港廳大巴壠沙箸溪あり、就中蘇湧最も著名

なり。

蘇湧鐵泉 本鐵泉は宜蘭廳利澤簡堡蘇湧庄にあり、鐵泉にして、無色清

澄、異臭なく飲用に供す、味爽にして、酸性反應を呈し、湧出量極めて多し、

東京衛生試験所の分析によれば左の如し。

成分

固形物總量 約〇・一四グラム(一リットル中)

イオン表

カチオン

カリウムイオン(K⁺) 0.0008 0.0155 0.0155

ナトリウムイオン(Na⁺) 0.0111 0.0111 0.0111

カルチウムイオン(Ca⁺) 0.0148 0.0141 0.0141

マグネシウムイオン(Mg⁺⁺) 0.0048 0.0140 0.0140

アルミニウムイオン(Al⁺⁺⁺) 0.0011 0.0014 0.0014

アニオン

クロールイオン(Cl⁻) 0.0111 0.0111 0.0111

ヒドロ炭酸イオン(HCO₃⁻) 0.1141 0.1037 0.1037

0.1796 0.1709 0.1709

珪酸(ケイ)酸(H_2SiO_3)

0.03%

0.3%

遊離炭酸(CO_2)

1.5%

1.7%

3.5%

其他フュルロイオン及ヒドロ燐酸イオンの各痕跡

第四章 氣象

氣象の概説

臺灣島は、北緯二十一度五十三分より、同二十五度十八分に亙り、我が國の極南部に位せる一大島にして、北緯二十三度半の夏至線は、恰も其の中央部嘉義附近を横断して、氣候溫熱兩帶の性を具へ、概して炎暑饒雨、各種の熱帶植物は、終歲婆娑として到る處に繁茂し、冬期にも櫻桃の華くを眺め得べく、全島殆んど草木の凋落を見ず、又朔風飛雪の寒をも知らず、一般の風物大に内地と趣を異にせり。然れども、本島は其の形南北に長く且つ一方大

局部の差違

夏・冬期の特

陸に面し、或は黒湖の暖流に接近して、氣候上是れ等の影響を受くること尠からず、加之地勢上に見るも、北端には大屯火山釜へ、臺灣山脈は東偏して南北に縦貫し、島の西部には廣濶なる平原展開し、東部は絶崖海に沈めり。斯く本島は面積の大ならざるに比し、又海岸線の單調なるに比し、地勢必ずしも單調ならざるが故に、其の風土氣候も、亦多岐に渉れること言を俟たざるなり。茲に其の著るしき差違に就いて略述せん、北部地方は氣候多少大陸の感化を享けて、寒暑の懸隔大なるも、南部殊に半島地方は、大に海洋的氣候に傾きて、温度の高下至つて少きを見、又北部殊に極北部は、冬期北東風の濕氣を享けて多雨なるも、南部は殆んど其の影響を蒙むらずして、夏期南西風の驟雨に浴するを見、又西部平原地方及び東部一帯の地方とは、温度の點に於いては、共に比較的中庸を得るも、西部地方の降水寡少なるは、東部地方の比に非ざるを見る。然り而して一般に本邦内地と稍趣の異なるは、氣候上夏冬の區別は素より存するも、熱帶地方の常として春秋の季節は、判然之れを覺知し難きにあると之なりとす。今全島を通じて、夏期と冬期とに

就き、各氣候上の特徴を擧ぐれば、夏期は暑氣長きに渉るも、温度は緯度に比して寧ろ低度を示し、且つ各地間に大差なく、南部多雨にして北部寡雨、又屢低氣壓の襲來あるも、其の際を除きては、風力概して微弱なり。而して冬期は期間短くして、温度各地間に懸隔あるも、寒氣は決して凜烈と稱するに足らず。一般に北東風強くして、北部殊に陰鬱なるを常とす。

本島氣象の梗概夫れ斯くの如し。唯夏期に際し暑氣長きに渉るは、熱帶地方に免れ難き所なりと雖、其の温度比較的高からざるを見ても、決して内地人の想像するが如き酷熱を感ぜざるを知るべく、各自攝生に注意するときは永住するに難からざるなり。殊に本島の高溫多雨なるは、一方經濟上より觀れば、最も價值ある所以にして、米の如きは年内二回、甘蔗の如きは三回の收穫あり。其の他製茶製腦林業裁果等の産業に適し、實に帝國極南の一大寶庫をなせるもの、氣候風土之れが主因たらずんばあらず。若し夫れ之れが詳細に至つては、次に項を逐ふて説述を試みんとす。

氣溫 本島の累年平均氣溫は、極北基隆臺北の二十一度六より、極南恒春

本島氣象上の
價值

氣溫

の二十四度四までの間にありて、島内何れの地と何れの年とを問はず、年平均均決して二十度以下を算せしことなく、四國九州地方の年平均よりも、約六度乃至十度高くして、二十三度の年同溫線は、恰も北緯二十三度線と多少の角度を保ちて、本島の中央部を南西より北東に斜斷し、以て南西部よりも北東部の稍高溫なるを示せり。月平均の年内にて最も低きは、本島内地に於けると同様二月なるも、冬期の氣溫は著るしく高度を保ち、臺北の十五度二、基隆の十五度九より、恒春の二十度六までの間に居れり。本島舊記に曰く「鐘鼎の家狐貉之を用ふる所無し、細民無衣無褐亦歳を卒ゆ可し云々」と、實に冬期の溫暖を評し得て妙なるを見る。又年内にて月平均の最も高き時期は、内地よりも稍早くして、七月及び八月の兩月に亘り、各地何れも二十七度以上を測り、七月下旬夏至に及べば、太陽恰も本島の中央を直射するを以て、暑氣強きは固より其の所なりと雖、夏期の温度は、緯度に比例して寧ろ低位を示し、殊に南部は風力強きと驟雨多きとに據りて、大に炎威を和らぐを常とす。唯暑期長きは、低緯度地方の免れざる所なるべし。而して暑期に於いて

氣温の年内に於ける變化

は、島内各地間の温度に甚だしき差異を認めず、同温線互に相疎隔せるも、之れに反して寒期に於いては、各地間の温度に甚だしき懸隔を生じ、北に赴くに随ひて漸く低温となり、一月二月に際しては、極南極北其の間温差五六度の多きに至り、同温線亦互に相密接す。

年内に於ける氣温の變化は、二月の最低より三月四月を経て五月に至るの間は二度三度餘づゝ上昇し、之れより緩昇し九月に至る五個月間は、二十六七度の高度を保ち、爾後漸く下降を始め、十月より其下降の度又著るしく翌年二月に及ぶを常とせり。更に各月上中下旬の三旬期に於ける平均氣温を見るに、其の二十五度以上となるは、北部は五月中旬乃至下旬の頃にして、南部は四月中旬乃至五月上旬の頃より始まる。又二十五度以下となるは、北部は九月中旬乃至下旬の頃にして、南部は十月中旬頃より始まる。要するに本島に於いては、平均二十五度以上にある期間は、五月より九月に至る五個月間に互り、彼の内地に於けるが如く、僅に二個月間なるに比すれば、其の間に尠なからざる差あるを認むべし。即ち臺北に於ける初夏五月の平均温は、

寒期の懸隔

東京の酷暑時期たる七八月頃の夫れに等しく、引續き九月に至るが故に、春期と秋期とは、殆んど判然之れを覺知し難しとす。然れども南隣フィリピン諸島の終歲高温なるに比すれば、氣候の優劣固より同日の談にあらざるなり。

以上は主として暑期のことなるも、更に寒期に於ける旬期平均氣温に就いて見るに、其の十五度以下となるは、臺中以北の地方に於いて、唯二月にのみ之れを認むるに過ぎず。即ち本島の最寒期たる二月は、恰も南日本地方に於ける陽春四月頃に勞瘁たるを見、嚴寒と稱するに足らず、平地に於いて氣温氷點以下に降りたるは領臺以後明治三十四年二月十三日臺北臺中にて唯一日これありしのみ。

年内寒暑の懸隔は、本邦中最も緩和にして、七月と二月との平均氣温の較差は、北部に十三度内外、中部に十二度内外、南部に十一度内外を算するに過ぎず。極南恒春地方の如きは、此の較差僅に七度五にして、夏期の氣温は臺南及び澎湖島等よりも却つて低く、終歲温和なること恰も春に似て、洵に恒春の名に背かざるを見る。南部地方海洋的氣候に負ふ所尠からざるを知る

地中温度

べし。但し島内を通じて、一日中温度變化の振幅即ち晝夜寒暖の差違は一般に大なるを免れざること、低緯度地方の常とも謂ふべく、殊に夏期に於いて其の然るを見、日中苦熱を呼ぶも、夜に入りて急に冷氣を催うすことあり。冬期は此の變化稍緩和なるも、日毎の變化稍急劇なること、殊に北部に著しく、昨日の輕衫は今日厚衣に更ふるの已むを得ざることあり。されば夏期と冬期とを問はず、若し衛生を忽せにするときは、往々懼るべき疫癘に胃さるることあるべし。

尙氣温に附隨して地中温度を記さんに、本地方に於いて地中温度の變化一度の十分の一以上に達せざる所、即ち不易層に達する深さは、平均臺中臺南の十二米より、恒春の十米までの間を推算し得べく、内地に比すれば素とより淺しとす。

本地方各月の平均氣温は、須らく次表に據りて知得すべし。(明治三十年以後臺東花蓮港は其後の觀測により大正三年の調査に係る)

平均氣温表 (攝氏)

| 地名 | 月次 | | | | | | | | | | | |
|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 |
| 恒春 | 二〇.六 | 二〇.一 | 二〇.三 | 二四.七 | 二六.四 | 二七.二 | 二七.五 | 二七.一 | 二六.七 | 二五.三 | 二三.三 | 二二.四 |
| 臺東 | 一九.二 | 一八.六 | 二〇.八 | 二三.四 | 二五.一 | 二六.八 | 二七.四 | 二七.一 | 二六.三 | 二四.三 | 二二.〇 | 一九.九 |
| 花蓮港 | 一七.三 | 一七.七 | 一九.一 | 二二.一 | 二三.九 | 二六.四 | 二七.〇 | 二六.六 | 二五.八 | 二三.六 | 二〇.八 | 一八.九 |
| 臺南 | 一七.二 | 一七.五 | 一九.七 | 二二.四 | 二六.〇 | 二七.二 | 二七.七 | 二七.四 | 二七.一 | 二四.八 | 二二.四 | 一八.三 |
| 澎湖島 | 一六.四 | 一五.三 | 一八.二 | 二二.九 | 二四.八 | 二六.八 | 二七.八 | 二七.七 | 二六.九 | 二四.五 | 二二.三 | 一八.一 |
| 臺中 | 一六.〇 | 一五.二 | 一八.二 | 二二.九 | 二五.〇 | 二六.七 | 二七.五 | 二七.二 | 二六.三 | 二四.七 | 二二.〇 | 一七.二 |
| 臺北 | 一五.五 | 一四.四 | 一六.九 | 二〇.六 | 二三.〇 | 二六.六 | 二八.〇 | 二七.七 | 二六.三 | 二三.〇 | 一九.六 | 一六.七 |
| 基隆 | 一六.一 | 一四.九 | 一六.六 | 二〇.〇 | 二三.三 | 二六.二 | 二七.七 | 二七.五 | 二六.三 | 二三.三 | 一九.〇 | 一七.〇 |

次に氣温の最高最低に就いて述べんに、最高氣温の月平均三十度以上にあるは、南部(恒春)は五月乃至九月の五個月間にして、北部(基隆)は七月八月の二個月間なり。之れに反して最低氣温の月平均十五度以下にあるは、北部は十二月乃至翌年三月の四個月間に涉れども、臺東恒春等の地方は絶えて十五度

絕對最高
最低度

以下に降りしこと無し。最高最低氣温の毎月平均較差は、臺南最も大にして臺中これに次ぎ、澎湖島最も少なく、又各月に就いて見れば、北部は夏期に大に冬期に小なるも、南部は之れに反して、夏期に小に冬期に大なり。是れ畢竟北部は夏期晴天多く、冬期陰鬱引續くも、南部は之れと全く反對に、溫度輻射作用大小の期を異にするに基づくものとす。澎湖島の較差最も小なるは、全く海洋的氣候の特性たるに外ならざるなり。最高氣温の三十二度二華氏九十度以上に昇りたる年内の平均日數は臺南七二一日、臺北七六日九、臺中五九日、基隆二九日、臺東二九日一、恒春一六日五、澎湖島六日三を數へ、之れと反對に最低氣温の十度華氏五十度以下に降りたる平均日數は、臺中二日六、臺北一六日三、臺南一日三、基隆七日七、澎湖島一日八、臺東〇日三を數へ、恒春には〇日一のみ。後者の北するに隨ひて多きは、固より其の所なりと雖、前者酷暑日數の緯度高まるに隨ひて多きは、實に意外とも謂ふべく、亦以て南部地方風土の適順なるを證すべし。

本島にて觀測したる氣温の絕對的示度は、最高臺東に於ける三十七度九華

氏百度二(明治三十六年)、最低臺中に於ける氷點下一度(華氏三十度二(明治三十四年二月十三)を擧ぐべく、兩者の較差三十八度九の比較的少數を見る。但し五月中旬に於いて、氣温百度以上に昇るが如きは、是れ決して本島の常態にあらず、畢竟當時臺東に於いて、不時の熱風(フマーン風)起りたる爲め、偶意外の高温を示したるに外ならざるが故に、實際の最高としては、寧ろ臺中に於ける三十七度二(華氏九十九度(明治三十五年八月一日))を推すべきなり。而して最低に達するは、大抵二月にして短期なれども、最高の起るは五月乃至九月の長期に互れり。本島は低緯度に在るを以て、最低の氷點以下に降るが如きは、至つて罕なるべきこと謂ふまでもなきも、最高示度の甚だしき極數を測ることは、本州内地よりは却つて多からず、能く島嶼の特性を具へたるを見る。最高最低氣温の平均及び絕對的示度は左表に詳かなり。

最高最低氣温表(頁は氷點以下)

| 地名 | 平均最高最低 | | 最高 | 最低 | 絕對最高 | 絕對最低 | 較差 |
|-----|--------|------|------|------|------|------|------|
| | 最高 | 最低 | | | | | |
| 恒春 | 30.0 | 17.3 | 33.0 | 13.0 | 35.0 | 9.8 | 25.2 |
| 臺南 | 30.0 | 17.3 | 33.0 | 13.0 | 35.0 | 9.8 | 25.2 |
| 臺中 | 30.0 | 17.3 | 33.0 | 13.0 | 35.0 | 9.8 | 25.2 |
| 基隆 | 30.0 | 17.3 | 33.0 | 13.0 | 35.0 | 9.8 | 25.2 |
| 澎湖島 | 30.0 | 17.3 | 33.0 | 13.0 | 35.0 | 9.8 | 25.2 |
| 臺東 | 30.0 | 17.3 | 33.0 | 13.0 | 35.0 | 9.8 | 25.2 |

温度の偏差

尙温度の偏差に就て記さんに、本島各地の気温を、彼の世界同緯度の各地に於ける公定温度(Dowe氏算定)と比較すれば、暑期に於いては、島内一般に公定温度との偏差極めて小なるも、寒期に於いては稍多く、低きこと概ね二度乃至三度なるを見る。但し臺南以南の地方は、偏差極めて小にして、恒春の如きは却つて幾分か高きが如し。而して全年より見たる平均偏差は、低きこと南部の零度五より北部の二度一までの間にあり。

気温平均偏差表

| 臺南 | 澎湖 | 臺東 | 花蓮 | 臺中 | 臺北 | 基隆 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 三三〇 | 三〇四 | 三三三 | 三〇九 | 三三〇 | 三三九 | 三二九 |
| 一一三 | 一三六 | 一五四 | 一四一 | 一二八 | 一二六 | 一一六 |
| 一九七 | 一六八 | 一五九 | 一六四 | 二二二 | 二二二 | 一八八 |
| 三六九 | 三三五 | 三七九 | 一 | 三七三 | 三七〇 | 三五九 |
| 七月廿四日 | 九月十七日 | 六月十六日 | 八月五日 | 八月十二日 | 八月十二日 | 六月十九日 |
| 三〇 | 七三 | 八三 | 一 | 五〇 | 三〇 | 三〇 |
| 二月十四日 | 二月十四日 | 二月十四日 | 二月十四日 | 二月十四日 | 二月十四日 | 二月十四日 |
| 三三九 | 二六二 | 二九七 | 一 | 三六二 | 三七二 | 三三九 |

氣壓

氣壓 氣壓は概して南方に低く、北方に低く、其の年平均は恒春に於ける七百五十九耗一より、基隆に於ける七百六十耗五までの間にありて其の傾差僅に一耗四を算し、七百五十九耗の年同歴線は、本島北部を横断して、北東より南西に互れるを見る。年内氣壓高低の配布は、略、気温の高低に反對し、最高となるは冬期十二月一月二月頃にして、その最低となるは夏期殊に八月頃なるを見、兩者の較差は北に赴くに随ひて多く、恒春は八耗八なるも、臺北にては十一耗八に達す。氣壓は一般に大陸の影響を蒙ること著るしく、冬期の如き、本島は恰も大陸内部高壓部位の周縁に當り、殊に北部一帯は氣壓

| 地名 | 緯度 | 寒期(一月) | 暑期(七月) | 年平均 |
|----|--------|----------------|---------|---------|
| 恒春 | 廿二度 | 公定温度よりも高きと ○度五 | 低きと ○度五 | 低きと ○度五 |
| 臺南 | 廿三度 | 低きと 二度三 | 低きと ○度一 | 低きと 一度五 |
| 澎湖 | 廿三度卅二分 | 低きと 二度七 | 低きと ○度二 | 低きと 一度九 |
| 臺中 | 廿四度九分 | 低きと 二度九 | 低きと ○度四 | 低きと 二度〇 |
| 臺北 | 廿五度二分 | 低きと 二度七 | 高きと ○度一 | 低きと 二度一 |

頗る高くして、同壓線急斜をなして、北東より南西に流るゝを見る。漸く夏期に移りて、大陸低壓を呈するに及べば、本島亦其の部位の周縁となり、緩傾度の同壓線南北に互り、且つ本島附近に於て、多少東方に彎出す。要するに九月乃至翌年五月は、氣壓北部に高く南部に低く、ことに十一月乃至翌年二月は傾度最も急峻に、之れに反して六月乃至八月は太平洋方面に高く、傾度緩漫なるを例とす。而して一般に同壓線の本島陸地に沿うて彎曲せるは、是れ本島内陸部の氣壓、近海に比して幾分か低位にあるが爲めなり。蓋し島嶼の常態として、海陸溫度の懸隔より生ずる所謂停滯低氣壓の淺薄なるもの、本島の中部に絶えざるに據ると云ふ。

次に氣壓の絕對示度を見るに、最高の極は基隆に於ける七百七十七耗二にして、最低の極は恒春に於ける七百〇二耗九を推し兩者の較差七十四耗三の多きに達す。而して最高は冬期殊に十二月及び一月に、最低は夏期殊に八月に起ること多し。

本島南部の沖は、實に熱帶的暴風即ち颱風の發生所とも稱すべく、年夏秋

絕對最高・低氣壓

低氣壓

進路

の頃に際し、アジア東部殊に本邦附近の海陸に猛威を逞しうする暴風雨は、フィリピン群島四近の海上に發現する低氣壓に基因するもの少なからず。本島舊記にも『颶ノ最モ甚ダシキ者ヲ颶颶ト曰フ(一句削除)必ズ大雨ト同ニ至ル木ヲ抜キ垣ヲ壞チ瓦ヲ飄シ石を裂ク久シクシテ愈々勁シ舟湧ニ泊スト雖常ニ塗粉ニ至ル云々』と、以て其の害甚だしきを知るべし。臺北測候所の調査に據れば、是等低氣壓の發現は、例年八月に最も多く、七月九月之れに次ぐ。而して其の進路の主なるものは、(一)本島よりルソン島に亘る東部の海上に發生し北西に向ふものにして、八月に最も多く、本島の如き常に多大の風水害を被むる。其の漸く大陸に入るや、多少勢力を殺ぐを例とするも、往北支那地方より更に日本海上に出つることあり。(二)支那海又は沖繩列島の南方の沖に起り本島附近より北東に屈曲し、九州方面に進行するものにして、春期と秋期とに多く、其の影響範圍比較的廣からずして、且つ長く勢力を維持せざるを常とす。(三)本島以東沖繩以南の沖合に起り、支那東海に入り、屈曲して北東に進み、若しくは北方に直進して、九州又は朝鮮方面に向ふものにして、八月

進行速度

海水の異常

に亦最も多く、七月九月之れに次ぎ、本島東部主として其の影響を享く。而して尙以上の外にも、進路を定めずして襲來するもの、素より尠からざるなり。是等低壓中心部位の本島附近に於ける進行速度は、低緯度の習として頗る緩慢にして一時間凡そ十二杆乃至二十杆とす。之れを本州島附近の平均三十杆なるに比すれば、甚だしき差違ありて、爲めに暴風吹續時間長きに涉るを免れざるなり。尙ほ南西海岸安平打狗附近は、低氣壓侵來に際し、若し満潮に當るときは、海水往、漲溢して、沿岸に災害を與ふること、恰も本州豆相沿岸に於けるが如きあり。又た低氣壓の南東沖に移動を始むるや、海水之れが先驅をなして、南東海岸の沖合より、次第に暴浪寄せ來たるを常とするこゝと、殊に臺東附近に於て著るしく、若し此の現象を見るときは、假令其の時如何に天候靜穩なるも、日ならずして暴風雨の襲來あることを覺り得べしと云ふ。

次に載する所の氣壓平均示度は、海面及び重力の更正を施せり。(海面より晴雨計水銀面までの高距は、基隆三米四、臺北九米三、澎湖島十一米、臺南

十四米三、恒春二十三米六、臺東九米九、臺中七十八米四なり。

平均氣壓表 (種)

| 地名 | 月次 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 年 |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|---------|
| 恒春 | 七六三、一 | 七六三、〇 | 七六一、四 | 七五九、六 | 七五七、六 | 七五五、七 | 七五四、九 | 七五四、三 | 七五二、三 | 七五〇、二 | 七四八、三 | 七四六、四 | 七四四、三 | 七四二、九 |
| 臺東 | 七六四、二 | 七六四、二 | 七六二、一 | 七六〇、〇 | 七五七、六 | 七五五、二 | 七五四、五 | 七五二、一 | 七五〇、六 | 七四八、二 | 七四六、〇 | 七四三、〇 | 七四〇、四 | 七三九、七 |
| 花蓮港 | 七六五、一 | 七六四、八 | 七六二、四 | 七六〇、七 | 七五七、九 | 七五五、二 | 七五四、六 | 七五二、三 | 七五〇、〇 | 七四七、六 | 七四五、三 | 七四三、三 | 七四一、五 | 七四〇、一 |
| 臺南 | 七六三、七 | 七六三、五 | 七六一、七 | 七五九、七 | 七五七、四 | 七五五、五 | 七五四、七 | 七五二、四 | 七五〇、二 | 七四七、九 | 七四五、六 | 七四三、七 | 七四一、七 | 七三九、二 |
| 澎湖島 | 七四三、三 | 七四四、一 | 七四二、二 | 七四〇、〇 | 七三七、五 | 七三五、三 | 七三四、五 | 七三二、九 | 七三〇、四 | 七二七、八 | 七二五、三 | 七二二、三 | 七一九、二 | 七一九、五 |
| 臺中 | 七六四、〇 | 七六三、九 | 七六一、〇 | 七五九、〇 | 七五七、六 | 七五五、六 | 七五四、八 | 七五二、一 | 七四九、四 | 七四六、六 | 七四三、八 | 七四一、〇 | 七三八、八 | 七三五、五 |
| 臺北 | 七六五、五 | 七六五、三 | 七六三、一 | 七六〇、六 | 七五七、八 | 七五五、二 | 七五四、四 | 七五二、〇 | 七四九、七 | 七四七、二 | 七四四、二 | 七四一、一 | 七三八、七 | 七三六、三 |
| 基隆 | 七六五、六 | 七六五、四 | 七六三、五 | 七六〇、九 | 七五八、一 | 七五五、三 | 七五四、六 | 七五二、三 | 七四九、二 | 七四六、三 | 七四三、三 | 七四〇、三 | 七三七、九 | 七三六、〇、五 |

最高基隆七七七、一(十二月)

最低恒春七〇二、九(八月)

風向と風力

風向と風力 氣壓年内の配布前述の如くなるを以て、冬期大陸よりの氣流

は、本地方に於いて東北の卓越風となり、之れに反して夏期大陸に向ふ所の氣流は、南西の卓越風となる。所謂季節風の現象は、本島に於いて最も顯著なりとす。而して其の内地と稍異なるは、冬期の風向北西に非ずして北東なるにあり。是れ位置の然らしむる所たるに外ならず。北東風の繼續期間は、十月より翌年四月の長きに及び、且つ氣壓の傾度急峻なるが故に、風力概して強烈なるを常とし、又南西風は五月より九月に涉りて吹續し、其の期間短く、且つ低氣壓發生の場合を除くの外、夏期は氣壓の配布緩慢なるを以て、暴風時期なるにも拘はらず、風力常に微弱なりとす。尙各地局部に於ける年内の最多風向は、基隆臺中臺南地方は北風、臺北地方は東風、恒春澎湖島地方は北東風なり。

風力 風力一般に沿海地方に強く、内陸に入るに随ひて弱きは、他地方と異なる所なく、其速度の年平均は、澎湖島の一秒間十米二を最強とし、恒春の六米三、臺東の五米一之れに次ぎ、臺中の二米九を最弱とす。澎湖島の風強きは、常に本地方に於て第一位に位するのみならず、本邦中之れに比倫すべき

風速度

澎湖島の強風

地なく、一年中殆んど靜穩の日を見ずして、年内の平均速度すら、既に觀測上強風なる階級にあり。殊に秋冷期の平均は、一秒間十五米内外即ち烈風の強さを以て吹續し、風伯の勢威實に驚くべきものあり。固より四面開濶なる小島嶼には常とする所なりと雖、臺灣海峡北部の一般に風力強きは、争ふべからざる事實にして、冬期の北東風は殊に強烈、波濤を高からしめ、屢航海の危険を來す。彼の本島人の所謂竹風蘭雨新竹の風、宜蘭の雨を云ふの語、亦味ふべきものあり。

臺東一帶の地方は又、フエーン風を起すこと顯著なるを以て、金澤地方と並び稱せらる。蓋し地勢に基づける局部的の現象にして、冬期大陸より來る低氣壓が九州附近に停滯したるとき、又は夏期南方の低氣壓が本島の北東海上に進行したるときに起り易く、其の風向は西偏りにして稍強く、氣溫俄に上昇するを例とす。明治三十六年五月十六日の如き、此の現象最も著るしく季節未だ盛夏ならざるに、實に百度以上の高温に達したり。然れども此の地平均氣溫既に高きと、且つ其の時間の甚だ長からざるが故に、之れが爲めに

臺灣海峡の危険

臺東のフエーン風

強風以上の日

最大速度

著るしき損害を被むることなしと云ふ。
 風力は一日中に於いて、概して午後二三時頃に強く、午前五六時頃に弱く、
 而して其の強弱の差は、冬期に大なること全島何處も同じ。
 強風即ち一秒間十米以上を測りたる年内の平均日数は、澎湖島に於ては一年の三分の二に上り、臺東恒春臺北之に次ぎ臺南臺中は甚だ少なく三四日を算ふるに過ぎず、各地の間大に差違あり。臺灣海峡は風多く又強きこと推知し得べし。最大風速度は、恒春に於ける一秒間五十六米八(明治二十九年八月二十九日)澎湖島に於ける五十六米四(明治三十一年九月三十日)を最とし臺南の五十四米五(明治四十四年八月二十七日)之れに次ぐ。

平均風速度表 (一秒間)

| 地名 | 月次 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 年 | 最強 |
|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---------|
| 臺東 | | 五.八 | 六.〇 | 五.三 | 四.五 | 四.一 | 五.七 | 五.七 | 三.八 | 四.三 | 五.四 | 六.〇 | 六.〇 | 四.九 | 南 四六.三 |
| 恒春 | | 七.五 | 七.二 | 六.五 | 五.五 | 五.一 | 四.七 | 四.七 | 四.六 | 四.七 | 六.八 | 九.〇 | 九.二 | 六.三 | 西 五六.八 |
| 澎湖島 | | 二.三 | 二.九 | 一.〇 | 八.六 | 七.〇 | 六.六 | 五.八 | 六.四 | 八.四 | 二.三 | 一.四 | 一.五 | 一.〇 | 北 四〇.八 |
| 臺中 | | 三.六 | 三.六 | 三.三 | 二.七 | 二.二 | 二.七 | 二.五 | 二.五 | 二.五 | 二.九 | 三.三 | 三.五 | 二.九 | 北 三八.〇 |
| 臺北 | | 四.九 | 四.八 | 五.二 | 四.八 | 四.三 | 三.四 | 三.三 | 四.三 | 四.五 | 五.六 | 五.九 | 五.四 | 四.七 | 東 四四.七 |
| 基隆 | | 六.一 | 六.一 | 五.三 | 四.四 | 三.九 | 三.七 | 四.一 | 四.六 | 五.二 | 五.六 | 六.四 | 六.二 | 五.一 | 北西 五〇.七 |

風向表 (最多の風向を百分率にて示す)

| 地名 | 季 | 冬 (一月) | 春 (四月) | 夏 (七月) | 秋 (十月) | 年平均 |
|-----|---|--------|--------|--------|--------|-----|
| 恒春 | 春 | 東北 | 東北 | 東 | 東北 | 北東 |
| 澎湖島 | 南 | 北 | 北 | 東南 | 北 | 北 |
| 臺南 | 南 | 東北 | 東北 | 南 | 東北 | 北東 |
| 澎湖島 | 南 | 北 | 北 | 東南 | 北 | 北 |
| 臺中 | 北 | 東北 | 東北 | 南 | 北 | 北 |
| 臺北 | 北 | 東北 | 東北 | 南 | 北 | 北 |
| 基隆 | 北 | 東北 | 東北 | 南 | 北 | 北 |

降水量

降水量 降水量は極北の一局部を除き、殆んど全島を通じて、夏期殊に六月と八月とに最も多く、冬期殊に十二月に最も寡し。獨り極北部たる基隆地方のみは、北東季節風の衝に當るが故に秋期より冬期に涉りて最も多く、夏期殊に七月に最も寡し。又各地方に就いて見れば、極北基隆より宜蘭の北部に到る小局部に最も多く、南部嘉義審察阿緱東部の山岳地方より恒春に到る一帯の地方之れに亞ぎて多く、臺東地方亦之れに次ぎ、西部彰化より鹽水港臺南に到るの沿岸地方並びに澎湖島に最も寡く、年内の平均總量は、基隆廳下暖々街の五千二百六十耗、基隆の三千四百九十三耗より、臺南の千七百耗、澎湖島の千〇十三耗までの間にありて、暖々街附近の丘腹に於ては一年の降水量七千三百八十八耗に上り降水量の如きは、本邦内地の最多量地たる八丈島の三千八百六十耗よりも、尙多きと二千二百五十耗にして、實に絶東第一の多雨地を以て稱せらる。翻つて南西部に出づれば、降水極めて寡少、平均總量千五百耗以下に過ぎざる所ありて、各地の間非常に懸隔あり。斯く

極東第一の最多雨地

北部の降水

南部の降水

西部の寡量

地方と季節とに據りて、降水量に大差あるは、蓋し地勢の然らしむる所なること謂ふまでもなし。蓋し冬期の主風たる北東風は、其の抱擁せる多量の水蒸氣を山脈の北東部に凝結瀉下するが故に、此の地方は降水夥しく、本島人の所謂蘭雨の歎をなさしむるも、一步山脈を超えて、南西地方に出づれば、基隆と臺北とは其の距離僅に八里なるに、冬期三個月間に於ける後者の降量は、前者の三分の一にも達せず、尙南西部に到つては寡少、最多量地の十分の一を量るに過ぎざる所あり。然れども漸く夏期に移れば、南部一帯の地方は、恰も極北部と反對に、南西風の濕氣を享けて降水多く、加之此の期間に頻繁なる熱帶的驟雨は、一日能く二三百耗の多量を測り、或は低氣壓屢襲來して、平常水量極めて乏しき本地方の河溪は俄に増水して、時に汎濫することあり。又西部沿岸地方は、冬期の所謂無水風作用著るしきのみならず、夏期の降雨も多少大陸に沮滯せられて、其の量南部に及ばざるが故に、本島中の最寡雨地方に居り、冬期の如きは、數十日間一滴の降水を見ざること珍らしからず。

南北兩降雨期

要するに本地方にては、十月乃至翌年四月の七個月間は北部降雨期にして、五月乃至九月の五個月間は南部降雨期たり。即ち時と處とを異にして、一年兩度の雨期を有す。今臺北測候所の報告に基づき、兩降雨期間に於ける降水量を全年の總量に對する百分比例にて示せば、北部降雨期間に於いては、北部は全年總量の六〇%を降らし、此の間南部は二〇%を降らす。又之れと反對に南部降雨期間に於いては、南部は全年總量の八〇%を降らし、此の間北部は四〇%を降らすの割合に當る。而して兩期間區域の分界とも稱すべき五〇%線は、西は新竹より白沙岬海岸に沿うて臺北の北に出で、石碇と坪林尾との間を経て更に南下し、東下は宜蘭地方を包みて、蘇澳の南部に到れり。以て北部降雨區域の極めて狭小なるを知るに足るべし。而かも北部降雨の状態として、短時間に大雨を降らさずして、霪霖長日に亘るを例とし、水害比較的少なきも、南部の降雨は之れに反して驟雨性の者多く、沛然車軸を流して往往水害を醸すに至る。

豪雨の一晝夜間にて多かりしことは、嘉義廳下の後大埔に九百六十九耗三

降雨

ありしことを最とし、其他同廳下の幼葉林に於ける九百五十耗、達邦社の八百五十二耗一、阿里山の八百三十七耗五を量りたることあり、其他屢四五百耗に上りしものあり。

本島降水量の配布は、宜しく左表を参照すべし。

平均降水量表 (耗)

| 地名 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 年平均 | 一月中最多 |
|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 恒春 | 二二.八 | 二八.九 | 二五.一 | 四八.四 | 一七九.三 | 四二五.九 | 四一七.〇 | 五八〇.〇 | 二六三.九 | 一五六.六 | 四四.六 | 一七.四 | 二一九.九 | 三九五.五 |
| 臺東 | 一〇.五 | 三三.〇 | 五八.七 | 六八.六 | 一八三.五 | 二四四.九 | 二四七.九 | 三四一.九 | 二八五.五 | 一八一.〇 | 四六.七 | 三六.五 | 一七六.九 | 四一四.四 |
| 花蓮港 | 七〇.五 | 八五.八 | 一一.九 | 一六四.九 | 一七四.三 | 一八六.一 | 二〇七.二 | 二八九.八 | 二五〇.八 | 八二.四 | 七九.九 | 一七六.九 | 三三三.四 | |
| 臺南 | 三三.三 | 三七.九 | 三三.三 | 五一.一 | 一五六.〇 | 三九七.七 | 三六三.七 | 四三六.六 | 一三三.六 | 三五.〇 | 一八.四 | 一一.八 | 一七〇.六 | 三八四.九 |
| 澎湖島 | 二六.六 | 三三.八 | 六三.九 | 七〇.三 | 一一.九 | 一七五.七 | 一六〇.三 | 一九〇.〇 | 一〇一.九 | 三三.四 | 二二.八 | 一六.九 | 一〇三.三 | 三三三.八 |
| 臺中 | 四三.六 | 六三.一 | 九二.一 | 一〇七.七 | 二四〇.三 | 三八〇.八 | 二九四.七 | 三六三.三 | 一六四.八 | 一五六 | 一四.六 | 三三.〇 | 一八〇.三 | 四一一.六 |
| 臺北 | 一〇三.三 | 二六.四 | 一七七.六 | 一八八.四 | 二二三.四 | 二五八.八 | 二〇五.八 | 三二一.六 | 二六三.六 | 一〇八.三 | 七五.〇 | 八五.九 | 二〇六.七 | 二八七.三 |
| 基隆 | 三八四.〇 | 二八九.七 | 三三三.二 | 二〇〇.三 | 二七二.二 | 二四七.一 | 二八二.八 | 三二七.八 | 三〇三.三 | 三三二.四 | 三九三.七 | 三九二.四 | 三四九.五 | 三四〇.〇 |

降水日數

降水日數の年内總平均は、基隆の二百廿四日七(二年間)に對する比例六一%、臺北の百八十七日六(五〇%)より、臺南の百七日七(三〇%)、澎湖島の九十四日(二五%)までの間を數へ、概して北部の日數は降量に比較して多く、南部の日數は之れに反して少きと、蓋し前者の降雨は霖雨性を帯び、後者の降雨は驟雨性を呈せるが爲めなり。されば極北基隆の如きは、冬期の平均降水日數廿三日以上に及び、霖雨月餘に涉ること珍らしからず。又南部及び南西部地方は、夏期大雨多きに反し、冬期は乾燥し、臺南地方の如きは、此の期間降水平均日數五日内外を數ふるに過ぎずして、之れが爲めに旱魃の害を被むること尠からず。其の適例は鳳山地方に於いて、明治三十四年十二月十一日より翌三十五年四月十日に至るまで、實に百二十一日間の長さ、一滴の降水を見ざりしことあり。其他四五十日間降水なきは、南西部の普通とも云ふべく、是等旱魃の救濟手段として、本地方に於いては、古來灌溉用水の設備能く發達し、一種の水利組合制度たる所謂埤圳埤とは貯水池を云ひ、圳とは用水道を云ふの舊慣を存し其施設近來愈々整頓せり。又本地方の晴天多きは、高

埤圳

製鹽

温と強風と相俟ちて、蒸發を促し易きが故に、頗る天日製々鹽を行ふに適し北は新竹地方より、南は打狗地方に到るまで約七十里の間、鹽田所々に相連なれるを見る。

雲量

雲量は滿天を一〇として、平均花蓮港の七六基隆の七五、臺北の七一臺東の七〇より、恒春の五八、臺南の五五までの間にありて、一般に北部に到るに隨ひて多し。又日照時數は晝間可照時數を一〇〇として、年平均臺南の五九、臺中の五五より臺北の三七、基隆の三六までの間にありて、一般に南部に到るに隨ひて多く其の趣全く雲量と反比例す。

曇天・快晴日數

雲量滿天十分の八以上を測りたる日即ち曇天日數の年平均總數は、基隆臺北の二百日内外より、臺南恒春の百日内外までの間を數ふ。又雲量滿天十分の二以下を測りたる日即ち快晴日數は、略前者と反比例をなし、臺南臺中の四十八九日より、基隆臺東の二十日内外までの間を數ふ。

霧は冬春の候に多くして、夏期に少なく、其の濃霧に達したる年内の平均日數は、臺北に十二日、臺中に十日、臺南に七日を數へ、概して北西即ち海

霧

雷電

峽地方に多きも、南部地方は罕にして、恒春及び臺東地方の如きは、時に薄霧を罩むることあるも、未だ濃霧に達したることなし。

本島に於いて雷電多きことは、全國に其の比を見ず。蓋し夏期熱帶的の驟雨雷電を伴ふを常とするを以てなり。其發現したる年平均總數は、臺中に五十二日の多きを數へ、臺北之に亞で四十六日なり、最も少きは十六日の澎湖島にして、之に亞で少きは恒春の二十八日、基隆の二十七日とす。概して内陸に入るに隨ひて多く、又五月乃至九月多く、七月八月に最も多し。又十月より四月に至る迄は極めて少く、殊に十一月十二月は最も少く全く雷鳴を聞かざることあり。但し冬期に於いても、低氣壓の進行に伴ふときは、山地と平地とを選ばずして發現するを常とするも、本島内に雷雨の最も頻繁なるは嘉義臺南阿緞の山岳に接近せる地方にして一年平均五十日以上に達するは林内小半天地方及び後大埔より龜洞庄に至る地方なり、其最も多きは臺南廳下の六十二日とす、而して海岸地方は總て少數なり。落雷被害の多數なるは八月にして七月九月順次之に亞ぎ、全く是れなきは二月及十二月とす、回數は

落雷

全島を通じて、最近六年間(自明治三十七年至同四十二年)に百七十四回に上り、之れが爲めに無慮百十一の生靈を損し、二十五の負傷者を出したりと云ふを以ても、本地方雷害の尠からざるを知るべし。故に本島に於ては、古來雷に關して幾多の俗説ありて、或は秋期に起るは、暴風の兆なりと云ひ、或は冬期に起るものは、霖雨を伴ふ(北部にては實際此の傾向ありと云ふ)と云ふが如き、多少眞に近きものなきに非ず。

天氣の變化

尙天氣の變化に就いて一言せんに、冬期に於いても、北部地方に晴天を見ること無きにあらず。若し此期に際し、低氣壓北支那より朝鮮半島若しくは本邦西部に進行するときは、本島亦多少其の影響を蒙りて、氣壓順みに低減し、主風たる北東風も、之れが爲めに妨げられて、大に其の勢力を弱め、陰鬱なる天候俄に一變して、霽明靜穩となることあり。但し此の場合には、韓國若しくは九州地方は、多少風雨あるものと知るべし。故に本島北部にては、冬期氣壓下降するときは晴天となり、上昇するときは雨天となりて、北東風勢を増すに至るの傾向あり。然れども前記の低氣壓にして、若し本島に

接近するときは、風向爲めに西に偏し、却つて全島の降雨となるなり。又冬期は南部の晴天時期なるも、北東風頗る強烈なるときは、北部の降雨往山脈以南の地方までも影響することなきに非ず。其の他冬期にても、低氣壓時として南沖に發生し、或は前述の如く大陸より接近して、俄に降雨を催うすことありて、變幻極まりなきは、實に本島の天氣なり。

本地方降水日數の年内配布は、次に記せるが如し。

平均降水日數表 (一日降水量〇・一耗以上の日數)

| 地名 | 月次 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 年計 | 一年間百分率 |
|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|--------|
| 恒春 | | 九〇 | 七二 | 七四 | 七八 | 一二四 | 一七八 | 二二七 | 二二二 | 一七九 | 一三五 | 九八 | 八二 | 一五四・八 | 四三 |
| 臺東 | | 二二五 | 九三 | 一二八 | 一四七 | 一九三 | 二二七 | 二二二 | 一四八 | 一五三 | 一三七 | 九六 | 九二 | 一五七一 | 四一 |
| 花蓮港 | | 二二八 | 二二八 | 一四九 | 一四八 | 一八二 | 二二六 | 一九九 | 一〇〇 | 二二二 | 二二五 | 二二八 | 一〇八 | 一五二・二 | 四一 |
| 臺南 | | 六一 | 四八 | 六〇 | 七四 | 一〇〇 | 一六一 | 一六五 | 一八五 | 一〇二 | 四五 | 三六 | 四一 | 一〇七七 | 三〇 |
| 澎湖島 | | 六六 | 七二 | 九六 | 八四 | 九八 | 一一八 | 九四 | 一〇四 | 六五 | 四二 | 四八 | 五五 | 九四・〇 | 三三 |
| 臺中 | | 八九 | 九三 | 一二三 | 九九 | 一二四 | 一六九 | 一五二 | 一八一 | 八六 | 三四 | 四九 | 六二 | 一二六・〇 | 三三 |

| 臺北 | 基隆 |
|-------|-------|
| 一七五 | 三三六 |
| 一六三 | 二〇八 |
| 一七九 | 三三二 |
| 一五〇 | 一八八 |
| 一五六 | 一八六 |
| 一四八 | 一五〇 |
| 一三五 | 九九 |
| 一五七 | 一四四 |
| 一四二 | 一五六 |
| 一四九 | 一九七 |
| 一六三 | 三三二 |
| 一六五 | 三三〇 |
| 一八七・六 | 三三四・七 |
| 五一 | 六〇 |

霜雪 本島は一般に氣温高きが故に、結霜を見ること甚だ罕にして、南部地方には殆んど之を見ざるも、北部地方には多少之れを見る。臺北に於ける初霜の最早は十二月五日(明治三十四年)にして終霜の最晩は三月七日(明治三十九年)とす。要するに本島の結霜期間は、平均約一個月に渉るに過ぎずして、假令結霜あるも、極めて微霜なれば、日光を見れば忽ち消散し、耕作物には著るしき害なきが如し。

降雪 平地には殆んど無しと雖、中央主山脈の高峯には、年十二月乃至翌年二月頃までの間、多少の降雪を望見し得べく、又大屯山にも降雪ありたること、亦珍らしからずして本島舊記にも『大屯積雪八景云』の句を散見するなり。

平地の水面に結氷を見たることは、北部に於て、明治三十四年二月十三日夜より十四日朝に亘りて唯一回ありたるに過ぎず。此の際臺北に於いては、

霜雪 氷

湿度

其の厚さ凡そ七耗二分三厘に達し、新竹及び宜蘭地方の如きは水田に薄氷を結び、若年の本島人中には、其の何物なるかを知らざる者ありしと云ふ。

湿度 湿度は他和を一〇〇とし、年平均基隆の八四%、澎湖島の八三%より、臺南の八〇%、臺東の七八%までの間にありて、本邦内地に比すれば概して大なりとす。要するに臺南臺東恒春等の南部地方は、夏期多湿にして冬期寡湿に、又臺中以北の地方は、春期多湿にして、夏期及び秋期寡湿なるも、其の多寡の差極めて僅少なり。湿度の最小なりしは、恒春に於ける一五%(明治三十八年十月十六日)にして、内地に於けるが如く、甚だしき乾燥を呈したることなく、澎湖島の如きは其最小湿度四〇%を算ふるを見る。

水蒸氣の張力も、本邦中最も大にして、其の年平均は恒春の十八耗三より澎湖島の十七耗五、臺北の十六耗までの間にありて、其の最大は恒春の三十二耗一、最小は亦恒春の六耗を推すべし。

湿度の各月平均は次表に詳かなり。

平均湿度表 (百分率)

水蒸氣の張力

新高山頂の氣象

| 地名 | 一月 | 二月 | 三月 | 四月 | 五月 | 六月 | 七月 | 八月 | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 | 年 | 最小 |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|----|----|
| 恒春 | 七六 | 七九 | 七六 | 七八 | 八〇 | 八四 | 八四 | 八六 | 八三 | 七八 | 七五 | 七四 | 七九 | 一五 |
| 臺東 | 七三 | 七三 | 七七 | 七九 | 八一 | 八一 | 八〇 | 八一 | 八〇 | 七八 | 七四 | 七三 | 七八 | 二六 |
| 臺南 | 七九 | 七八 | 七九 | 七八 | 七九 | 八三 | 八三 | 八四 | 八〇 | 七八 | 七七 | 七三 | 八〇 | 二六 |
| 澎湖島 | 八三 | 八二 | 八四 | 八四 | 八五 | 八七 | 八三 | 八五 | 八三 | 七八 | 七七 | 七三 | 八〇 | 四 |
| 臺中 | 八一 | 八一 | 八三 | 八三 | 八二 | 八一 | 八〇 | 八二 | 八一 | 七八 | 七八 | 八〇 | 八一 | 二六 |
| 臺北 | 八四 | 八四 | 八五 | 八三 | 八一 | 八〇 | 七九 | 七八 | 七九 | 八一 | 八一 | 八三 | 八一 | 三一 |
| 基隆 | 八六 | 八四 | 八六 | 八七 | 八六 | 八四 | 八三 | 八三 | 八三 | 八二 | 八二 | 八四 | 八四 | 三一 |

新高山頂の氣象 富士山頂に於ける高層氣象觀測一班は、本誌卷三に於いて之れを述べたる所なるが、本島にも高層富士山を凌ぐ新高山のあるあり、且つ其位置遙に低緯度なるを以て、若し其の頂上に於て氣象觀測を施すを得ば、斯學研究上資する所尠からざるべしと雖、其の所在極めて僻遠の蠻境たるが故に、未だ正式に觀測の舉なきも、將來遂に之れが企あるべきは、疑を容れざる所なるべし。茲に明治三十八年十一月、總督府員に依りて試みられ

たる観測報告中、頂上に於けるものを左に抄出して、臺南に於ける観測と對照するの便に供す。(氣象報文に據る)

十一月三日午後三時

| 場 | 所 | 氣 壓 | 氣 温 | 水蒸氣張力 | 濕 度 | 風 向 | 風 力 | 天 氣 | 記 事 |
|------|-------|------|------|-------|-----|-----|-----|-----|----------|
| 新高山頂 | 四七五・七 | 一〇・〇 | 五・七 | 六二 | 北 | 西 | 三 | 快晴 | 山麓層雲に覆はる |
| 臺南 | 七五六・〇 | 二六・四 | 一三・七 | 五六 | 北々 | 東 | 二 | 晴 | |

右は固より一時的の観測なりと雖、以て其の一斑を窺ふを得べし。即ち氣壓は山の高きが故に平地の三分の一に減じ、氣温頗る低くして、且つ變化甚だしく、一時間後には五度に降りたり。當時五度の同温線は、日本海北部より北海道北部の間に亘りしと云ふ。又其の際氣壓示度の遞減に據りて推算し得たる海拔高距は、三千九百七十一米にして、之れを臺灣總督府地質鑛産圖所載の三千九百六十二米に比すれば、其の差僅に九米に過ぎず。

●●●●●
暴風雨標の本島に於ける建設地は左の如し。

暴風雨標

臺北測候所、淡水支應内、新竹廳後埔港、臺中廳塗葛堀、臺中廳鹿港、嘉義廳下湖口港、嘉義廳東石港、嘉義廳布袋嘴、臺南廳安平、臺南廳打狗、阿緱廳東港、阿緱廳鴉巒鼻、宜蘭廳蘇澳、宜蘭廳頭圍、臺北廳三沙灣、澎湖島即叙門外。花蓮港街東側丘陵、臺東測候所。

第二編 人文

第一章 沿革

一 石器時代

臺灣に於ける石器時代の遺蹟調査はいまだ十分ならず、随つて其詳細を知る事能はざれども、明治三十五年までに知られたる遺物發見地は九十二箇處に及べり。遺物としては石斧多く、それについて石鑿、錘石、石棒、凹石等あれど極めて稀なり、また土器も發見せられし者有紋無紋の二種あれど、其數なほ多からず、而して其分布状態はこれを山地と平地とに分つべし。山地にては新高山後山方面の奥、海拔二千米の高地にまで及び一千六百米の關山附近、一千四百米の八通關下、一千米の阿里山附近、濁水溪附近、七百五十米の水店附近にも遺物の散布せるを見る。また河川及海岸との關係は、溪水溪房里溪大甲溪大肚溪濁水溪北掌溪會文溪下淡水溪河望溪秀姑巒溪の河岸基隆打狗

大里筒紅頭嶼の海岸に發見せらるゝを以て知るべし。而して森丑之助氏の研究によれば主要なる石器時代の住民は、下溪水溪以北臺北平原に至る一帯の山野に分布し、現住蕃人と地理的分布の位置殆んど相同じく、平地よりは寧ろ山地に多くの遺物を有し、集々山阿里山筒仔霧山を除くの外、山地にては打製石斧のみを出し、平地にては磨製半磨製の石斧、其他の石器土器を出す事は、兩地住民の文化の程度が互に相異なりしを知るを得べしといへり。

かゝる遺跡を残したる者は、果して所謂今日生蕃と稱せらるゝ蕃族の祖先なりや、或はそれ以前の先住民なりやとの問題は未だ解決せられず。されどバイワンツアリセンブヌマツオウブヌンアミの諸族は、皆遠き昔に於て石器を使用せる事ありとの口碑を有し、(伊能嘉矩氏の調査によれば、タイヤル族にも同じ傳へありと稱すれど、森丑之助氏は之を否定せり。)アミヤミツオウの諸族はいまもなほ土器の製作に従へるが如きは、將來の研究者が注意すべき現象なるべし。而して森氏は石器時代の住民即ち蕃族なりと爲すものに似たり、記して後考に供ふ。(都邑及人口の條参照)

上古における支那との關係

琉球の稱

巡檢司を澎湖島に置く

二 無所屬時代

臺灣及澎湖島は其地位が支那大陸と相接したるの故を以て、早くよりその發見する所となれり。而してその史上に現はれしは隋の開皇年中虎賁陳稜をして澎湖島を略せしめたるを初見となす。次で大業三四年の交朱寬を琉球に派遣したる事あり、茲に琉球といへるは、現在の沖繩を指すにあらず、閩浙沿岸より舟出して、澎湖臺灣をはじめ、東北の洋上に横りたる諸島を概稱したるものなるべきは、隋書以下の記事によりて推測するを得べし。これ恰も我國の上代に多嶽屋玖といへるは、南海諸島の汎稱なりしと其の事由を同じくせり。唐時代には支那人の澎湖に移住する者ありしも、臺灣に至りては全く其の消息を詳かにする能はず。宋より元にかけては依然舊稱を踏襲して琉球の概稱を用ひたりしが、元の末に至り巡檢司を澎湖島におきて、福建省同安縣に隸屬せしむ。明時代にもまたこれに倣ひて同島に巡檢司をおきしも、洪武年間これを停廢し、移住民をして内地に歸らしめたり。されど臺灣本島

小琉球の稱

臺灣の稱

日本人の臺灣占據及び貿易の開始

高砂及び高山國の稱

は全く化外の地に屬し、なほいまだ支那の統治に歸せざりき。而してこれを呼ぶに小琉球の稱を以てし、沖繩群島を大琉球と唱へて、この二大島を區別したる事は實に嘉靖年間にあり。また臺灣の稱は萬曆の際に起り、爾來遂に本島の名稱として今日に及ぶ。臺員大宛など記したるものあるは、いづれも別の文字を以て同音を寫したるに過ぎざるなり。

嘉靖萬曆以降の臺灣は、實に冒險敢死の海賊が占居してその威を逞くせる時代なりき。即ち我が中國四國九州に割據せる群雄及び猛士等は、盛んに船を艇して支那朝鮮暹羅安南呂宋の沿岸に出沒し、貿易と剽掠とを併せ行ひ、勢威支那を壓す、彼の呼んで和寇といへるものこれなり。而して所謂和寇の徒の根據地は臺灣と澎湖島にして、臺灣に於ては北部なる今の基隆淡水地方、南部なる今の打狗地方など、早くより其の占居せる所に係り、半ば殖民地の形を爲せり。當時我が國民が臺灣を呼ぶに高砂の稱を以てせるは打狗の轉化せるにて、またその風光の明眉を播州高砂に比せるに由るといふ。なほ高山國とも呼びしは、更に高砂の轉音なり。

豊臣・吉及川家康の臺灣略の計畫

我が文祿二年(明の萬曆二十一年)豊臣秀吉は臺灣の地位に着目し之を経略するの意ありしもの、如く、原田孫七郎の呂宋に赴くの途、國書を臺灣に寄せて其入貢を促さしめたり。國書には日本國前關白と署し宛名には高山國と記す。いま現に前田侯爵家の所藏に係る。思ふに交渉要領を得ざりしものなるべし。此頃臺灣に赴きて貿易に従事せる商人は右の原田孫七郎をはじめ納屋(二に魚屋に作る)助左衛門末次平藏船本彌平次荒木宗太郎絲屋隨右衛門茶屋四郎次郎角倉了以等その重なるものなりき。さてまた徳川家康も元和元年(明の萬曆四十三年)村山等安に高砂渡航の朱印狀を授けしが、眞意は臺灣の占領を期するにありしと傳へらる。

日本人の勢力

此時に當り支那の海賊もまた同地にあり、臺灣には林道憲、澎湖島には吳平許朝光の徒占據したりしも、勢力遠く我が國民に及ばず、林道憲の如きは我の嚮導として支那の沿岸を侵したるとさへありき。されば後年和蘭人が、臺灣の南部を占領するや、(後文参照)一宣教師は書を本國政府におくり、若し和蘭にして其の統治を放棄せば、臺灣の地はポルトカル人又は日本人の有に

顔思齊の占據

歸すべしといへり。邦人の勢力が如何に大なりしかの一斑推して知るべし。

鄭芝龍の占據

天啓元年(我が元和七年)福建の人顔思齊といふもの、落魄して我が平戸にあり、倜儻大志、密かに功業の念を抱く事久しかりしが、同島の徒楊天生陳衷紀洪陸陳勳と共に萬里遠征の議を定め、同四年平戸を發して臺灣に入り、日本甲螺甲螺は頭領の意と稱し、一時海上の覇權を握り、群營を十寨に分ちてこれを守らしむ。(明末の支那人の臺灣に據りて事を爲すもの常に日本甲螺と稱す、蓋し日本人の勢力ありしが爲之を詐冒せしならん。)幾もなく思齊の死するや、部下の青年たりし鄭芝龍これに代る。芝龍才略人に絶し、衆を率ゐるにも自ら規律の存するありて、尋常流賊とは其の撰を異にし、寮寨を設け土蕃を撫育する等、經營の迹また見るべきものなきにあらず。然れども職とする所は、臺灣の統治にあらずして、寧ろ此の地を根據とし、海上若しくは支那の沿岸を掠略するにあり。就中福建省の金門廈門、廣東省の靖海甲子の如きは、屢、襲撃を試みたる所なりき。されば臺灣附近の海上權は鄭氏の手に歸し、諸船舶は鄭氏の記號を有するにあらざれば往來するを得ず、而もこれ

鄭芝龍臺灣を
奪て、明に降
る

を得るが爲には三千兩の免許料を支拂ふべく餘儀なくせられたり。時は恰も明の末年にして政漸く衰へし際なりしかば、力よくこれを制する事能はず、芝龍が名利の念に厚きを奇貨とし、崇禎元年我が寛永五年利を以てこれを誘ふ。芝龍遂に臺灣を棄て、明朝に降り、尋で南澳總兵となりまた福建都督となる。然れどもその餘黨はなほ臺灣に留りて、所在を横行するものありしかど、既に首領を失ひて統一を缺きたれば勢力微として遂に振はず、オランダをして覇を此の地に稱せしむるに至る。

三 歐人占據時代

其一 オランダ人の占據

歐人の發見
フホルモサの
稱

臺灣が歐人の目に觸れたるは西暦一五〇〇年代にして、當時ポルトガルの航海者が、海上よりその島影を望み、華麗の島の義を以てイラー、フホルモサと稱す、フホルモサの稱茲に起る。されどいまだ本島を経営するに至らざりき。幾もなくオランダは、一六〇二年我が慶長七年、明の萬曆三十年東印度會社

オランダ人の
澎湖島占領

を設立し、専ら東洋貿易を行ひしが、一六一八年ジャバの要港なるジョガタラを奪ひてバタヴィヤと改稱し、總督をおきてその根據地となせり。是より先一六〇四年七月に至りワインブランド、バン、ワルワイクは二隻の船艦を率ゐ、明の放棄せるに乗じてまづ澎湖島を占領す。明朝大に驚きて退去を迫りしに、ワルワイクもその兵力の敵し難きを思ひ、同年十一月遂に澎湖を撤退せり。越えて一六二二年我が元和八年、明の天啓二年提督カイツェルツーンは十七隻の艦隊を以て再び澎湖を奪ひ、砲壘を各所の要害に築き、永住の計を爲したれば、明朝は兵を發して之を攻撃し、數年に亘りて勝敗尙ほ未だ決せざりしと雖、而も當時オランダの海軍は非常に優勢なりしを以て、明朝もその争ひ難きを知り、一六二四年(我が寛永元年、明の天啓四年)オランダ人にしてもし澎湖を放棄せば、その臺灣を占領するに關して敢て異議を挟まざるべしといふを條件として和議を結びたり。是に於てオランダ人は同年八月去つて臺灣に赴き、其の地を略して東印度商會の管下に屬し領事を派遣せり、即ち砲臺を安平に築く。一六三〇年に至りて成る。名けてゼーランディア城といふ。(支

オランダ人の
臺灣南部占領

那人は之を紅毛城赤崁城安平城などといへり。次でまた一城を臺南に築き一六五〇年に成る、プロヴィデンチア城と稱し以て政廳に宛つ。今の臺南市即ちそれなり。(オランダ人の退去後、明朝は小城を澎湖の要地に築きて戍兵をおきたり)オランダ人の臺灣を占領するや、その商敵たりしスペイン人もまた臺灣の北部に來り一時占有の實を擧げたれども、幾もなくオランダ人の追ふ所となり、全島を擧げてオランダの統治に屬す。(下文参照)而して我が國民の海外貿易に従事するもの多く臺灣にあり、彼等は臺灣における先入者たるの故を以て、租税を納むるを肯んせず、オランダ人もまた強てこれを勵行する能はざりきといふ。然るに一六二七年(我が寛永四年)長崎の商人末次平藏の所有せる商船支那に航行の途次臺灣を過りしに、その船中に多數の兵器を裝載せしかば、領事ピーター、ヌイツは以て異心ある者と爲し、一時兵器を押收し且貨物を差押へたれば、彼我の間に紛争を生じたりしが、商船の去るに臨み臺灣の土蕃十六名を誘拐して去れり。かくて翌年に及び濱田彌兵衛は平藏の命を含み、オランダ人の爲に被りたる商船の損害賠償を求めんが爲に臺灣

オランダ領事
と濱田彌兵衛
との衝突

同上に關する
異説

郭懷一の陰謀

に赴くや、オランダ人は早くもその來意を看破し、船中の兵器を押收し且一行を抑留して出港を禁じたり。是に於て彌兵衛は武力を以て領事に迫り、遂に彼をして一萬二千五百三十三斤の生糸と純銀八萬六千マルクを支拂はしめ、且つヌイツの子の十二歳なるをはじめ、數名のオランダ人を擒として歸國の途に就きたり。かくてヌイツはこれが爲罪を東印度會社に得て免職禁錮の刑に處せられしが、後自ら我が邦に來り、平戸在留の甲比丹によりて罪を謝したれば、一六三四年(我が寛永十一年)交渉成りて、捕虜のオランダ人は臺灣に歸港するを許されたりき。或はいふ臺灣にてヌイツを脅したるは、彌兵衛にあらずして天野屋太郎左衛門なりしと。いまだその是非を詳かにせず。

一六五二年プロヴィデンチアの城市及び其の附近にある支那人は郭懷一(蘭人の書にはブエトとあり)を首魁とし陰謀を企て、オランダの官吏及び重なる商人を襲ひ、城市を火、屠殺を試み頗る慘虐を極む。ゼーランディア城將ブルバル變を聞いて來り救ひ漸く平定するを得たり。此時土蕃二千餘人はオランダ人に力を併せて支那人と戦ひしといふ。

オランダ人の
理蕃

翻てオランダ人の施政を考ふるに、彼等はまづ土蕃の化育に力め、宣教師を送りて布教及び教育の事に従はしめ、また蕃人との結婚を奨励してその同化を計るなど、いたく意を注ぐと共に、歉年災厄には金穀を散じて扶助し、寇敵ある時は兵を發して保護し、常に恩威并び行ふの手段を取り、時に盛宴を張りて山海の珍味を饗し、以て土蕃の心を收攬せり。而して蕃社に對しては概ねその舊慣に従うて自治に任せ、單に之を監督するに過ぎざりしが、なほまた歸附土蕃の酋長を召集して評議會を設け、オランダ當局者の發する布告の趣旨を知らしめ、土蕃に對する施設の適否を諮問するの機關となせり。蕃地を開拓し生産事業を起す事もまたオランダ人のいたく注意せる所なりき。而してその重なるものを開墾牧畜及び植物の移植となす。

オランダ人の
開墾

開墾事業は主として支那人及び蕃人を使役したるものにして、これに要する費用と器具穀種とは一切給與して其の事に従はしめ、開墾の成就するに隨ひ、田園面積を測量し、十畝の地を一甲と爲し、且田園の土質に應じて上中下三則に區別して年貢を徵收せり。耕作物は重に甘蔗と米穀となりしが、一

オランダ人の
牧畜

六五二年の調査に従へば、米田は蔗園に比して三倍の多きに及べりといふ。また牧畜は耕作の普及を計るにあり。蓋し土蕃は一頭の牛馬をだに有せざりしかば、東印度會社は宣教師グラヴィスに四千レアルの金を無利息にて貸與し、百廿一頭の牽牛を買ひ、彼の管轄に屬するスーランク村の住民に交附せり。之と同時にまた牛頭司といへるを南北の二路におきてその蕃殖を圖り、併せて耕作の用に供したりき、さて移植せる植物は皆食用の爲にして、波羅密、番柑はその本國より、羨子は佛國より、様仔荷は日本より種子を齎らし來りてこれを植ゑたりといふ。

貿易の状態

更に貿易の状態を伺ふに、支那との貿易額は平均四百萬マルクに上り、輸出品の重なる物は胡椒、香料、琥珀、亞鉛、麻布、臺灣内地の籐にして、生絲、陶器、黄金等を輸入し、これをバタヴィヤに轉用せり。また日本との貿易品は重に砂糖にて年、七八萬ピルクスの多きに達し、内地の殊産たる鹿皮をも轉出したりき。この鹿皮は土蕃との貿易によるの外、支那人より狩獵税を徵してこれを狩りする事を許せり。

歳入の一斑

臺灣の歳入は人頭税、狩獵税、漁魚税及地租税等を併せ、平均十四萬二千マルクなりしが、その支出せる殖民費は三十五萬マルクを越えず。而して其の貿易の利は極めて多額に上り、加ふるに支那海上における海賊的掠奪により、巨利を博取せる事夥しきものありき。されど商社の常として只利これ計り、兵力の點には比較的重きをおかざりしが爲め、臺灣を領有する僅かに三十八年間にして、鄭成功の驅逐する所となれり。其事は將に下文に於て述べんとす。因にいふ當時在臺のオランダ人は千餘人に過ぎざりきといふ。

其二 スペイン人の占據

西曆一五九三年、當時ヒリッピン群島を畧有せるスペイン人は、更に進みて臺灣を占領せんとし、ドン、ホアン、ファミデオといふ者三艘の帆船を率ゐてマニラより北進せしが、バシー海峡の附近に於て風波の爲に一船を沈め二船を傷け、遂にその目的を達する事能はず、空しく商敵たるオランダ人をして南部臺灣を占領せしめたり。さればこれに對して自國の東洋貿易を保護する必要上、痛切に臺灣に據るの必要を感じ、一六二六年五月提督アントニオ、

スペイン人の
臺灣北部占領

カレニヨは十二艘の艦隊を率ゐて、呂宋の北端なるアバリ港を發して基隆港に到り、港口なる社寮島(即ち鷓籠島)を根據地としてサン、サルヴァドルと名け、又基隆港口をサン、テシマ、トリニダットと名け、海岸なる支那人の部落をハリヤンと名け、更に砲臺四ヶ所を築きしが、一六二九年七月更に淡水を占領してカンドルと名け、サント、ドミンゴ城を築く。當時北部臺灣には土蕃の外には少許の日本人と支那人とが滞在して貿易を行へり。

スペイン人の
土蕃

かくてスペイン人は臺灣太守をおきて此地を管せしめ、基隆淡水間の道路を開き、附近の土蕃を撫育し、また宣教師をおくりて布教を試みると共に、その船舶が屢、東海岸に於て土蕃の劫掠虐殺せられしを見て、宜蘭地方に守備をおくのを必要を認め、一六三二年その一港口なる蘇澳を占領してサン、ローレンソと名け、また同じ海岸一帯をサン、タカタリナと命名せり。かくて一六三四年及び五年の際は全盛の頂點に達し、スペイン人の淡水にある者約二百人、基隆にある者約三百人なりしといふ。中にも基隆は支那南部とマニラとの貿易の中心を爲し、商船常に輻湊たりき。

スペイン人と
オランダ人と
の衝突

此の時に當りオランダ人はスペイン人が臺灣北部に殖民せるを見て、若しその勢力を得るに至らば、自己の貿易上の利益を失ふ事大なるを思ひ、一六二九年兵を擧げて淡水を没したれども志を得ざりしが、一六四二年大にこれを撃破す。スペイン太守ゴンサロボルチリオは遂に事の爲す可かざるを曉り、同年九月を以て臺灣を退去し、其の地はオランダ人の有に歸したり。スペイン人の此地の占據せる事、前後通じて僅かに十六年のみ。従うて施設の如きまた多く語るべきものを見ず。

臺灣における
日本人の退去

オランダ人及びスペイン人が臺灣南北の要地を經營せる時代、我が國には重大なる政事上の變革あり、即ち寛永年間における鎖國令にして、國民の海外に赴くを嚴禁し、オランダ以外の歐人の渡來を禁止したれば、戰國以來漸く盛大を來したる外國貿易は茲に全く杜絶し、海外諸國に於ける幾多の殖民地は本國との連鎖を缺き、民族としての勢力を失へり。かくて臺灣地方もまた遂に邦人の足跡を絶つに至れるは、誠に惜むべき事なりといふべし。

鄭成功明朝の
恢復を圖る

四 鄭氏占據時代

鄭成功は芝龍の子にして、母は田川氏、日本人なり。平戸に於て生る。芝龍の臺灣を棄て、明に仕ふるや、成功一日父に従ひて隆武帝に見ゆ、帝其人となりを愛し姓朱氏を賜ふ、因て國姓爺と稱す。國姓爺とは朱姓を賜へるものを呼ぶの名なり。資性英邁にして剛毅果斷、尤も士心を得たり。時に滿清の勢漸く強大を加へ、明朝はこれに應せられて殆んど衰亡に瀕す。是に於てか芝龍は節を變じ、順治三年を以て遂に清朝に降る、成功従はず、一意明朝の恢復を計り、厦門に割據して王事に力めしが、永曆十二三年の交、將に南京を定めんとして大舉北上す、勢破竹の如く、頻りに諸城を拔きたれども、江南の役に大敗して再び厦門に歸る。即ち使を日本におくりて援兵を請ふ、幕府應せず。成功時の非なるを思ひ、更に臺灣に據りて徐ろに爲す所あらんとし、密にこれを窺へり。在臺灣のオランダ領事にコネット(支那人の書には揆一王となり)探察して、兵艦の派遣をパタヴィヤの總督に求むること急なりし

鄭成功援を日
本に請ふ

鄭成功の臺灣
占領

オランダ人の
臺灣撤退

臺灣を改めて
東都とす

が、國運衰頽に傾きつゝありしオランダは其の費に苦しみ、而して東印度會社の評議會も亦非戰論を採りしかば、遂にコネットを免じ、更にクレンクを領事に任命せり。然るにクレンクの未だ着せざるの前、即ち永曆十五年(西曆一六六一年、清の順治十八年)の春成功自ら幾萬の兵を率ゐて來襲し、直にプロヴィデンチア城を抜き、更にゼーランダア城を圍む。會、クレンク此の地に來りしかども上陸する能はず、轉じて基隆に赴きしに、同地のオランダ人も亦成功の大軍に抗しがたきを思ひ、守備を撤してクレンクの船に便乗し、相共に一旦日本を過りし後バダヴィヤに歸航せり。さればゼーランダア城に立籠れるコネット以下のオランダ人は慘憺たる苦境に陥り、而も援兵の渡來を豫期しがたきを以て、土地并に公有財産を擧げて成功に交附し遂に臺灣を去る。茲に於て全島悉く鄭氏の有に歸す。實に西曆一六六二年二月なり。

鄭成功の臺灣を占有するや、プロヴィデンチア城を改めて承天府となし、ゼーランダア城を修めて、安平鎮となしその邸宅を此地におく。また鷓鴣(後の基隆)以下の要地には各、守備の兵を分配して之れを守れり。よりに臺灣の稱を

東都を改めて
東寧と稱す

鄭氏明朝に降
る

理蕃施設

停めて東都といふ。尋で部下の兵を土着せしめて兵農を分たず、力めて開墾を行ひしが翌年病で歿す。子鄭經、父に代りて臺灣に主たり。此の時更に東都の稱を改めて東寧となし、砲臺を澎湖島に築き、官制を定め學校を設け、五穀を栽植して糧類を蓄積し、甘蔗を挿置して砂糖を製造し、或は坵埕を修築し或は製鹽の業を起すなど、經營見るべきものありと雖、而もその明朝恢復の精神に至りては遂に乃父の如くならず、やゝもすれば清朝に歸降せんとするの意ありしが、遂に果さずして逝き、其子克塽立つ。年なほ幼なるを以て兗錫范劉國軒の二人軍國の政を監し、往にして專横の舉動あり、鄭氏漸く民心を失ふ。清朝この機に乗じて臺灣を平定せんとし、康熙二十二年六月大軍を發しまづ澎湖を奪ふ。鄭氏の君臣いたく疑懼の念を抱きまた戰意なし。即ち劉國軒の意見によりて降伏の議を定め、同年七月土地人民を擧げて遂に軍門に降る、鄭成功が此の地に占據してより三代二十三年にして亡ぶ。

鄭氏時代の拓殖事業は、上文に述べたるが如く、屯田組織により、兵士に土地を給與して開墾せしめし外、當時臺灣に殖民せる支那人漸く多きを加へ

しを以て、厚く此の輩を被護して事に従はしめられたれば、いまの臺南近傍より次第に南北に侵食し、また滬尾鷓籠の河岸にも、拓殖の効を擧ぐるを得たり。これ等の拓殖は、いづれも土蕃の固有地域に於てせしものにして、順ふものは撫し逆ふものは膺ち、其の交界には土堆を築きて蕃害の防禦に備ふ。而して支那人の土蕃と貿易を營むものに對しては、賦税として鹿皮の各種を徵收したりしが、彼等は蕃界に金を産する事をも探知して其の採取を企て、重に東海岸に於てこれを行へりといふ。

鄭氏の土蕃に對するや恩威並び行ふにありき。されば鄭成功の此の地に據るのはじめ各蕃社を巡視して物を施し、好言慰諭する所あり、尋で諸將をしてこれを分管せしめしが、たゞ大體を監督するに留り、其の他は概ね社内の自治に任せ、酋長を土官と名けて部下を統制せしめたりき。

五 清國領土時代

康熙二十二年臺灣の清朝の手に歸するや、當時支那帝國の統治なほ未だ完

東寧を改めて
臺灣の稱に復

し教化を布く

臺厦兵備道の
設置

諸羅府及臺南
鳳山の三
縣の設置

からざりしより、この海島をば、永久に版圖となすべきか、はた放棄すべきかについて議論あり、有司多くは放棄説に傾きしが、水師提督施琅獨りその不可を争ひ、上疏して利害を披陳す。蓋しこれを化外におく時は、或は匪徒の巢窟となり或はオランダの再據となり、禍害の及ぶ所少なからずといふにありき。清朝遂に施琅の議に従ひ、翌廿三年東寧の稱を改めて臺灣となし、福建省に隸屬す。その制、福建巡撫の下に臺厦兵備道臺をおき、厦門と臺灣とを兼治せしむ。衙門は臺灣府城西安坊にあり、即ち臺灣における中央行政機關にして文武を總督し、行政及び武備の責に任じたり。はじめ兩地の間を半年づつ交代駐在したりしが、後に三年毎の交代となす。道臺治下の行政区劃を一府にて總轄し、臺灣府と呼び、衙門を府城におく。府城は、蘭人時代のプロヴィデントア城、鄭氏時代の承天府にして、いまの臺南市なり。府の管轄する所に臺灣澎湖島をも管掌す(諸羅後ち嘉義と改む)鳳山の三縣あり、地方行政を統ぶ。縣署ははじめいづれも府内にありしが、開拓の進むに従ひ、鳳山縣は康熙四十二年、諸羅縣は同四十五年、并に其の地に移駐せり。

鎮臺の設置

武備は道臺の下に鎮臺あり、臺灣に於ける中央武備機關にして、衙門を府内に置き、安平水師副將營澎湖水師副將營鎮標營管轄は澎湖を除きたる臺灣縣と同じ。南路參將營管轄鳳山縣と同じ。北路參將營管轄諸羅縣と同じ。を總管し、兵數約一萬、更にこれを各地に配布せり。(後ち沿革あり、今繁を避けて省略に従ふ。)

朱一貴の亂

康熙六十年四月朱一貴兵を鳳山地方に擧げ、聲言して明朝の裔なりと稱す。是時に當り承平既に久しく、守備解類し政令また漸く亂る。而して臺灣移住民の大部分は、明朝若くは鄭氏の遺民にあらざれば海賊の亞流なりしかば、或は衷心より清朝の官吏に服せず、或は眼に法紀なく慄悍亂を好むの風あり、政令一たび弛みなば禍亂の起るべきは自然の勢なりき。故に朱一貴の蜂起するや四方響應し、淡水鳳山諸羅の各地を掠め、旬日にして臺灣府を陥る。道臺梁文煊以下、皆守を捨て、澎湖に脱走す。是に於て朱一貴自ら王位に即きて中興王と稱し、元を永和と改め、大に群賊を封す。閩浙總督覺羅滿保變を聞きて大に驚き、直に水師提督施世驤南澳總兵藍廷珍等をして之を討たし

め、閏六月遂に朱一貴を生擒す、されど餘黨なほ盛んなりしが、雍正元年四月に至りて全く平定せり。

朱一貴の亂は臺灣統治の上に非常の注意を與へ、清朝政府をして施政の忽に爲す可からざるを覺知せしめしかば、康熙六十年巡視臺灣監察御史滿漢各一員をおき、一年毎に交代して臺灣を巡視し政治を監督せしめしが、雍正元年其衙門を府城内に、出張所を鳳山縣内に設く。此年また彰化縣淡水廳を増設し、五年更に澎湖廳を開きたり。是に於て一府三縣の制變じて、一府四縣二廳となる。翌年臺厦兵備道を改めて、臺灣道となし、道臺をして臺灣に專任たらしめ、且其の兵備兼任を解きてこれを鎮臺に委ね、力を行政に盡さしむ。

朱一貴の亂平ぎて後、六十餘年にしてまた林爽文の亂起る。はじめ臺灣に天地會といへる秘密結社あり、匪徒の集團にして、黨與全島に普ねし。即ちこれを南北の二路に分ち、府城より以北諸羅彰化の地方を北路とし、林爽文盟主たり、府城より以南鳳山一帶を南路とし、莊大田盟主たりしが、林爽文

朱一貴の亂後
統治の改革

臺灣監察御史
の設置

彰化縣及淡水
澎湖二廳の増
設

臺灣道の設置

林爽文の亂

諸羅縣を改めて嘉義縣と爲す

は居を大里杙に占めて黨匪尤も多きが故に、陰然として會頭たるの勢力を有せり。臺灣道臺永福知これを憂ひ、乾隆五十一年七月その領袖數十人を捕へて處罰せしかば、林爽文等自ら安んぜず、十一月遂に兵を擧げて彰化城を拔き、年號を順天と稱し、盟主府を開き、更に兵を諸羅に進めて占領したれば、子地の匪賊蜂起響應し、妖氣北路一帶に蔓延す。これと同時に莊大田もまた黨衆を率ゐて鳳山城を陥れ、南路また騷然たり。是に於て林爽文は臺灣府城を奪はんとし、部將を遣りて攻撃を加へたれども、却てその破る處となりて目的を達する能はざりき。會同浙總督常青は變報を得ると共にまづ水師提督黃仕簡等先發せしめ、尋で自らも征途に上りしが、賊勢猖獗にしてその功擧らざりしかば、乾隆五十二年清國政府は更に協辦大學士福康安に大兵を授けてこれを討たしむ。康安等十月を以て臺地に着し、頻りに各地を徇へ、賊の本據なる大里杙を陥るゝや、爽文遁れて蕃社に匿る。即ち蕃社を進捜し、十二月遂にこれを得たり。而して莊大田も早く縛に就き亂纒かに平ぐ。此年諸羅縣の稱を改めて嘉義縣と爲す。蓋し柴大紀といへるもの、諸羅城を恢復

海賊蔡牽及朱潰の入寇

海盜入寇後における蔡牽統

するの後、更に賊兵の重圍に陥りしが、これを死守して籠城の功を完くせるを表彰したるなり。

嘉慶年間海賊に蔡牽といふものあり、福建の沿岸に出沒して抄掠を事としたりしが、同五年來りて鹿耳門を犯し、米數千石を奪ひて其黨朱潰に與へ、更に轉じて閩に入りしが、清兵の破る所となり、十年再び臺灣に入り淡水に停泊す。即ち山賊洪四老等と連絡し、光明の年號を用ひ、自ら鎮海威武王と稱す。爾來竹塹(新竹)滬尾鳳山東港鹿耳門を犯せしかど、守備の清兵能く防ぐ能はず人心恟たり。十一年また噶瑪蘭(宜蘭)に入寇し尋で鹿耳門を犯す。澎湖副將王得祿討つてこれを破る。蔡牽この後また臺灣を犯さざりき。時に朱潰は蔡牽と協はず、別に分れて鹿港淡水一帶の沿岸を劫掠したりしが、十二年鷓籠港に入るや、南澳總兵王得祿の襲撃する所となり、敗れて噶瑪蘭に入り、此の地を奪うて巢窟となさんとす、王得祿追撃して之を走らす、朱潰爲す可からざるを知り、重ねて來る事なし。臺灣はじめて海寇の難を免る。蔡牽朱潰の入寇は清朝に覺醒の力を與へし事多く、爲に海防の進歩を見た

治の改革
噶瑪蘭島の設
淡水安平打狗
鷓籠の開港

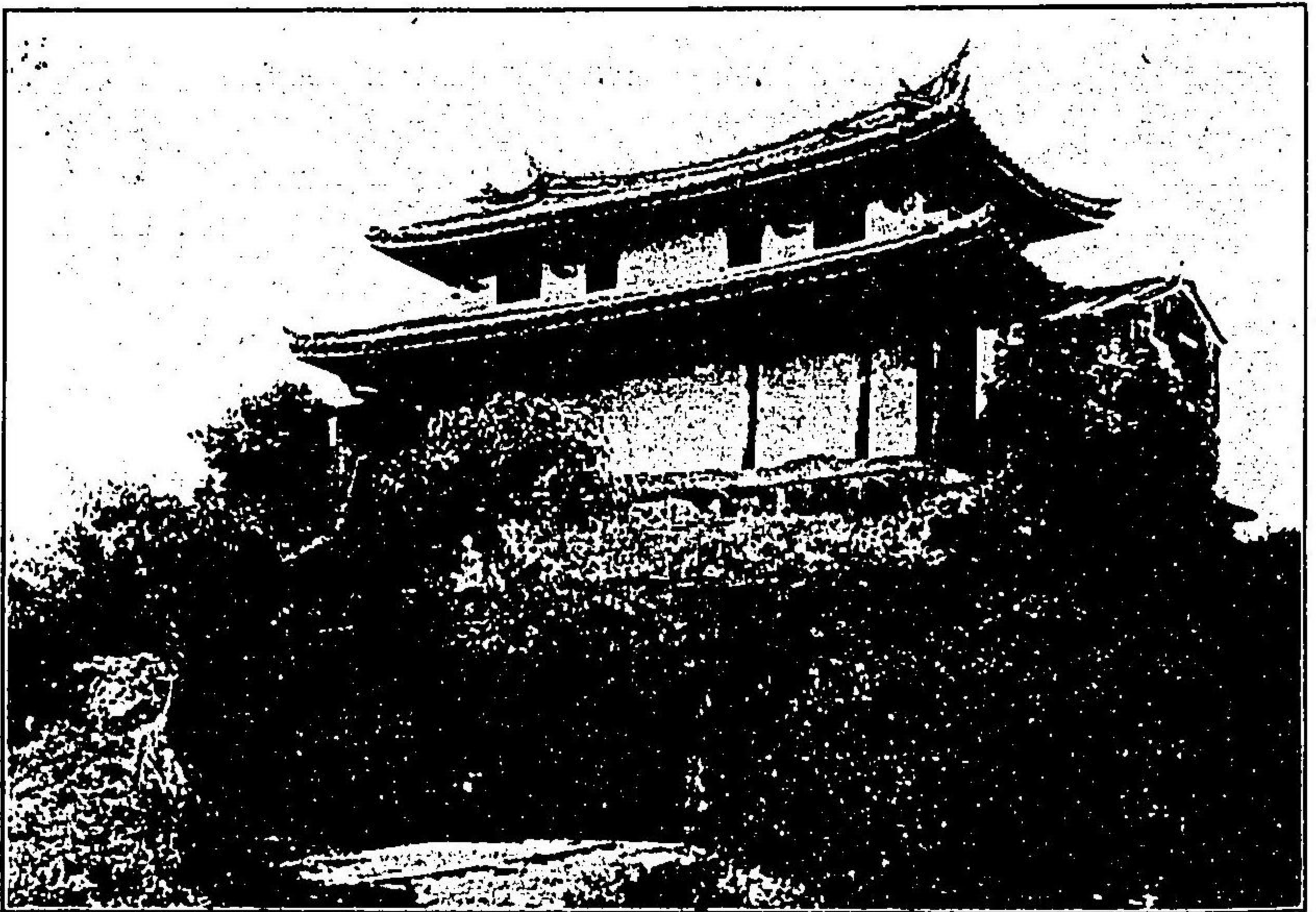
蕃地に於ける
英米人の被害

りしが更に噶瑪蘭の地の忽にすべからざるを思はしめ、嘉慶十五年これを行
政管轄に偏入し、もと化外の地、十七年噶瑪蘭島をおく。後ち宜蘭と改む。
咸豐元年西洋の汽船(いまだ何國たるを詳にせず)滬美及び鷓籠に來りて貿
易を行ひし事ありしが、八年英國ジャルチン、マッセソン會社及びデント
會社等は、臺灣の官吏と商業上の條約を締結し樟腦を購求せり。既にして十
年(西曆一八六〇年)清朝政府は淡水安平の二港を以て貿易港となし、同治二年
(西曆一八六三年)更に打狗、鷓籠の二港を開く。
同治五年(西曆一八六六年)英國軍艦ドーブ號臺灣の沿岸を測量せし時、其の
端艇は、南端なる南岬附近に於て土蕃バイソン族に襲撃せられしが、翌六年
シルヴィア號も亦同じ運命に遭ひ、次で米船ローヅア號も、南岬の南西なる七星
岩の沖にて沈没し、船員は逃れて龜仔兒の蕃地(恒春の東南岸)に漂着したるに、
バイソン族の爲に虐殺せらる。是に於て駐清米國公使バルリンカムは清國政
府と交渉を開きたれども要領を得ざるを以て、水師提督ベル艦隊を提げて蕃
社を攻撃すると共に、在厦門領事リジャンドル自ら蕃地に赴きて會長トケト

(甲) 臺南赤崁樓

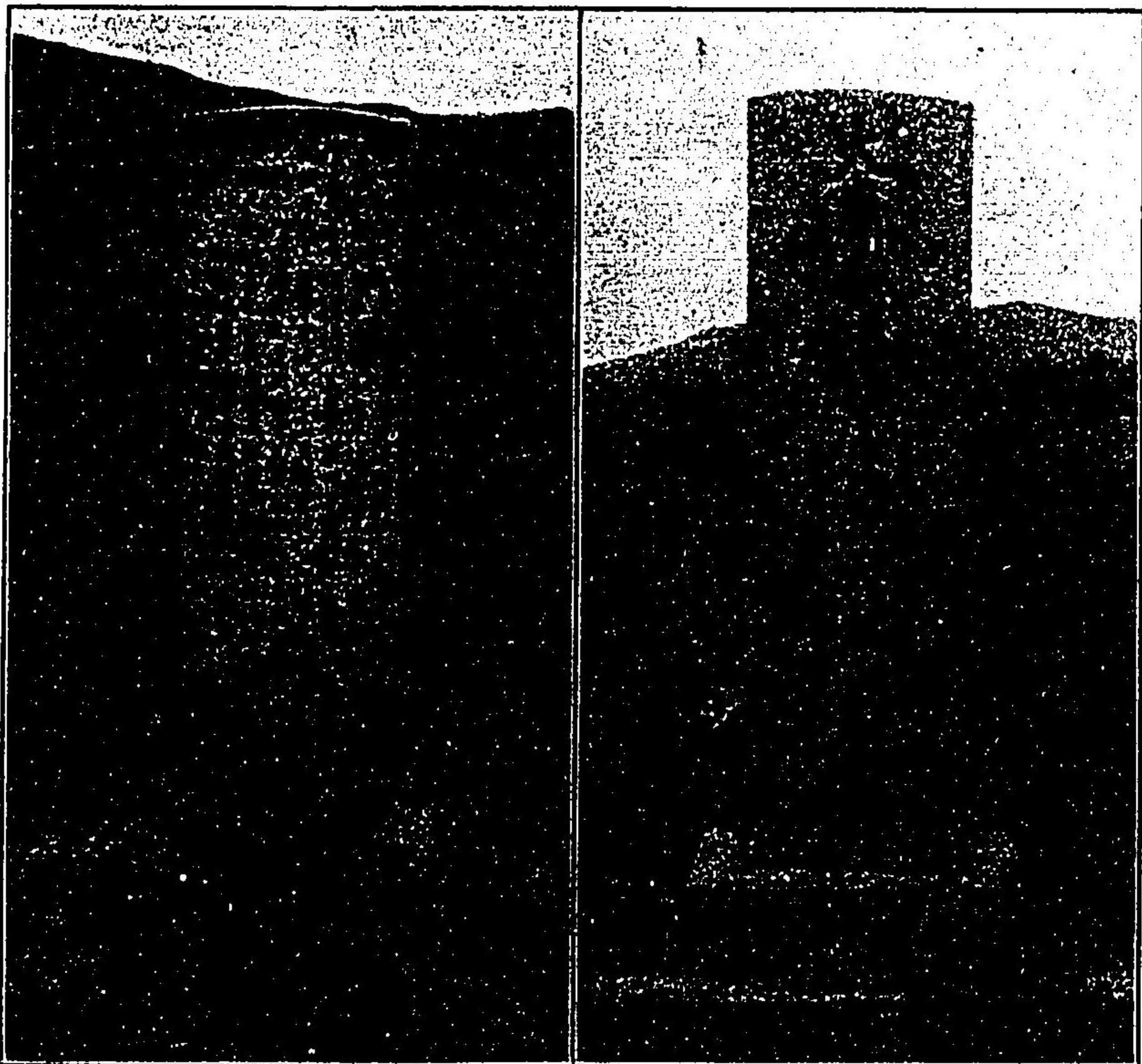


(乙) 臺南大南門

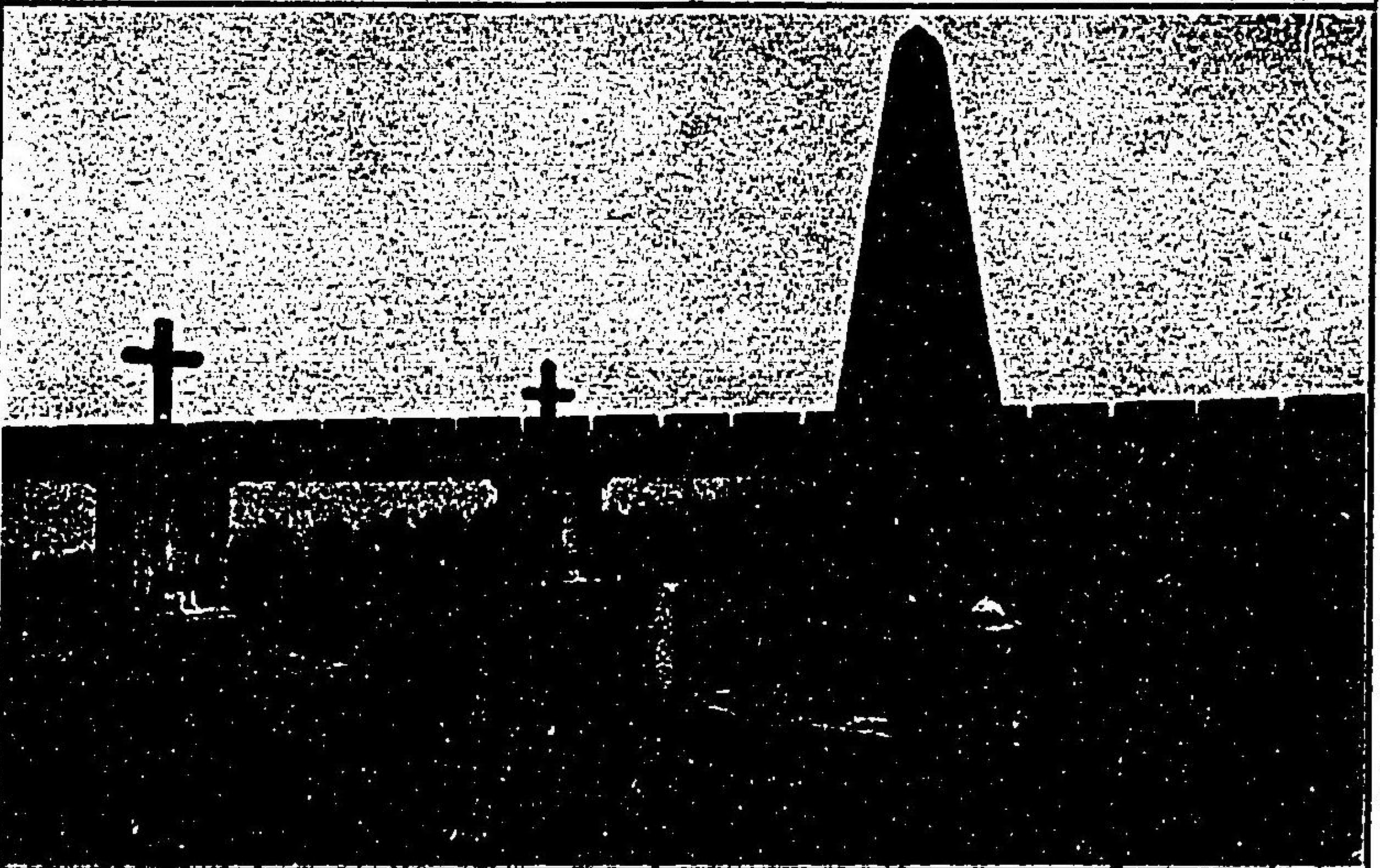


(第二十七圖)

(甲) 恒春廳四重溪琉球漂民の碑



(乙) 澎湖島佛國クルルベリ提督の墓



(第二十八圖)

日本の征臺

クと會見を重ね、爾來本島に漂著せる外人に對して相當の保護を加ふべき事を約束せしめたり。

英米人の遭難ありてよりいまだ幾もなく同治十年(明治四年)琉球の宮古島の船八瑤島(恒春の東海岸に漂着し、生存者六十六名の中、五十四名は牡丹社蕃(バイワン族)の屠殺を被り、僅かに十二名のみ虎口を脱するを得たり。その變の我國に達するや國論沸騰し、征臺の議内閣に起りしが、會、明治六年(同治十二年)外務卿副島種臣事を以て清國に使用するを以て其意を同國政府に傳へ、且生蕃の地は清國政權の及ぶ所なりや否やを問ひしに、これ化外の地にして政教の及ばざる所なりとの言質を得たり。加之此年備中の船また東海岸に漂著して殺害せられしかば、閣議遂に決し、翌明治七年四月陸軍中將西郷從道を臺灣征討總督、陸軍少將谷干城、海軍少將赤松則良を參軍となして臺灣を討たしむ。從道即ち日進孟春明光有功の四艦及三邦高砂の二船を率ゐ、五月長崎を發す、總軍凡て三千六百餘人なり。我軍の臺灣に著するや、まづ那嶠灣(軍城灣)に入り本營を龜山に設け、漸次